

特63
603

學 生 文 庫

筆拾貳編
新訂

益軒十訓

大町桂月校訂

東京
至誠堂發兌

明治
44. 9. 5
丙午

學生文庫に冕す

われ聞く、獨逸の中等程度の教育にては、力めて多く古典を課すと。其意に曰く、古典の知識なければ、人物、學問、事業、共に淺薄なるを免れずと。獨逸は新進の國なるが、學問歐米に冠たり、工業亦英國を壓せむとし、國富み、兵強きも、亦以ある哉。我日本は獨逸よりも猶一層新進の國なるが、一躍して世界一等國の列に入り、新興の勢、さすがの獨逸をして後に瞠若たらしめむとす。而して我國は三千年の金甌無缺の歴史を有し、萬世一系の天皇を戴き、世界無類の國體を有す。即ち我國は世界最古の國なると共に、世界最新の國也。其新興の原因を討ぬるに、獨逸の識者が認めて中等教育に實施せる所は、猶一層早く我國の識者が認めて實施せる所也。然るにわれ近時讀書界の趨向を見る

に、徒に奇を趁ひ、新を求め、皮相なる自然主義にかぶれ、危険なる外來思想にかぶれ、よろづ物質的となり、早く生活の安樂を求め、本を忘れて末に趨り、終に淺薄なる人間となり了らむとす。邦家の前途、嗚呼危い哉。余茲に慨する所あり。學生文庫を編み、古典的名著を選び、初學の士の讀誦に充てむとす。益ありて毫も害なきは、余の深く期する所也。前途有爲の士、願くは之に由りて、精神上の好食物を得よ。修養に供せよ。人格の深厚を致せ。餘裕を得よ。清き娛樂を得よ。猶謹んで告ぐ、善く書を読め。書に讀まるること莫れ。

大町桂月

益軒十訓中卷に冕す

益軒十訓上卷には、文訓、武訓、五常訓、童子訓を收めたり。今、中卷には、初學訓、君子訓、大和俗訓を收む。初學訓は、初學者に對する教訓にして、倫理の要旨を記述せり。第一卷に於て、人倫五常の大意を説き、第二卷以下、更に之を布衍し、細分して、父母を養ふに、其志を養ふと體を養ふとの二あるを示し、義理と利養との輕重を辯じ、又學問の道は善行を主とし、善行は孝弟を本とするを云ひ、天命に安んじ、名利の強ひて求むべからざるを論し、又家を保つには勤儉の三徳を要する由を述べて、儉約と齊喬との區別に及び、其他、堪忍、制欲の要を説き、心の躁急なるを戒め、鰥寡孤獨の愛憐を加ふべく、師友の擇ぶべき事等、大小約百三十の事項に就きて、例の委曲の筆を盡したり。

君子訓は、元祿十六年、先生七十四歳の時に著せり。所謂君子とは、在

上者を指したるにて、本書は、國君世を治むる要道を説きたるもの也。自序に曰く、凡そ民を治むるには、古の聖人の道を法とすべきことは言ふも更なれど、今の世の人、多くは經史に昧く、又官職に在る人は學ぶに暇なくして、古の經濟の道にうとし。爰に我が愚昧を忘れて、曾て聞ける所を述べて、聊か古の道の片端をあらはす。無學の人のため國字を以て記し侍ると。以て其意の在る所を知るべし。上卷に於ては、世を治むるに文武二道を兼備すべきこと、在上者の學問は詩文故事來歴などにあらずして、修身治國の道を知るにあること、公私の區別、政刑教の三要道などを記し、中卷には、賢者の選用、在上者は克く諫を納るべきこと、農民を愛護すべきことなどを述べ、下卷には、刑兵歲病の四に注意すべきこと、祭祀を慎むべきこと、其他、風俗の矯正、公事訴訟、賞罰等に關する心得を示し、全篇八十餘章、すべてこれ爲政者の金科玉條也。

大和俗訓は、修身禮儀作法の教訓也。全篇を爲學、心術、衣服、言語、

躬行、應接の六章に分ち、更に細分して説く所、約、四百條。爲學の章に於ては、人倫五常の要旨より、立志の要、謙と矜との説、學問の種類、格物致知の解、知行の合一、光陰の惜むべきことなどに説き及ぼし、心術の章に於ては、人心道心の區別、私慾邪念の戒、陰徳、言行の一致、七情の和平などを述べ、衣服の章には、衣服は身のおもてなれば、身に相應せる正しきものを用ゐるべき由を云ひ、言語の章には、言語を慎むべきこと、言を信にすべきこと、誹謗、誇言の戒、直諫、諷諫等に就いて辯じ、又躬行と應接との章には、善を好み、惡を嫌ふは、身を修め、道を行ふの始なることより、視聽言動皆禮に従ふべきこと、節義の貴ぶべきこと、人に交るには、禮義を正しくし、愛敬と恕とを旨とし、誹らず、怒らず、屈せずして、然かも侮らざるべきことなどに及び、例の平易の文、委曲の辭を川ぬ、説き去り、説き來りて、其旨をつくさざるなく、事に愷切ならざるなし。これ寶永五年、先生七十九歳の時の事也。

益軒の人物事業のあらまは、上巻に於て説きたるが、茲に少しく補はむとす。益軒の本領は、偉大なる教育家也。太宰春臺は妄に人に許さざるが、益軒だけには感服して、博學洽聞、海内比なしと褒めたり。されど、益軒は世の所謂物知りに非ず。詩文を善くしたれども、世の所謂詩人文人に非ず。詩もなり／＼作りたれども、歌をつくるを好みて、詩をつくるを好まず。詩は元來支那のものにて、日本人が如何に力をつくすとも、本家に及ぶべくもあらず。日本人は日本固有の歌をつくるべしと云へり。一種の道理ある見解也。翁は八十五歳にして歿しけるが、死に臨みて、詩二首歌一首を作れり。其詩に曰く、

平生心曲有誰知。常畏天威欲勿欺。存順沒寧雖不克。朝聞夕死豈不悲。

幼求斯道在孤憤。德業無成夙志乖。八十五年爲曷事。讀書獨樂是生涯。

其歌に曰く、

越し方は一夜ばかりの心地して

八十路あまりの夢を見しか

なる程、好みたりといふ歌の方がよし。好まざりし詩の方は上乘に非ず。大教育家が死に臨みて、たゞ詩にて思をのべたるまでなりと言へば、それでよき事也。翁の文章も通俗にして委曲を悉せる處に、その特色を見る。益軒十訓のみならず、他の著述にても、文字の美を弄せることなし。要するに、翁を見るには、大教育家を以てすべし。學者、詩人、歌人、文人など一方に偏したるものを以てすべからざる也。

さらば、益軒は大教育家として、如何なる資格を備へたるぞといふに、上は王公より下は兒童走卒に至るまでを教ふるに足るの識見と知識とを有し、政治、經濟、哲學、宗教、文學、語學、美術、音樂、本草の學までも窮め、机上の知識のみならず、足跡日本に遍く、社會萬般の理に通じ、其

人物、賢人の域に入り、然かも一生書を讀みて厭かず、人を教へて倦まず、著述は等身も管ならざりき。翁の如きは、實に我が教育史上の光彩也。その道を脱きたるは、二百年の昔なれども、其意の在る所を汲めば、今の世にも適切也。翁の道は、一時代だけの道にはあらざる也。

大町桂月

新訂益軒十訓中卷目次

初學訓

目次	
卷の一	三〇三
卷の二	三一七
卷の三	三三一
卷の四	三四五
卷の五	三六〇
君子訓	
上	三七三
中	三八六
下	三九八

大和俗訓

卷の一	爲學上	四一四
卷の二	爲學下	四四二
卷の三	心術上	四六三
卷の四	心術下	四九二
卷の五	衣服	五一六
	言語	五一八
卷の六	躬行上	五三四
卷の七	躬行下	五五九
卷の八	應接	五八一

新訂 益軒十訓 中卷

貝原益軒著
大町桂月校訂

初學訓卷の一

およそ、人となれる者は、父母これをうめりといへども、其の本をたづねれば、天地の生理をうけて生る。故に、天下の人は、皆、天地のうみ給ふ子なれば、天地を以て大父母とす。尙書にも、天地は萬物の父母といへり。父母は、まことにわが父母なり。天地は、天下萬民の大父母なり。其の上、うまれて後、父母の養を得て生長し、君恩をうけて身を養ふも、其の本をたづねれば、皆、天地の生ずる物を用ひて、食とし、衣とし、家とし、器として、身をやしなふ故に、およそ、人となれる者は、はじめ天地の生理をうけて生るのみならず、うまれて後、身をなはるまで、天地の養をうけて、身をたもてり。然れば、人は萬物にすぐれて、天地のきはまりなき大恩をうけたり。こゝを以

て、人のつとめてなすべきことわざは、わが父母につかへて力をつくすは云ふに及ばず、一生の間、つねに天地につかへ奉りて、其の大恩を報じ奉らんことを思ふべし。是なん、人となりて、つねにこころにかくべきことにぞあるべき。

◎人となるものは、つねに天地につかへて、其の大恩を報せんことをおもひ、父母につかへて、孝を行ふがごとく、天地に仁をつくし、わするべからず。仁とは、心にあはれみ有りて、人物をめぐむをいふ。是れ天のめぐみにしたがひうけて、天地につかふる道なり。是れ人の道とする本意にして、一生の開つとむべきわざなり。おこたるべからず、わするべからず。天につかへて仁なると、父母につかへて孝なるとは同じ。仁孝一理なり。人たる者の、必ず、しりて行ふべき理、これより大なるはなく、又、是より急なるはなし。すべて、人は、父母の家に居ては、父母に専に孝を盡し、君に仕へては、君に専に忠をつくすべきが如く、天地の中に在りては、天地につかへ奉りて、仁をつくすべし。人となる者、若し、かゝる大事をしらで、いたづらに日をおくり、世をすぐさば、一生をむなしくして、人となれるかひなかるべし。人となれる者、是を知らざらんや。是れ即ち、人の道とする所なり。此の外に、もし、道ありといはば、まことの道にはあらず。

◎天につかへておこたらずとは、人となる者、只、朝夕、天道の、眼前にありて遠からざることを思ひ、つねに天道をおそれうやまひてあなどらず、かりにも、天道をそむき、無道のことをなすべからず。天道にしたがひてそむかず、わが身をへりくだりて、人をあなどりほこらず、欲をこらへてほしまいにせず、天地のうみていつくしみ給ふ人倫を、あつくあはれみて、あなどらずそこなはず、天地の、人のためにつくり出し給ふ五穀と、よろづのたからを、わが一人の欲のために、みだりにつひやさず、次に、鳥獸蟲魚の生ける物をみだりにこころさず、草木をも、時ならずして、みだりにきらず。是れ皆、天地のうみ出しやしなひて、いつくしみ給ふ物なれば、これをあはれみ養ふは、天地の御心にしたがひてそむかざるわざなり。かくのごとく萬物をあはれむを、仁といふ。仁とは、あはれみの心なり。是れ、天地の御心にしたがひて、天地につかへ奉る道なり。人倫の内、親をしたしみ、次に、萬民をあはれみ、次に、鳥獸、およそ、生ける物をそこなはず。これ、天地の御心にしたがひて、仁を行ふ序なり。親を愛せずして、他人を愛し、人を愛せずして、鳥獸を愛するは、不仁なり。◎凡そ、人は天地のめぐみをうけて生れ、天地の心をうけて心とし、天地の養を得て身をやしなふ。かゝる天地の大恩をうけて、天地の内すみながら、天地のわれにあたへ給へる、心の徳をすて、保

たず、天地の道にそむきて行はず、其の上、天地の子として、あはれみ給へる人倫と、次には、鳥獸をそなひくるしめて、不仁なるは、天地の御心にそむきて、罪ふかし。是れ、天地のにくみ給ふ所なり。天道はおそるべし。あなどりて、そむくべからず。

◎人として、天をおそれず、人をおはれまらず。悪、これより大なるはなし。悪を行へば、天のにくみ給ふ所、天のせめのがれがたし。即時にわざはひあると、後に禍來るとのかはりあれども、悪をなして禍なきの理なし。又、天地の御心にしたがひてそむかざる人は、天地のめぐみありて、必ず、福あり。もしは、其の福早く來らざれども、後必ず、福有りて禍なし。もし、我が身に福なければ、必ず、子孫にいたりて福あり。是れ、必然の理なり。古の聖人の教明らかなり。聖人の言おそるべし。信ずべし、うたがふべからず。古を引くにも及ばず、近世にも、此のためし多し。

◎天地の生ずる所、人を貴しとす。是れ、仁義禮智の五常の性をうけて、人倫の道あり。是れ、人の萬物にすぐれてたふとき所なり。此の五常をうしなふべからず。これを失へば、天地にそむきて、人にあらず。そのうへ、人は、天地の生ずる五穀のよき味、鳥獸魚介のうまき肉をくらひて、身を養ひ、布帛をあたりにき、家に居て、風寒暑濕をふせぎて、身をやすんず。衣食家居の養は、父母主君の

恩によれりといへども、其の本は、皆、天地の生じ出せるたまものなり。されば、人は、かくのごとく、天地のきはまりなき御めぐみを受くること、萬物にすぐれたり。かゝる大恩をうけて知らざるは、むげにおろかなり。天恩を忘れて、人と、かく生れたる身の貴き理をいたづらになすは、口なし。

◎およそ、人は恩をしるべし。恩をしるを以て人とす。恩をしらざれば、鳥獸に同じ。君に忠し、親に孝するも、君父の恩を報ずる道なり。此の故に、恩をしれる人は、必ず、親に孝あり、君に忠あり。恩をしらざる人は、忠孝なし。忠孝なければ、人たるの道を失ふ。いはんや、人として、天地の大恩をわするは、天地のために、不孝の子なり、人道の本意を失へり。

◎凡そ、天地のうめる所の萬物、皆是れ、天地の氣をうけたりといへども、其の中につきて、人はかり貴きものなし。いかんとなれば、人は、仁義禮智信の五常の性あり。是れ、天地の心をうけて、本性とするなり。此の身、五倫に交り、生れつきたる五常の本性のまゝに順へば、五倫の道行はる。是れまづ、人の貴き大本なり。其の上、目に五色を別ち、耳に五音(宮商角)をわきまへ、口に五味(酸苦鹹)をしり、鼻に五臭(膻腥香)をかぐ。書をよみ、古を學んでは、天地の道をさとり、萬物の理に通じ、古今天下のことをしる。是れ、人の萬物にすぐれて、いと貴き所なり。故に、尙書に、人は萬物の靈

といへり。靈れいとは、すぐれてあきらかなるたましひあるをいふ。人は、全く、天地てんちの御心ごしんをうけて心とせり。此の故に、其の心れい靈れいなり。

◎天地の心とは、人と萬物ばんぶつをうみやしなひ給ふ御めぐみの道みちをいふ。其の理ことわり、天地てんちひらけしより後、萬世ばんせいまでにかはらず。一年につきていはば、年々としとしに、春は生じ、夏は長じ、秋はなきめて、冬はかくす。此の四時しじにめぐり行はるゝ道みちを、天道てんたうといふ。是れ、天地てんちの、萬物ばんぶつを生ずるめぐみの生理せいりなり。此の四時しじに行はるゝ道みちの名目なやうめくを、元亨利貞げんかうりていといふ。是れ、四時の理ことわりなり。これを天地てんちの道みちとす。天は地をかねる故に、すべてこれを天道てんたうといふ。仁じんとは、天地てんちの萬物ばんぶつを生じ養ひ給ふおはれみめぐみの理ことわりを、人の心にうけて、生れつきたるをいふ。仁じんを行ふの道みちは、まづ、天地てんちのうみて子として愛し給へる人倫じんりんを、あつくいつくしむにあり。人倫じんりんをあつくするの道みちは、先づ、父母ふぼに孝をつくすを本とし、主君しゅくんにつかへて忠を盡し、親戚しんせきをしたしみ、家人かじんをあはれみ、民たみをめぐみ、朋友ほうゆうに信あり。次に、萬民ばんみんをあはれむ。是れ、人倫じんりんをあつくするなり。次に、鳥獸てうじう蟲魚ちゆうぎよを愛し、次に、草木そうぼくを愛す。人倫じんりんは、わが同類どうるゐなり。天地てんちの、いとあつくあはれみ給ふ物なる故、我も亦、天地てんちの御心ごしんにしたがひて、人倫じんりんをあつくあはれむべし。次に、鳥獸てうじう蟲魚ちゆうぎよ草木そうぼくも、皆、天地てんちのうみ給へる物なれば、わが同類どうるゐには

あられども、すでに、人倫じんりんを愛して後、是をあはれむも、亦、天地てんちの御めぐみにしたがひて、天地てんちにつかへ奉る道みちなり。すべて、かくの如く、人倫じんりんと萬物ばんぶつに情なさけふかきを、仁じんといふ、仁じんとは、人と物とをあはれみめぐむ善心ぜんしんをいへり。天地てんちにつかへ奉りて、人の道ことわりとする理ことわりは、仁じんの外には出でず。仁じんは、義禮智ぎれいちをかねて、其の内にあり。

◎およそ、天地てんちにつかへ奉る道みちは、人倫じんりんと萬物ばんぶつとを愛するにあり。其の故いかんぞや。天地てんち、其のうめる所ところを愛し給ふこと、人の親おやの、子こをあはれむが如し。人倫じんりんと萬物ばんぶつは、天地てんちのうみて愛し給ふこと、るなれば、是を愛するは、即ち、天地てんちの御心ごしんにしたがひて、天地てんちにつかへ奉る道みちなり。故に天地てんちの恩おんを報はらぜんと思はば、先づ、わが心に、天地てんちよりうけたる仁じんをたもちて、其の心こころにしたがひて、五倫ごりん（君きん、父子ふし、夫婦ふうふ、長幼ちやう、朋友ほうゆう）をあつく愛し、次に、萬物ばんぶつを愛すべし。是れ即ち、天地てんちにつかへ奉りて、其の恩おんを報はらずる道みちなり。人の道ことわりの本意ほんいとすること、此の外ほかに、さらにあるべからず。人となれる者、つとめて、これをしりて行ふべし。

◎易えきに、天地たいとくの大徳たいとくを生といふといへり。生せいとは、天地てんちの萬物ばんぶつを生じて、めぐみ給ふ理ことわりをいふ。さきにいへる、天地たいとくの御心ごしん是なり。天地たいとくに在りては、生せいといひ、人の心に在りては、仁じんといふ。天てんにあり、

人にありて、其の名はかはれども、其の理は一なり。

◎天地の大徳をうけて、人の心に生れつきたる徳を、名づけて仁といふ。徳とは、生れつきて、我が物にし得たる善をいふ。仁は、即ち、人の心にそなはれる、あはれみめぐみの徳なり。是れ、人となれる者の、天にうけたる性なり。此の心は失はずして、人をあはれみ、物をめぐむをいふ。此の理をうまれつきたるを、性といふ。此の心を失はざるは、天地にしたがひてつひへ奉る道なり。もし、此の心を失へば、即ち、天地の御心にそむきて、人の道を失ふなり。

◎仁は、心の徳の總名にして、物をあはれむ理なり。仁をわかつては、仁義となる。義は、宜しきなり。宜とは、萬事に相應して、各、よき程に行ふをいふ。すべて、人倫萬物をあはれむは仁なり。是れ理一なり。親・兄弟・夫婦・親戚・家人等、其の外萬民をあはれむに、其のしたしきうとき、たかきひきりにつきて、輕重のわちありて、各、其の人に相應して宜しきを、義といふ。かくの如き、物によりて宜しきことかはれるは、分殊なり。理一と分殊との分をしるべし。仁義のわち、其の字義かくのごとし。

◎天地に陰陽あり。春夏は陽なり。秋冬は陰なり。人心に仁義あるは、天地に陰陽あるが如し。天道

は陰陽にて立つ。人道は、仁義にて行はる。易にも、天道を立て、陰と陽といひ、人の道を立て、仁と義といふといへり。孟子に、仁は人の心なり。義は人の路なりといへり。仁は人の生れつきたる心なり。仁なければ、人の心を失ふ。義は人の行ふべき道なり。義なければ、人の道を失ふ。

◎仁義を、又、こまかにわかつては、仁より禮出で、義より智わかれて、仁義禮智の四徳となる。一年をわかつては、陰陽となり、陰陽をわかつては、春夏秋冬の四徳となるが如し。禮とは、うやまひの心、仁のあはれみよりおこり、智とは、心明らかにして、よく善悪をしるをいふ。義の宜しくするよりわかれたり。しかれば、仁義を以て五常をかれ、又、仁を以て義をかれたり。

◎仁義禮智の、眞實にして偽なき理を信といふ。信はまことなり。まことなければ、仁義禮智も偽となり、萬の善も、皆、あたごととなり。仁義禮智の四徳に、信なくはへて五常とす。又、五性といふ。性とは、心に生れつきたる理なり。此の五性は、萬世まで、人にうまれつきて、かはらざる理なれば、五常といふ。百行萬善、皆、五常より出づ。五常を以て、萬善をかれたり。人の心とするは、此の五にあり。此の外に心を求むるは、天地聖人の道にあらず。

◎天地は、元亨利貞の四徳なり。元ははじまりなり。春の徳なり。亨はとほるなり。夏の徳なり。利

はとぐるなり。秋の徳なり。貞は正しきなり。冬の徳なり。又、春夏秋冬の理なり。此の道、古今に
 かはらず。春はあたゝかに、夏はあつく、秋すずしく、冬さむきも、春は草木生じ、夏はしげり、秋
 はなさまりみのり、冬はひそまりかぐるも、古今年毎に、常にしてかはらず。皆是れ、天道の誠なり。
 誠なければつねなし。人の心に信あるは、天道に誠あるが如し。信ありて、仁義禮智の徳實にしてお
 こなはる。

◎天地につかへて、仁を行ふを、仁人といふ。父母につかへて孝を行ふを、孝子といふ。父母につか
 へては、孝子となるべし。天地につかへては、仁人となるべし。不孝の子、不仁の人となるべからず。
 不仁の人、不孝の子、是れ、天地の間の大なる罪人なり。もし、わざはひなくして、世にたてらば、
 是れ、幸にして免れたるなり。

◎凡そ、人は、天地のうめる人倫と萬物とを愛して、そこなふべからず。中につきて、人は、我と一
 類にて、同じく天地の子なれば、人倫の内、親疎ありといへども、其の本をたづねれば、天地の間の
 人は、皆、我が兄弟なり。此の故に、萬物の内にて、とりわき、人倫をあつくするは、天地のうめる
 子を愛して、天地に事へ奉る道なり。天地のうみ給へる人を愛すれば、天地の御心よるこび給ふこと、

人の子を愛すれば、其の父母よるこぶが如し。是れ、天地につかふる孝の道なり。其の上、兄弟をし
 たしむ理なり。天地を父母とすれば、天下の人倫は、皆、わが兄弟なり。

◎人は、天地の性をうけて、心に天理を生れつきたれば、其の本性は、もとより善なり。萬物にすぐ
 れ、禽獸にかはれる所、こゝにあり。しかれども、食にあき、衣をあたゝかにき、居所をやすくし
 たるまでにて、人の道をしらざれば、禽獸にちかし。禽獸も、のみくらひ、身をやすくすることは、
 人にかはらず。人と禽獸のかはりは、只、天地の性にしたがひて、道を行ふと行はざるとにあり。古
 の聖人、人の、をしへなく、道をしらずして、禽獸にちかきことなうれひ給ひて、學問所をたて、師
 を立て、天下の人に、人倫の道ををしへさせ給ふ。しかれば、人となるものは、必ず、聖人のをしへ
 にしたがひて、學問をつとめ、人の道をしりて行ふべし。人の道とは、人倫をあつくする道なり。聖
 人のをしへは、人倫の道を明らかにし給ふ教なり。學者の學ぶ所も、同じく人倫を明らかにせんため
 なり。此の外に、人の心法なく、人の道なしとしるべし。

◎人倫に五あり。一には父子、二には君臣、三には夫婦、四には長幼、五には朋友なり。是を五倫と
 名づく。倫は類なり。天下に人多しとはいへども、皆、此の五倫にこもれり。なぢをばなどは、おや

にたぐひし、をひめひの輩は、子に類し、貴人尊者は、君に類し、萬民の、我よりいやしきともがらは、すべて臣に類し、兄弟從兄弟は、長幼の内にあり、等輩の人は、朋友に類し、道を傳ふる師は、君父にひとし。是れ、五倫を以て、天下の人をかけたなり。五倫の道とは、孟子曰、父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信、これなり。父は子を受するに、義理の教を以てし、子は孝を行ふに、其の力をつくし、君は臣をあはれみ、臣は身をわすれて忠をつくし、夫は婦に義あり、婦は夫にしたがひつかへ、長は幼を愛し、幼は長者にしたがひ、朋友はたがひにまことありて、善をすいめ悪をいさめ、相たすけてたのもしげあるべし。是れ、五倫の道なり。人の道として行ふべきこと、此の外にさらになし。此の外に道を求むるは、天地聖人の道にあらず。

◎およそ、人の道とする所は、天地より生れつきたる、五常の性を失はず、其の五性にしたがひて、五倫の道をあつく行ふにあり。五常をたもちて失はざるは、徳をたもちて心をなさむる理なり。五倫をいつくしみてあつくするは、行をつとめて身をなさむる道なり。心の徳をなさめ、身の行をあつくするは、是れ即ち、人の道にして、天地につかへ奉る孝なり。

◎天道より、わが心に生れつきたる理を、性といふ。仁義禮智信の五性はなり。これを五常といふ。

五倫にまじはる時、此の五常の、うまれつきの善なるまじにしたがひて行ひ、少しも人欲の私を以て妨げざるを道といふ。道とは、日々、人のゆきかよふべきすぢある道路の如し。故に、其の名をかりて、道といふ。我が生れつきたる自然の理の、行ふべき大道を行はずして、人欲にしたがひて、私を行ふは、たとへば、定まりてゆくべき大道をばゆかずして、ほりがけたとほり、いばらからたちの中をわけゆくが如し。中庸に、性にしたがふを道といふとは、性とは、人の心に生れつきたる五性をいふ。仁の性にしたがへば、父子をたししみ、臣民をいつくしみ、萬物を愛する、皆是れ、仁の道なり。義の性にしたがへば、君につかへて、忠を盡し、身をわすれ、老人をうやまひ、賢人をたふとび、利をこのまず、財をむさばらず、行ふべきすぢめの宜しきをうしなはざるは、皆是れ、義の道なり。禮の性にしたがへば、長幼貴賤のまじはりに次第あり、貴人と老いたるをうやまひ、いやしきとわかきをあなどらず、よろづの作法正しく、則を失はざるは、皆是れ、禮の道なり。智の性にしたがへば、夫婦の別正しく、人の善惡と、萬事の邪正をよくしりわきまふる類、皆是れ、智の道なり。信の性にしたがへば、朋友のまじはりいつはりなく、萬の事まことあり、はじめをはりありて、約束たがはざる、皆是れ、信の道なり。此の五性にしたがひて、五倫を行ふを道といふ。中庸に、性にしたがふを

道といふはこれなり。

◎五倫の道は、父母につかへて、孝を行ふを以て本とす。わが身は、父母よりうけたれば、父母は、わが身の本なり。其の上、わが生れし初より、父母の養育によりて人となれり。生ると、育はると、二の恩あり。其の恩のふかく大にして、きはまりなきこと、山よりたかく、海よりもふかくして、たとへをとるに物なし。天地の、われをうみ、我を養へるにひとし。この故に、孝を以て、仁を行ふの本とし、人倫の道の初とす。聖人の道は、五倫の道をあつく行ふを以てむれとす。ながにつき、父母に孝をつくすを、五倫の初とし、百行の本とす。故に、古の君子は、孝において、尤もあつく行へり。よろづ才行うるはしくとも、孝におろそかなれば、其餘は見るにたらず。故に、人の子たる者は、まづ、父母につかふる道を、早くまなびて知るべし。孝の道にうときは、おろかなることの至なり。

◎父母につかふるに、愛敬の二の心法あり。此の二は、孝子の心とする所なり。人の子たる者、必ず、これをしるべし。愛は、いつくしむとよむ。親をいとをしむなり。敬は、うやまふとよむ。つゝしみて親をうやまひおそるゝをいふ。愛なければ、父母にうとくおろそかにして、情うすし。敬なければ、

父母をあたどりかるしめておこたる。愛のみにて敬なければ、犬馬を養ふに同じ。敬すぎて愛すくなければ、父子の間へだゝりうとくなりて、他人のごとし。父母の心樂します。此の故に、愛敬二がらいたらざれば、孝にあらず。愛敬の心を以て、よくおやを養ふを孝とす。二の者、鳥の兩翼のごとく、車の兩輪のごとし。一をかくべからず。

初學訓卷の二

父母を養ふに、養志と、養體との二あり。養志とは、父母の心にしたがひてさからはず、つねに、父母の心をよろこばしめ、たのしましめ、憂へ苦しみなからしむるをいふ。朝は早くおきて、父母の安否をうかがひ、夕は父母の寢所をやすくし、朝夕と、晝と、折々、父母にまみえて、うとくおろそかならず。むつまじくして、又うやまふべし。父母にまみゆるは、まづ、わが顔の色をやはらげ、言の聲をよるこばしくし、父母の氣體の安否をうかがひ、其の時日の要用をいひのべ、尋ね問ひ、世の中のありしことども、つまびらかに物がたりして、父母の心をなぐさめ、父母のをしへあらば、つゝしんできくべし。父母われをよび給はば、はやく行くべし、遅くしておこたるべからず。父母われにな

しへ命ずる事あらば、つゝしんどき、つとめてはやく行ふべし。ゆるやかにすべからず。わするべからず。もし、忘ることならば、書きつけおきてつとむべし。わすれておこたるべからず。いとけなき時、父母をしたへる心を失はず、年たけて後も父母を思ひしたひてわすれず、父母に對するになづしく愛敬二ながら心にありて、顔色言葉にこやかにのどやかにして、うやうやしく父母の心にとがはず、父母の前に久しく在りて、其のをしへなき、物がたりして、親をなぐさめ樂しましめ、其の志に背かず、わが心にも、父母に對して、物がたりするを樂しみ、父母のよろこべるを悦ぶべし。もし、老いたる人を、むつかしくおもひ、久しく相對するを、ものうく興なくおもひて退屈し、うらめしくいとひ苦しむは、愛敬二ながらかけたるなり。大不孝といふべし。孟子に、大孝は、身を終るまで父母をしたふといへり。是れ、いとけなき時、父母をしたへる心を、一生の閒失はざるなり。慕の字、身を終るまでわするべからず。又、外へ出づれば、必ず、父母にまうし、歸れば、必ずまづ、父母にまみえて後、わが所に退く。行きてあそぶに、常の處ありて、みだりにゆかず。習ふに、つれのわざありておこたらず、わが身の行をつゝしみつとめて、不義無禮の行なく、氣ずぬにして放逸なるわざなく、悪友に交はらずして、父母にうれへ心づかひなからしむるは、是れ、養志なり。

◎養體とは、父母の口腹身體をやしなふをいふ。わが家の力になるべきほどは、飲食を味よくといのへ、父母の好み給ふ物をとひてすゝむべし。富貴の人の子も、みづから飲食をあんばいし、其の味のよしあしと、ひえたるとあた、かなるとをこゝるむべし。又、夏冬をりをりの身になへる衣服をこしらへて、これをすゝめ、居所寢所を安からしめ、冬は温に、夏は涼しくし、風寒暑濕をふせぎ、身にしたがる調度、もろもろのうつはもの、事かけざるやうにとのへすゝむべし。およそ、父母の身を養ふには、飲食・衣服・居室・器物を不足なくそなふるにあり。子たる者、これを心にかけいととなむべし。おろそかなるべからず。年老いては、脾胃よく、元氣ともしければ、飲食の養、尤もくはしかるべし。もし、財あらば、日々に、味よき物をすゝめずんば有るべからず。古人の詩に、人生有祿親白頭、何能一日無甘饌。又曰、古人一日養、不以三公換。又老人は、體氣よわきゆる、風寒暑濕にやぶられやすし。其のふせぎをきびしくすべし。飲食と、風寒暑濕にやぶられて、節にたがふことすこしなりといへども、病となりて、書をなすことは大なり。おこたりなく、其の初をふせぐべし。行立坐臥に、つねに心をつけて、たすけたもつべし。是れ、體をやしなふなり。父母に仕ふるに、志を養ふと、體を養ふとの二なければ、孝の道行はれず。内には愛敬の二をたもち、

外には養^ヒ志^ヲ養^フ體^ヲの二を行ふべし。是れ、愛敬^{愛敬}の心を以て、父母を養^カふ孝^{カウ}の道なり。只、體^體を養^養ふのみにて、志^志をやしなはざれば、孝^孝にあらず。其の身^身無^無禮^禮不^不義^義を行ひ、父母をうれへしめば、たとへ、日々にいかなる味^味よき口腹^{口腹}の養^養をすゝむとも、不^不孝^孝なるべし。此^此の内^内外^外二^二の事^事そなはらざれば、孝^孝の道^道にあらず。是^是れ、人の子^子となれる者の、必^必ず、しりてつとめ行^行ふべきことなり。

◎もし、父母の身に過^過あらば、子^子たる者、わが顔^顔を悦^悦ばしめ、聲^聲を和^和らげ、言^言をゆるやかにして、やうやくいさむべし。父^父母^母いさめを川^川ひずして、かへつていからは、いさめをまづやむべし。父^父母^母の心^心にそむくべからず。時^時過^過ぎて、父^父母^母のけしきよき時^時、又^又、いさむべし。はげしくいさめて、父^父母^母のこゝろにさからふべからず。

◎およそ、孝^孝の道^道は、父^父母^母の存^存生^生の閒^閒、よくつかふるのみならず、父^父母^母死^死して後^後、終^終をつゝしみて、はうぶりをあつくし、遠^遠きをおひて、時^時節^節の祭^祭をおこたる可^可らず。又^又、わが身^身を終^終るまで、父^父母^母を思^思ひしたひて忘^忘るべからず。わが一生^{一生}の閒^閒、身^身をつゝしみて、行^行を正^正しくして、わが身^身をはづかしめず、父^父母^母の名^名をけがさざる、是^是れ亦^亦、孝^孝の道^道において、おもんずる所^所なり。武^武士^士は、武^武勇^勇をむねとして、君^君に忠^忠するも、亦^亦孝^孝の道^道なり。もし、戦^戦場^場にて、いさみなくおくれをととり、或^或は、變^變にのぞみて、節^節

義^義を失^失ふも、我^我が名^名をけがし、親^親をはづかしめて、大^大なる不^不孝^孝なり。婦^婦人^人の、夫^夫にそむき不^不義^義なるも、大^大なる不^不孝^孝なり。

◎君^君は、我^我をやしなひ給^給ひて、父^父母^母・妻^妻子^子・奴^奴婢^婢も、皆^皆、君^君恩^恩によりてはごくみ、衣^衣服^服・居^居室^室・器^器物^物・萬^萬の財^財用^用まで、皆^皆是^是れ、君^君のたまものなり。其^其の恩^恩甚^甚だ大^大なり。つねに、其^其の恩^恩を思^思ひて忘^忘るべからず。こゝを以^以て、君^君につかふる人^人は、ひとへに、君^君のために、忠^忠をのみ志^志して、私^私をわすれ、わが身^身をかへりみるこゝとなかれ。

◎君^君過^過あらば、諫^諫むべし。君^君の寵^寵を失^失はんことをおそれて、わが身^身を愛^愛し、私^私すべからず。君^君をいさむるに、君^君の悪^悪をいひあらはし、言^言をはげしくして、いかりあらそふべからず。君^君の心^心の善^善なる所^所、明^明らかなる所^所に本^本づきて、それをほめておしひるめ、あしき所^所、くらき所^所におし及^及ぼすべし。斯^斯の如^如くすれば、其^其の諫^諫入りやすし。是^是れ、諫^諫をいするに、まどよりするの理^理なり。あしき所^所くらき所^所よりは、いさめ入りがたし。故^故に、君^君をいさめ、親^親をいさむるには法^法あり。其^其の法^法をまなんぞ知るべし。

◎君^君臣^臣父子^子は大^大倫^倫なり。故^故に、忠^忠孝^孝の二^二は、殊^殊に、ちからをつくすべし。よろづのこと、學^學ばざれば、

誠まことの志ありても、其の道みちをしらざれば、忠が不忠になり、孝も不孝になる。故に、殊更ことさら、忠孝の道をよく學まなび、其の法はをしりて行なふべし。古人も、學問がくもんは、忠と孝とを行ふ所なりといへり。萬善ばんぜんありといへども、忠孝の道みちうすくば、君子くんしとすべからず。

◎夫婦ふうふは、別わかれ道をとす。別とは、内外貴賤きせんのわちありて、混亂こんらんせざるなり。夫婦は、子孫の相つづく故にして、人倫じんりんのはじめなり。夫は外ををさめ、婦は内ををさむ。夫は、婦に禮義れいぎ正しく、婦は、夫に和順わじゆんなるべし。然るに、馴なれしたしきにかまけて、敬と和とを失へば、其の道たゞず。婦人は、多くは愚おろなり。道にたがはば、をしへ正ただすべし。怒いかるべからず。怒れば和を失ふ。

◎兄弟どうばうは、同胞どうぼつのしたしみ、父母ふぼにつぎたる大倫だいりんなり。三親さんしんの内、父子夫婦ふさいよりも、まじはり久しきは兄弟どうばうなり。其のしたしみ久しきを樂たのしむべし。兄は、弟に愛あいふかく、弟は、兄に敬あやまつくすべし。兄は、弟あしとて、似にせて愛あいをうすくすべからず。弟は、兄惡にくしとて、似にせて不敬ふけいなるべからず。各、わが道を盡つくすべし。兄は、父ちちにつぎてたふとむべし。弟は、父母の子なれば、我が子こより愛あいすべし。◎朋友ゆうざうは、信しんをあつくし、たがひに善ぜんをすゝめ、惡あくをいましむ。是れ、朋友の道なり。もし、過惡くわあくを見ながらいさめざるは、信しんなきなり。朋友の道みちにあらず。又、朋友は、たのもしげありて、難なんあれば

相助け、患うれひあれば相救あひすくふべし。古の人いにしへのひとは、朋友ゆうざうの交まじはりあつく、たのもしげふかくして、今時の朋友いまのゆうざうの交まじはりうすきが如ごとくならず。是れ、古今人情ここんにんじやうのかはれるなり。凡そ、人倫じんりんの道、朋友ゆうざうのをしへいしめぬの助たすけによりて立つ理ことわりなれば、朋友ゆうざうも亦また、おもき人倫じんりんなり。道を教をふる師しも、亦また、朋友の内うちにて、尤なほもおもしろ。君父くんふと同じく貴たかぶべし。技藝ぎぎの師しは、道ををしへらるゝ師しには及およばざれど、是れ亦また、我われに恩おんあり。厚あつくすべし。凡そ、人倫じんりんは、高下親疎かうげしんそあれども、皆みな、わが一類いちるかなれば、仁愛にあいふかく情なさけありて、つとめてあつく行なふべし。聖人せいじんの教をふる所ところ、學者がくしやの學まなぶ所ところ、人の道とする所ところ、皆みな、人倫じんりんにあり。人倫じんりんにうすきは、情なさけなき不仁ふじんの人なり。人道じんどうを失へるなり。

◎人倫じんりんに交まじはりるには、はじめをはりあつくすべし。うすくすべからず。或は、はじめに厚あつけれど、なほりにうすくするは、人に交まじはりる道を失へるなり。君子くんしの交まじはりは、久しくしていよいよあつし。凡そ、人に交まじはりるに、四恩しおんあり。又、四本しほんとす。天地の恩おん・父母の恩おん・主君の恩おん・聖人の恩おんなり。天地は、生うみの初はつなり。我われをうみ、我われをやしなひ給たまふ大本たいほんなり。父母は、生うみの本もとなり。主君は、養やしなひの本もとなり。聖人は、教をの本もとなり。天地てんちにあらざれば、生せい養やうのはじめなし。父母ふぼにあらざれば生せいれず。主君しゆくんにあらざれば養やしなひはれず。聖人せいじんにあらざれば、教をなくして、人の道みちをしらず。書をよみ、學問がくもんする人は、ことさら、聖人の

恩あつし。書をよまざる人も、おやには孝すべく、君には忠すべきことをしり、兄弟の愛、夫婦の別をなせるは、天性の良知なれど、又、しかしながら、聖人の教、あまねく、わが日の本まで傳はれる故なれば、無學の人も、聖人の恩をかきことを想ふべし。此の四恩は、人の本なり。人たる者、つれにたふとびて、わするべからず。身を終るまでつとめて、其の恩を、必ず、報すべきことなり。四恩にかぎらず、人倫には、必ず、恩をうくる人あり。わするべからず。

◎今の世に生るゝ人、亂世にあはず、治世にすめるは、大なる幸なり。是れ、世を治め給ふ大君の御めぐみなり。大君は、たとへば、天地を大父母とするが如し。主君の大なる大主君なり。其の御威徳によりて、世をさまり、わが身安樂に此の世にすめれば、是れ亦、四民(士農工商)ともに、大恩をかうぶれり。其の御めぐみをあふぎて、わするべからず。

◎いにしへの亂世の時をきくに、力ある者は、つねに干戈を事として、しばしば戦にのぞみ、力なき者は、糧をつゝみて、時時、山林ににげかくる。一日も、安堵の思なし。これを思ひて、今の太平の御代の、安穩にして無事なるを樂しむべし。

◎農工商は、君につかへずといへども、又、其の國郡をなさめ給ふ君恩をわするべからず。大君の

御めぐみによりて、かゝる太平の樂をうくることをよるべし。

◎國土をなさめ給ふ君は、民をめぐみをさむる役人にて、民をいつくしみめぐむを以て職分とす。是れ、民の父母なれば、其の巨下と萬民を愛して、情ふかくあはれみあつかるべし。われ一人の樂を專にして、民をくるしましむるは不仁なり。上仁あれば、民も亦、其のめぐめになづきて、君をあふぐこと、父母の如くおもひてわすれず。上は下をあはれみて仁あり、下は上をたふとびて義あるべし。上仁あり、下義あれば、上下和合し、國土平安なり。一條内大臣の歌に、民やすく國ゆたかなる御代なれば君を千とせとたれかいのらぬ、といへるが如くなるべし。君を千とせと、萬民のいのるは、君の徳なり。まことにめでたくたふとぶべし。

◎凡そ、人に義理あり。利養あり。義理は、天道にしたがひて、仁義の心をたまち、五倫の道を行ふをいふ。利養は、四民ともに、各、其の家業を勉め、衣食居所を求むるいとなみをして、身を養ふをいふ。義理は心を養ひ、財利は身を養ふ。凡そ、人の、日夜いとなむべきこと、此の二の外にこれなし。然るに、義理の心を養ふは、至りておもく、利養の身を養ふは、義理にくらぶれば、甚だかるし。此の二の輕重をしりて、義をたつとび、利をいやしむべし。義を貴び、利をいやしむは、君子の

心なり。利を貴び、義をわするは、小人の心なり。君子小人の別は、義と理との間にあり。

◎おおよそ、人のこのむこと多しといへども、其の大なること三あり。一には、富貴をこのむ。二には、長生をこのむ。三には、義理をこのむ。此の三の内、輕重あり。富貴をこのむより、長生をこのむはおもく、長生をこのむより、義理をこのむはおもし。人の好む所の輕重、おのづからかくの如くなるのみならず、このむべき道理の輕重も、亦、おのづからかくの如し。

◎此の三は、天の下のいきとしける人、高きいやしき、さかしおるかなる、皆、是をこのまざる人なし。まづ、富貴をこのむより、長生をこのむことおもしろし。いかんぞや。富貴とは、祿多きを富といひ、位高きを貴といふ。富は國土をたもち、貴きこと國王となるは、富貴の至極なり。もし、人ありて、なんぢに國土をあたへ、王位をゆづるべし。しからは、なんぢが命をうばふべしとあらば、いかなる愚人も、いのちを失ひて、國土と王位を得んと思ふ者はあらず。是れ、大富貴をすて、命をいきんことをねがふこと、かくの如し。然らば、富貴をこのむより、長生をこのむはおもきにあらずや。

◎長生をこのむより、義理をこのむことおもしろしとは、いかんぞや。君とおやとのため、義を見て命

をすつるはいふに及ばず、かりそめに、友につれだち道をゆくにも、むかひより、悪人來り、行きあひて、不慮に、友と口論し、戰に及ぶ時、友を見捨て、にげ去ることは、士ほどなる者はせず。是れ、命より、義理はおもき故にあらずや。又、わづかなる祿を得て、君につかふる下部も、主人のため、いのちをすつるはめづらしからず、一言のはづかしめをうけても、義において忍びがたく、命を捨つるならひなり。國土と王位にもかへざるおもき命なれども、義理は、命よりも、はるかにおもき故に、いかなるいやしきおるかなる下部といへども、命を捨て義理を行ふ、是を以て、長生をこのむより、義理をこのむことおもしろしと知るべし。ただ、賢人のみ、此の心あるにあらず。諸人、皆、此の心あり。是れ、人の本心なり。只、賢人のみ、常に此の心を失はず。さきにいへる、利養の身をやしなふはかくく、義理の心を養ふはおもしろしとは、是をいふなり。しかれば、義理は、至りておもしろく、利養は、身のためせちなりといへども、義理にくらぶれば、いたりてかるし。こゝを以て、程子も、義に對なしといへり。無對とは、義の貴きにくらぶべきものなしといへるこゝろなり。天下に、義ほどおもしろ物なければなり。しかるに、愚者は、利養のために道をわすれ、少の利欲にめづり、大なる義理を失ふは、是れ、私欲の迷にて、本心にはあらず。本心をうしなへば、知もぐらくなる。義理を捨て

て、財利をとるは、たとへば、十斤の金を捨て、一斤の銅をとるが如し。輕重と貴賤をしらざるなり。愚なりといふべし。愚人も、義理をこのむ心あれど、私欲にまよひて、義理のおもきことをわする。是れ、本心を失へるなり。かるき財利をむさぼりて、至りて貴き義理を捨つるは、たとへば、雀をとらんとて、寶玉をつぶてにして、なげうつが如し。

◎人の身のわざは、言行の二にあり。是をつしみて、過すなくするは、身をなさむる道なり。およそ、人は、言は、つねにあまりあり、行は、つねにたらず。言をまことにし、行をあつくつしむべし。言は、過ぎやすく、あやまりやすし。つしみて、みだりにいふべからず。行は、常におこたりやすく、不足多し。おこたりなく、するどにつとめ、あまりある程あつく行ふべし。

◎心を天官といふ。身の主にて、思を以て官とす。耳・目・口・鼻・形を五官といふ。耳にきき、目に見、口に物いひ、物をくひ、鼻に香をかぎ、形はうごく。是れ、五のつかさどりなり。官とは、つかさどるなり。役をつとむるをいふ。心は、五官の君なり。五官は、心の使ふものなり。心によく思案して、五官のひがことを禁じ、五官の役をつとめしむるは、たとへば、主人の臣下をつかふに、各、其の官をいひつけて、つとめしむるが如し。かくのごとくすれば、理順にして、事をさまる。もし、思案

なく、五官を制せざれば、五官ほしいまゝにして、見るまじき非禮を見、きくまじき非禮をきき、いふまじき非禮をいひ、うごくまじき非禮をはたらく、是れ、心に思案なく、五官にまかせて、心の官をうしなへるなり。たとへば、愚なる主人は、下人を制するちからなく、かへつて、下人より制せらるゝが如し。逆にして、家をさまりがたし。

◎人の心は、身の主なり。心の官は、思ふことをつかさどる。思案なければ、心の官を失ひて、職分空しくなり、家に主なく、軍に大將なきが如し。耳・目・口・體の欲にひかれ、悪にながれ、亂れてなさまらず。毎日口にいふこと、身に行ふことを、事ごとに、心に思案しつしみて、言を出し、わざを行へば、あやまりすくなく、後悔すくなし。人のあやまりをなし、悪を行ふは、皆、思案せざればなり。よく思へば、過惡なし。過惡なければ、後悔なし。凡そ身の行は、後悔なからんことを思ふべし。

◎ひろく書をよみ學問しても、くはしく思はざれば、道理に通せずして、明らかならず、心に得がたし。孔子も、學んで思はざればくらしとのたまへり。古今、書をよむ人は多けれど道を知る人稀なるは、書をよみたるのみにて、思はざればなり。思へば、よくふかき理に通ず。萬の藝能も、只、つ

とめたるばかりにて、思案の工夫なければ、其の藝進まざるが如し。思の工夫、其の益大なるかな。
 ◎およそ、人となりては、つねに、愛敬の心をたもちて、しばしも失ふべからず。愛とは、人をあはれむをいふ。人をにくみりとんぜざるなり。其の交のしたしきうときによりて、愛の厚薄、品はかはれども、すべて、うときもしたしきも、愛せずといふことなかるべし。敬とは、人をうやまふをいふ。人をあなどりかろんぜざるなり。其の位の高きひき品によりて、敬の淺深はかはれども、すべて、うやまひあなどるべからず。愛は、したしきより生ず、敬は、貴きより生ずれども、うときをも愛し、いやしきをも敬するは、眞の愛敬なり。親疎貴賤、すべて愛敬するは仁なり。親疎貴賤の品によりて、厚薄淺深あるは義なり。愛敬の二は、善心なり。善をおこなふとは、愛敬を行ふなり。是れ、人倫をなしたしむの道、即ち、天地につかへ奉る道なり。

◎人をそしるは、わが同類なうとんじにくみてそこなふなり。是れ、不仁にして愛なきなり。同類をあなどりかろんじて、ないがしるにするは、不敬なり。無禮なり。不仁無禮は惡なり。尤もいましむべし。人をそしりて、たとへ、理にあたるとも、厚き道にあらず。況んや、實に過ぐるをや。人をそしるは、道理にそむくのみならず、必ず、身の禍となる。人をそしれば、人も亦我をそしる。天に

むかひてつばきはくが如し。そしらるゝ人は、一生の恨となる。人をそしりて、人しるまじきと思ふは愚なり。惡事千里をゆく理あり、壁に耳ありと思ふべし。なかにつきて、君上をそしるは、大不敬にして、其の罪大なり。古語にも、臣の惡は莫大ニ於 誹君といへり。もし、人ありて、君上をそしらば、わが身は、口をつぐんでいふべからず。わが身、政道にあづからずんば、國家の政事を論ずることなかれ。君上のひがごとありとも、臣たる者は、かくしていふべからず。古語に、其の國に居ては、其の大夫をもそしらずといへり。是れ、忠厚の道なり。況んや、君をそしるべからざることを、いふに及ばず。

◎世にまじはるには、勢をしるべし。勢つよきには、我に理ありてもがちがたし。がちがたきをしたらば、あらそひがたかるべし。されども、時めける勢ある人にしたがひて屈するは、へつらへるなり。

初 學 訓 卷 の 三

人となりては、いとけなき時より其の父兄となる人は、其の子弟に、書をよませ、道を學ばしむべし。學問の道は他なし、只道をしりて、善惡を明らかにわかち、善を行ひ、惡を去るにあり。故に君子

の學問は、仁心をたもち、つれに善を行ふを宗とす。善を行はざれば、博學にして、經傳に明らかなるも、無用のことなり。大人は、善を行へば其のほどこしひるし。しかれども、きはめていしやき乞巧といへども、善を行ふに志あれば、其の分に隨ひて、其の功多し。故に、學問する人は、只、つれに善をするに志ありて、日々、善を行ふなつとめとすべし。

◎善を行ふ道は、まづ、孝弟を本として、人倫をあつく行ふべし。ちからあらば、ひろくほどこし、衆をすくひ、貧賤にして下にありとも、其の身にしたがひて、善を行ふべし。人倫をあつくして、次には、鳥獸・蟲魚・草木までもあはれみめぐむべし。是れ、善を行ふ次第なり。

◎學問する人は、まづまことの心を本として、善を好みて、つれにつとめ行ひ、惡をきらひてつとめ去るべし。學問の道、善を行ひ惡を去るをむねとす。學んで書をよめども、善を好まず行はざれば用なし。わが身の過を改め、惡を去りて、善を行ひ、殊に、孝弟を本として、人倫をあはれみ、其の分に應じて、人にほどこしすくひ、其の位に隨ひて、人をうやまふべし。これ愛敬の二は、およそ、人にまじはる心法なり。

◎善を行ふに愛敬の心を本とすべし。其の人にしたがひて、愛敬に厚薄有るべし。

◎學問するに、道をしらんことを以て心とし、善を行ひて、人を愛し助くるを以て事とすべし。是れ學問の要とする所、本なつとむるなり。其のめあては、君子とならんことを期するを以て志とすべし。しからずして、才學のみに心を用ひ、是を以て、みづからほこり、人をあなどる故、書をよまざる時より、心さま、かへつて、惡しくなりもてゆけり。是れ君子となることを好まずして、小人となることを學ぶなり。書をよむによつてかへつて、小人となるは口をし。斯の如くならば、學問すれば、人品惡しくなると、俗人のいへるも、うべなり。かゝる學問は、せざるにしかず。されども、それによつて學問せざるは、たとへば噎ぶによつて食せざるが如し。食は日用の物なり。むせたるは、食する人の過なり。

◎學問の道は、人倫の道を行ひ人をあはれみめぐむを以てつとめとす。身をなさむるを以て根本とす。身をなまらざれば、人倫の道行はれず。天下國家の法なくしてなまらさず。身をなさむるの道は、易に所レ謂、見レ善則遷、有レ過則改を以て要とし、わが身にかへりみて、人をせめざるなつとむ。人の善を見てもうつらず、わが過あれども改めず、是は一向、道に志なき人なり。左傳曰、人非二聖人一誰無レ過、過而能改、善莫レ大レ焉。論語曰、過則勿レ憚レ改。尙書曰、改レ過不レ吝。やぶさかとは、なし

むないふ。過あらば、なしますして速に改むべし。學問の道他なし。只過をしりてよく改め、善にうつるをむれとすべし。學者、此の事を以て、つねに心にかけてつとむべし。過を改めんとはならば、まづ、わが過を知るべし。人の過は知りやすく、わが過は知りがたきは、人を見るには私なし、故に明らかなり。我が身には私して過惡をもしらず。わが身に過あれども、しらざるは愚なり。知りて改めざるは悪なり。其のつみふかし。明鏡と雖も、其のうらなてらさず。智者といへども、わが身をしるには暗し。故に、君子は、まづ、わが身をかへりみて、其の過をしるべし。其の上道ある人にまじはりて其のいさめなき、過を改めて善にうつる。是れ學問の益なり。子路は、人其の過を告げきかすればよるべり。こゝを以て、程子の言に、子路も亦百世の師なりといへり。人、わづかなる酒肴くだものなどの贈物をうけしだに、めでよるこぼぬものなし。いはんや、過をつけ、善言をすゝむるをや。これほど大なるめぐみあらんや。子路のよるこべること、うべなるかな。過をきくことをきらひ、いさめないふ人にいはるは、不善のいたりなり。わが身に過なきと思ふは、愚なること、是より甚しきはなし。いかんとなれば、前にもいへること、古人の言に、人聖人にあらず、誰か過なからん、過つてよく改むるは、善これより大なるはなしといへり。およそ人の惡事多きなかに、いさめないふ人をにくみきらひ、わが過をあらためざるほど、大なる惡なし。

◎人の身のわざ五あり。貌・言・視・聽・思なり。貌とは、身のかたちのうごきないふ。貌と、言と、視と、聽と、心に思ふと、すべて五のわざなり。思ふは、其の本なり。善をこのみ惡をきらひて、邪念をおこさざるは、是れ、思をつしみて、意を誠にするなり。凡そ、此の五事をつしみて正しくすれば、身をさまる。論語に、視と、聽と、言と、動と、禮にかなへば、即ち仁なることを説き給へり。右にいへる五事と同じ。人の身のわざは、視・聽・言・動の四にすぎず。四のわざに、皆、天然の則ありて、行ふべき道理あり。是を禮といふ。此の四のわざにつきて、すまじきことをするは、皆、非禮なり。心と身との非禮をいまして、非禮にして物を見、物をき、物をいひ、非禮にしてかたちをうごかすことなけれ。かくのごとくすれば、事々皆禮にかなひて、人欲の私なく、天理行はれて、本心の徳かけず。是れ即ち仁なり。仁とは、人の本心の徳なり。

◎天命とは、天道より生れつきたる福と、禍とあり。又時として、不慮に福あり、禍あり。富貴・貧賤・壽夭、皆、生れつきたる天命ありて、分限定まれる故、道なくして神佛にへつらひ祈り、身を屈めて權臣にへつらひ求めても、生れつかざる福祿は得がたし。人の生れし初め、天の陰陽の氣をうくる時、

厚薄ありて、其のあつきをうけたるは、富貴にして福あり。或は、いのちながし。薄き氣をうけたる人は貧賤にして禍あり。又いのちみじかし。又、時として不慮に出来る禍福あり。富貴なる人も、時の禍あり。貧賤なる人も、時の福あり。すべて、人のちからにてなし難きことは、皆天命なり。故に、諸の福と富貴とは、人力を以て得がたし。諸の禍と貧賤とは、人力を以て免がたし。すべて、人の富貴・貧賤・吉凶・禍福・壽命の長短、萬の事は、皆、陰陽の變化によりて、もとより生れつきて、定まれる天命あり。不幸なりとて、みだりにうれへなげき、或は、富貴・財祿をむさぼりて、へつらひ求むるは、愚なりといふべし。富貴・貧賤・吉凶・禍福、皆生れつきたる天命なれば、天命に任せて、むさぼり求むべからず。又、うれふべからず。天命を安んぜざるは愚なり。

◎人力を以て天命を得る道あり。士は君につかへて、よくつとむれば、君の寵を得て、祿あつし。農は、田をつとめてよくつとむれば、私のはひ多し、工商は、其の家業をよくつとむれば富む。およそ四民ともに、よくつとむれば、家富む。古語にも人生はつとめにあり、つとむれば乏しからずといへり。又儉約を行ひて、みだりに財をつひやさざれば、よく家をたもちて貧しからず。又、養生をよくつとむれば命ながし。是れ皆、人力を以て、天命を得る理あり。

◎天道は、人の善に福し、惡に禍し給ふ。是れ、人のわざの善惡によりて、天より、福と禍とをむくい給へる理なり。是は、天道の常理なり。うたがふべからず。又人の生質によりて富貴・貧賤・禍福・壽夭あり。或は時によりて、不意に、吉凶あり。皆是れ。陰陽の變化にして、人の生れつきにより、氣をうくること厚薄あり。厚き氣をうけたる人は、富貴にして福あり。薄き氣をうけたる人は、貧賤にして禍あり。又、長き氣をうけたるは壽く、短き氣をうけたるは天し。天の陰陽の氣をうけて斯の如くなれば、すべて天命といふ。

◎凡そ、萬の事、皆、天命なれば、人の力及びがたし、不幸なりとも。天命をやすんじて、うれふべからず。されども、人事をば盡すべし。人事を盡すとは、わが身をつとめて、行ふべきみちを定め行ひ、過をあらため善にうつりて、禍にあふべきつとみとがなからんことを求むるをいふ。病ある者の、つとめてよく保養するも、亦人力を盡すなり。是れ人力のつとめによりて、天命を得る理あり。かくのごとくにして、其の上は、天命にまかせて楽しむべし。うれへて心をくろしむべからず。

◎學者、讀書の樂きはまりなし。此の樂、無學の人にしらしめがたし。わが輩の如き愚者といへども、書をよめば、古の聖賢に、まのあたりまみえて、其の教をきくが如し。又、書をよめば、天地萬物の道

理に通じ、からやまとの天下古今の事を知る。其の樂大ならずや。

◎いまだ道なしらざる人は、酒にふひて醒めず、ねぶりてさめざるが如し。道をしれる人は、酒にふひて醒むる如く、ねぶりの覺めたるがごとし。故に、道をしれる人を、先醒といふ。此の醉さむる人まれなり。吾も人も、身を終るまで、醉ひてねむりさめず。されども、よく學んで、ひさしく此の道に志ある人は、おそくとも、さむる理あり。少し學べば少しの益あり。大に學べば、大に益あり。益あらずといふことなし。されども、學びやうあしくして、善を行はず、人をあはれませんが、我が身にほこり、人をそしりあなどり、人にかたんとする心甚しくなるは、學才長ずるにしたがひて、彌其の人あしくなる。今の世には、かやうの學者多くなる。末世の學者のならひ、おそるべし。

◎學問の道は、他にあらず。只、善惡を明らかにしりて、善を行ひ惡を去るにあり。およそ、人は、只心もわざも、善に志し善を行ひて、人をあはれみめぐみ、人を樂しましめて、人をくるしめず、人をよみして、人をにくまず、人をうらみず、人の善をほめて、人をそしらず、是れ即ち、仁の理にして、君子の道なり。人となりては、君子の道な學び行ふべし。善に志なく、善を行はずして、人をくるしめて、人をあはれませんが、人をあなどりて、人をうやまはず、人をうらみいかり、人をそしる、

是れ小人の道なり。人となりて小人の道を行ふべからず。

◎およそ、一念惡をおもひ、一事惡を行へば、天道にそむく理なり。おそるべし。

◎朋友の朋、あしきことあらば、面前にいふべし。かげにてそしるべからず。うしろめたく聞ゆ。面前に其の過をせめ、かげにて、其の善をほむべし。

◎人をほめ過すも、へつらひに近く、又、人をしらざるの過あり。不智といふべし。およそ、人を褒貶することつゝしむべし。古語に曰く、一言妄に發すれば、駟馬も難追。又曰く、一言以て知とし、

◎言をつゝしめば禍なし。飲み食ふことをつゝしめば病なし。故に古語に曰く、病は口より入り、禍は口よりいづ。

◎同官同列の人は、私意の争なく、人我の隔なくして、和睦し相愛すべし。是れ亦、朋友の道にて、君のためなり。家の亂は、多くは臣下の争よりおこる。凡そ、われ一人を立てんとし、わが才を専に立てんとすれば、必ず、同列を妨ぐるゆゑ、かへつて、わが身の禍となる。又、同業の人にも、相争ふべからず。そしるべからず。同列をそしり、同業をそしるは、是れ小人のわざなり。才能善行は、

相たすけてすゝむべし。不能あらば、誹るべからず。

◎謙と矜との二をしろべし。謙は、へりくだるなり。卑下するをいふ。我に才智善行ありても、ほこらざるなり。へりくだりて、わが身に自滿せずほこらざるは、是れ天道神明のたすけ給ふところ、人のよみする所なり。學問する人は、まづ、謙を以て基とすべし。基とは、家を作る土臺なり。土臺をつかされば、家を作りがたし。謙ならざれば、善にすゝむ下地なくして、學問の道立ちがたし。學問しても益なし。家を作らんとして基なきが如し。是を以て、謙を學問の基とす。わが身をへりくだり、わが身をよじとせず、人の善言をきき、人の善を取用ひ、おのれを立てずして、人の善にうつれば、善にすゝむときはまりなし。天下の善徳なり。矜は、ほこるとよむ。自滿することなり。謙のうらなり。われにいかなる才能善行ありとも、ほこりかがやかすべからず。ほこれば、其の才能をも善行をもうしなひて、人ににくまれそられ、わざはひあり。わが身に自滿して、みづからほこり、人をそしれば、善にうつりがたし。故に悪日々長じて、不善にすゝむことかぎりなし。是れ天下の悪事なり。學問せんと思はば、初より、先づ此の矜の字をいましめ去るべし。是れ第一の事なり。もし、是を去らざれば、學問しても、益なきのみならず、かへつて害あり。才力のすゝむにしたがひて、已

にほこるゆゑ、惡彌長ず。學ばざるにしかず。學問すれば、人の心あしくなるとて、俗人の學問をきらふは、此の故なり。師は、是を以て弟子をいましめ、初より、ほこることあらば、ゆるすべからず。弟子は、是を以てみづから誠しめ、みづからゆるすべからず。故に、學問する人は、大根本あり。謙の字なり。大禁戒あり。矜の字なり。故に、學問する人は、はじめより、必ずまづ、此の禁戒を守り、根本をたて、學問をつとむべし。かへすがへす、わが身にほこり、人をそしるより、大なる惡なし。みづからほこる人は、必ず、人をそしる。みづから是とすれば、必ず人を非とす。是等のあしきことを、すべて凶徳といふ。心に銘して、自ら誠しむべし。

◎わが善は、大なりとも、かくしてみづからほむべからず。是れ、身にほこらざるなり。人の善をば、小なりとも、あらはしてほむべし。是れ人の善を助くるなり。わが過は、かざらずしてあらはし、早く改むべし。是れわが身の益なり。人の過をばあらはすべからず。これ、人を害せざるなり。愛の道なり。是れ、君子の心なり。

◎節義とは、君・親・夫のために、義理を守りて、命をかるんずるをいふ。武士の戦場にのぞみて、君のため、命をなしまざるは、いふに及ばず、祿をなしてみて、君をいさめず、命をなしてみて、君にそむ

き、敵に降り。或は、婦人の、夫にそむき、死をおそれて、敵にしたがふやうの類を、節義を失ふといふ。是れ、利欲にひかれ、命をなしてみて、義理をうしなふなり。凡そ、男女ともに、萬の才能うるはしくとも、節義かけては、其の餘のよきことは見るにたらず。

◎利口にして、才力するどに、世變になれて、小事にかしこき人に、大體にくらくて、よき智慧なく、愚なる人あり。又、辨才なく、才力つたなき人に、かへりて、其の心明らかにして、大體にかしこき人あり。人に交り人をつかふ人は、人を川ふるに、外の貌のうるはしきと、言のかしこきにまよふことなかれ。よく其の心の内を察すべし。外明らかれば、内くらく、外くれば、内明らかなり。故に、外はたらきて、内おろかなる人あり。外くらくして、内明らかなる人あり。たとへば、水と火との如し。水は、外くらくして、物をてらす光なけれども、内見すきて明らかなり。火は、外明らかにして、よく物をてらせども、その内くらくして見えすかず。人の内外はりあるも、これにおなじ。必ず、其の貌によりて、人を見あやまるべからず。

◎およそ、善をこのまずして、悪を行ひ、君に不忠に、親に不孝に、國法を犯しておそれず、人にそしられにくまれ、身をあやふくしてつゝしまず、甚しきは、家をやぶり、身をうしなふは、なにの故ぞ

や。おろかにして知なきが故なり。知なきゆゑ、善の行ふべきことも、惡のなすべからざることをもしらず。たとへば、小兒の、知なくして、水火をおそれず、井におち入り、火にはひ入るがごとし。又、善の行ふべきことをしらざるは、たとへば、三歳の小兒に、菓子と金とを、前につられおきてとらせんに、必ず菓子をつかみて、金をすつべし。是れ知なくして、金のたからなることを知らざればなり。

◎凡そ、百行萬善、皆、知あるより行はれ、愚なるよりすたる。此の故に、知は、人身の大寶なり。たふとぶべし。人たる者は、高きもいやしきも、わかきも老いたるも、只、知を求むべし。知を求むるのてだては、いかんぞや。學問するにしくはなし。學問にあらざれば、智を求むべきやうなし。

◎學問は。古の聖賢を師として、五常(仁、義、禮、智、信)を心にたもち、五倫を身に行ひ、次に、天下萬物の理なきはめ、古今の事に通じて、わが心の知を開く道なり。凡そもろものいやしき小藝すら、皆、師あり、稽古ありて、つとめまなび、久しくして後に、其のわざをよくならひ得ることわりなり。いはんや、わが身をなさまめ、人をなさまむる莫大の道理をしることなれば、師なく學問なくしては、いかに生れつきたる才ありとも、何ぞ、かゝることを、ひとり知るべきや。是れ、いはずして其の是非を思ひしるべし。こゝをもつて、いにしへの聖人生れながらしるの人といへども、猶師を求めて、道を問ひ學び

たまふ。いはんや、今の人の知は、古人に及ばず。幸に聖賢の書多し。幼よりつとめてよみ、明師良友をもとめしがひ、をしへなうけて、道理をしり、知をひらくべし。人間第一のつとむべきわざ、是よりさきなるはなし。いにしへの聖人、天下の人の教のため、學問所をたて、師を立て、學ばしめ給ふは、此の故なり。

◎學問する人は、先づ、志を立つべし。志を立つるとは、君子とならんことを、つれに心がけて忘れざるをいふ。たとへば、都に行く人、一步をふみ出すより、念々都に上ることをわすれざるが如くなるべし。君子とは、徳の至れる人をいふ。君子となる道は、善を好むに、誠あるを以て本とす。善を好まざれば、本たはず。其の上には、書をよみよく學んで道をしりて、其のしれる所をつとめて行ふにあり。凡そ、學問するは、まづ、道をしり善を行ひて、つひに君子とならんことを志してやまざるを、志を立つるといふ。是れ君子の學問は、つれに善を行ふを以て心とすべし。善を行はざれば、學問も無用のことなり。善を行ふ人は善人なり。其の至は、君子となる。故に、學問の道は、つれに善を行ひて、君子にいたるを以て目あてとす。弓射る者の、的に志すが如し。志を立つるは、たとへば、飢渴の時に、飲食を思ふが如くせちなるべし。是れ、學問の基なり。善をこのむにおこたりあるは、

志を立つるにあらず。もし、學をするに、善を好む志なくんば、萬巻の書をよむとも、藝能を習ふに同じ。只、才能のみ進みて、徳行なつとめずんば、眞の學問にはあらず。眞の學問は、徳行を、つとむること文學をつとむるより厚くすべし。

◎學問の道は、善を好む志を立つべし。且つ、明師良友を求めて、學術のすぢをえらぶべし。師友の人品よからず、學術のすぢあしければ、學びて益なし。是れ第一えらぶべきことなり。初よりわが志をへりくだりて、わが身に才ありとて、ほこるべからず。われを是とし、人を非とすべからず。知れることも、知らざるがごとく、心得ざるさまにて有りぬべし。君子の心さまを學ぶべし。かりにも、小人のわざにならふべからず。

◎學問は、只、善を行ふ道なりとしりて、常に善心をおこし、日々善行をなすべし。其の上、道理を以てわが身をせむべし。道理を以て人をせむべからず。古法にかゝはりて、人をせむべからず。古法になづみて、國法にそむくべからず。

初學訓 卷の四

名利の二は、衆人の好む所なり。されども、打まかせて好めば、道にそむき、かへつて、身のわざはひとなる。身に才學あり、德行あるは、わが身の寶なり。これを以て、わが名をむさぼり、人にはほめられんことをこのむべからず。名を好めば實をうしなひ、みづからほめて、かへつて、名をうしなふ。人は、只、まことをつとむべし。誠にあれば、名は、もとめざれども、おのづから来る。故に、名は實の寶と、古人もいへり。名を好めば、みづからほむ。いやしむべし。利とは、財寶利祿なり。つとむべき家業をよくつとめ行へば、利は求めずして、おのづから来る。こなたより求むべからず。利を求むれば必ず害あり。おそるべし。實をつとめずして、名と利とを好むは、鄙狹なり。いやしむべし。

◎文學をこのみて、義理をこのまざるを俗學といふ。たとひ、四書(大學・中庸・論語・孟子)五經(書經・詩經・易經・春秋・禮記)を專によみ、其の文義に通じ、程朱の學をするとも、義理を好まざるは俗學なり。いやしむべし。

◎國土に四民あり。士・農・工・商なり。四民、皆、義理を行ふことは一にして、利養を求むることわざ、各、かはれり。義理を行ふとは、即ち、人倫の道を行ふをいふ。是れ四民ともに同じ。利養は、世をわたるいとなみなり。是れ、四民各、かはれり。

◎士は、王公大人より、下士にいたるまでをいふ。いにしへ、士を立てし本意は、農工商をさめやしなはしめんとためなり。民にやしなはれんためには非ず。凡そ、土地を多く領する人は、我が身ひとりに私せず、儉約にして、奢と私欲なく、民をやしなふを以て心とすれば、其の家長く久しく、財寶みちみちて、身の利養ゆたかなり。いにしへ、からやまとの賢君、身に儉約を行ひ、おごりつひえをなしたまはざりし故に、たびたび、民のみつぎ物をゆるし給へども、後には、倉にたからみちみちて、米くさり錢なはくちてきたりとかや。又、公卿より下つた、士庶人に至るまで、身をなさめて、君によくつかふれば、君のやしなひを得、財祿をたもちて、利養はもとめずして、おのづから其の中にあり。しかれば、士たる人は、その官職を専らつとめて、利養は求むべからず。

◎凡そ、士は、萬民を養ひ助けんためにつかさなり。むかしより、其のために其の職分を立てたれば、士たる人は、民をあはれみめぐむ志わするべからず。凡そ、道に志ありて、義を好み、心直にして情ふかく、いつはりなくてつしみあるは、良士なり。

◎農は、田をつくる民なり。是れ、人をやしなふものなれば、四民の本なり。隙ある時を以て、わづかにつかひ、いとまあらしめ、耕作を専らつとめしむべし。農人は、天の時にしたがひて、春夏秋冬

のつとめおこたるべからず。又、地の利によりて、其の土に宜しき五穀を種うれば、田島のなりはひよし。其の上、儉約にして、財を妄に用ひざれば、財多くして、公に貢をそなへ、父母妻子をやしなふにともしからず。又、身をつししみ、法度を犯さず、公役におこたらず、私用を後にし、土貢はやくをさむれば、つみとがなくなして、父母のうれへなく、其の心も亦安樂なり。是れ、良農なり。かやうの良農あれば、萬民の手本となる。

◎工は器物をつくる諸職人なり。各、其の職をつとめ、器物をねんころによく作り、齷齪ならざれば、求め買ふ人多く、利を得ること多し。是れ良工なり。

◎商は利をかるく取りて、多くむさばらず、いつはりなく、人をあざむかざれば、人は是をうたがはず、たのもしげありて、其のことは信じ、其のあきものを多くかふ。故に、あき物ひろくうれて、利を得ること多く、富を得ることやすし。是れ良賈なり。

◎およそ、農工商の三民は、君につかへずして、祿なし。みづから利養を求むるを専とす。されど、義理をすて、利養をもとむるは、天道にそむき、事を妨げて、たとひ、一旦の利を得るといへど、必ず、天のとがめ人のにくみ有りて、後のわざはひにあふ。おろかなるものは、眼前の利をのみはか

りて、後のわざはひをしらず。不善を行ひて、利をむさばること小なれば、財をうしなふ。はなはだしければ、家をやぶり身をほろぼす。天のせめ人のにくみのがれがたし。おろかなるにあらずや。

◎誠は天の道なり。之を誠にするは、人の道なり。四時(春夏秋冬)行はれ、百物生る。善にさいはひし悪にわざはひす。是れ、天道のまことなり。いにしへ今たがはず。人の道はこれを則として、つとめて誠にするにあり。こゝなもつて、人の心は、まことを主とす。誠あらざれば物なし。君父によくつかへ、いかなる善を行ひても、誠なければ、なすこと皆ひがことなり。是を物なしといふ。つとめて善を行ふも、まことなければ、みづからあざむき、人をあざむくにいたる。なすむべし。あざむくとは、いつはるなり。故に萬の事、誠を本とすべし。孔子の主三忠信一とのたまふも、此の意なり。忠信は誠の心なり。

◎敬とは、おそるゝ意なり。つねに心を小にし、おそれいまして、ほしいまゝにせず、人をうやまひてあなどらず、事にのぞめば、心を専一にして、他に心をうつさず、一寸ちに念を入れて、おろそかならざるをいふ。されど、又、其の事より、おもき事あらば、前の事をさし置きて、おもく急なることをなすべし。凡そ、つしめば身をさまり、つしまざればみだる。萬の事、つしめば行はれ、

つゝしまざればすたる。つゝしめば、わざはひなく、病なく、命ながし。つゝしまざれば、わざはひいでき、病おこり、命みじかし。安樂なる時も、必ず、つゝしむべし。つゝしめば、後のわざはひなく、後悔なし。凡そ、毎事後悔なからんことを思ふべし。後悔なき道は、敬にあり。敬は、古の聖賢の心法なり。萬善是より行はる。是れ、心のまもり、萬事の根本なり。人生の、必ずつとめ行ふべきことなり。白樂天が詩に、禍と福とは慎しむと慎しまざるにありといへり。

◎勤は、萬事の立ちて行はるゝ所なり。つとめざれば、おこたりて、何事もすたる。五倫の道も、勤にあらざれば行はれず。中につきて、忠孝の道をつとむるは、人道の大節なり。四民ともに、つとにはやく起き、よはにおそくいれて、其の家業をよくつとむれば、各々其のわざをさまる。士は、君につかへて、身をかへりみず、私なくして、誠をつとむべし。かくのごとくなれば、祿は求めずして其の中にあり。農工商は、家のわざをよくつとめつゝしみて、いつはりなければ、財を得て貧しからず。古語に、人生はつとめにあり、つとむれば、則ち、ともしからずといへるが如し。

◎天の道は、うごきてやまず。一日に周く天をめぐる。人の勤は、天道をのりとす。こゝを以て、君子はつとめておこたらず。地の道は、しづかにしてうごかず。人も亦これにのつとりて、敬しみてし

づかにして、妄に動かず。是れ、人の敬は、地の道を則とするなり。

◎古語に、勤は貧にち、慎はわざはひにかつといへり。いふこゝろは、つとむれば貧しからず、慎しめばわざはひなしとなり。人世は勤慎の二にて立てり。四民ともに、勤と慎とを、しばしもわするべからず。是れ、道を行ふ工夫なり。且つ又、貧と禍とをのがるゝ道なれば、是れ亦、人身の至寶なり。其の上に、儉約をくはへ、此の三徳を以て、家をたもつべし。

◎儉約に二義あり。儉約の二字を、つづまやかにすとよむ。取ひるげずして、つづめ行ふなり。一には、身の行なつづまやかにして、ほしいまゝならざれば過すくなし。二には、財を用ふるにつづまやかにして、身の養に、おごりとかがりなく、無益の事に財をつひやさざるをいふ。行をほしいまゝにせざるは、身をたもつ工夫なり。財をみだりに用ひざるは、家をたもつ工夫なり。此の二を儉約といふ。心をほしいまゝにして、つづまやかにせざれば、過多くしてわざはひあり。財はかぎりあるものなり。富める人も、財をみだりに用ひて、儉約ならざれば、財つき家ともしくなりて、父母をやしなひ、人にほどこし、禮義を行ひ、職分をつとむることならず。後は、人の財をむさぼりて、人のわづらひとなり、はては、わが家をやぶる。それ、儉約は、わが身の俸養をかるくするなり。善徳なり。

財をなしてみても、人にほどござるは吝嗇といふ。しはきことなり。しはきは、仁義の道にそむきて悪事なり。愚なる人は、儉約と吝嗇とのわかちをしらずして、儉約をも、吝嗇なりとて、そしりわらふ。又、吝嗇にして、みづから儉約なりとおもひあやまる人あり。二ながら非なり。いにしへの聖賢、いづれも儉約ならざるはなし。是れ、善徳なり。儉約なれば俗人そしる。俗人のそしりをかへりみず、つとめ行ふべし。俗人のそしりをかへりみおそれては、儉約は行はれず。されども、せはしく鄙細なるは、儉約にあらず。人に對して寛恕なるべし。

◎家なたもつ道をうしなひて、儉約を行はず、おごりて財をみだりにつひやし、財たらざる故、人にかりて、其の利息多く出で、わが家ともしくなりて、みづからやしなひ、家人をやしなふことかたく、器物をとりのへそなへ、人にほどござることならず、人の財をかりて返さず、人の物をかひてつくのは、みづからくるしみ、人をなやます、大なる悪事となる。かれて早くいましめつゝしむべし。

◎忍といふこと、亦善行なり。忍とは、こらふるなり。堪忍するをいふ。忍に二事あり。一には、わが心にきらふことをこらへて忍らず、又、一には、わが心にこのむ物をこらへてむさぼらず。是れ、忍と怒との二をこらふるなり。忍をしのぶは、人のしわざ、吾が心にかなはざるをこらふるなり。忍

は、わが心を亂し、人を妨ぐ。心は、萬事の本なり。いかりて心みだれてはいふこと行ふこと、道理にかなはず。いかる時、先づ、物をいふべからず。いかる時物いへば。必ず、あやまる。是れ、いかりなしのぶ一の手立なり。もし、いはずしてかなはざることありとも、ことばにいかりをあらはすべからず。たとひ、心の内にいかりとけずとも、ことばに出さずして、いかりやみ、本心にかへるまで、こらへぬれば、大なるあやまりなし。怒をこらふるは、酒食好色など、およそ、わが心にかなひてすきこのめる、耳目口體の欲、財寶器物の欲、皆こらへて、ほしいまゝにむさぼらざるなり。怒と怒との二をこらへざれば、義理にそむき、心を亂し、病を生じ、財をつひやし、恥辱をとり、命を失ふ。其の害大なり。凡そ、身のわざはひは、忿怒をこらへざるよりおこる。しばしの間怒をこらへずして身をわするれば、父母をうれへしむ。不孝、是より大なるはなし。しばらく堪忍すれば、わざはひなくして喜あり。古人の時にし、忍過事堪レ喜といへり。堪忍しすまして後は、喜ありといふ意なり。しばし堪忍せざれば莫大の禍となる。程子も、忿怒を忍ぶと忍ばざると、便見ニ有徳無徳といへり。

◎富貴の人は、其の力に隨ひて、ひろく人をめぐみ助くべし。人生の樂は、人の苦を救ひて、人を樂

しましむることにあり。貧窮にして、人を助くる力なくとも、善をする志にあらば、其の功あるべし。人に善をすいめ、悪をやめさせ、人の害をのぞき、人の心を和らぐるは、必ず、財を川ひずとも行はる。もし、餘財あらば、無用のつひえをせずして、人の艱難を救ふべし。財をなしむべからず。租子の、財をなしてみても、善を行ふことなりがたしといへるも、まことにしかり。財は多けれど、なしてみても、人を救はざるは、不仁の人なり。善を行ふことかたし。

◎道に志あらん人は、つれに仁を以て心にたもちて、毎日、人に利益ある善事をなすべし。善を行ふは、必ず、財を用ふることの多少によらず。ただ、人の難儀をすくへば、其の功大なり。財を多くつひやしても、益なきことに用ふれば、人の助とならず。およそ、善を行ひて、人をすくふこと、上は王公より、下は乞丐にいたるまで、行はれずといふことなし。善を行ふべき時にあたりて、心をつくすべし。貧賤なる人も、仁に志して行へば、其の身に應じ、日々、人に利益あること多し、飢ゑたるものに一飯を與へ、渴けるものに湯水をあたへ、道路に、いばらからたち、はりある物、かどある石、人の足をそこなふ物を取りすて、溝の内なるふみ石を、一二置きかへ、小なる溝に小橋をかくるほどのことは、いかなる貧乏の人もすべきことなり。是れ亦、人に益ある善行なり。いはんや、富貴の人、

其の志あれば、人をすくふことひろく、其の功大なり。高きもいやしきも、おこたりなく、久しく行へば、善を積むことかぎりなし。あに、たのしまざるべきや。

◎すべて、世俗は、耳目口腹の欲をほしきまゝにするを樂とす。しからざれば、大富貴を得てもかひなしといふ。是れ、まことに小人の心なり。其の志むげにいやしむべし。かゝるいやしき樂を志とし、酒食色慾を恣にする人は、必ず、財つきて、貧窮に苦しみ、人を妨げ、恥辱をとりて、名を失ひ、元氣衰へ、病生じて、命をうしなふ。況んや、わざはひとなり、富貴をうしなふ。かなしむべし。なんぞ樂とすべきや。道を行ひ、人を救ひ、分をやすんじ、理にしたがふほどの樂、此の世の中に、何かあるべきや。たかきいやしき、只、是を以て樂とすべし。道を行ひ人をすくふを樂とせずしてあだなる世俗の樂をねがふは、大富貴を得たりとも、誠に不幸なる人といふべし。富貴の人は、ことさら、身の欲をつしきほしきまゝにせず、貧困なる者をあはれみほどこすことを樂しむべし。耳目口腹の慾をほしきまゝにすれば、道にそむきて、樂を失ひ、かへつて、わざはひとなる。大富貴の人といへども、財をつひやしつくして、困窮のうれへのがれがたし。いはんや、欲をほしきまゝにすれば、名をけがし、財祿と官位を失ひ、病を生じ、身をくるしめて、命をうしなふ。わざはひ、是より大なる

るはなし。

◎いとまある時は、月花をめで、風景をかんじ、山水をのぞみ、園にあそび、詩歌を吟ずるも、よきほどにこのめば、道に害なし。是れ亦、風雅なる君子の樂なり。古人、名教の内に、おのづから樂地ありといへるは、聖人の道の教の内に、世俗の樂にあらずして、至れる樂あるをいふ。私慾の樂を好めば、かへつて身の禍となる。おそるべし。このむべからず。

◎凡そ、人をしることは、いたりてかたし。人の心は、隠れて見えす。わが知くらければ、人の善惡をしりがたし。其の上、私あれば、人を好みにくむこと、公直ならずして、善人を惡み、惡人を好む。人の善惡をしらず、わが心になへりとして、善人とすべからず。其の人の善惡をえらぶべし。君子は友とする人も、ふ人も、つとめて其の人をえらぶ。もし、わが心になへりとして、えらばずして、あしき人なり、臣として近づければ、其の人に引きそなはれ、莫大の禍となること、和漢古今ためし多し。能々人をえらぶべし。人をえらばざれば、大なる禍あり。慎しむべし。

◎才智あり、忠信ありて、私すくなく、つししみ有りて、事をよくつとむる人は、才徳そなはれる人なれば、今の世に有りがたし。才少しにぶく、物いひふるまひ、わが心に少しかなはずとも、心おる

かならず、忠實にてうらおもてなく、邪ならざる人を、このんで用ふべし。才にぶき人も、愚ならざれば、世になれ、久しく事にたづさはれば、かへりて、よきほどになり、要用にかなふ。辨舌利口にして、立居ふるまひ快く、人の心によくかなへるもの、多くは、其の心いつはりかたましく、うしるめたきこと多し。信しがたし。かやうの人を用ふれば、必ず、禍となり、家をやぶる。たとひ、家をくつがへすにいたらざれとも、目に見えぬ所に、大なる災あり。甚だおそるべし。

◎友とする人は、尤もえらぶべし。智ありて、わがあしきをただし、よきをすゝむる、忠直なるたのもしき人あらば、したしみて友とすべし。直ならずやはらかにして、わが心になへる人は、益なし。

◎わが子弟など、年わかき者の、友だちのまじはり、尤もはやくえらぶべし。友なふ人にうつりやすきこと、古人、麴に油のそみやすきにたとふ。わかき人の善惡は、皆、其の友による、公儀の法をおそれず、親の命をきかず、酒食と淫樂博奕をこのみ、わが身のはぢをしらず、わが家の業をつとめざる者を、名づけて無頼の人といふ。年わかき子弟を、無頼の人に、一日も、交らしむべからず。必ず、ひきそなはれ、惡におち入りやすし。一たび、かゝる惡友にならへば、よきかたへ立ちかへりがたし。おそるべし。

◎善をこのみ、悪をきらふことの誠なるは、誠意のことなり。是れ、人の行の第一のつとめにて、行の初なり。善をこのむことは、よき色の如く、悪をきらふことは、あしき臭の如くすべし。是れ善を好み悪をきらふこと誠あるなり。もし善としれども、實にこのまずして行はず、悪としれども、實にきらはずしてさらざる、これをみづから欺くといふ。自欺とは、善を好み悪をきらふこと、眞實ならざるをいふ。自欺くことをいまして、好悪の二に眞實にして、偽なかるべし。是れ、第一の心法なり。

◎凡そ、好むこときらふことを、はやくえらぶべし。一たび、あしきことをこのめば、相つづき、心のくせとなる。よきこともあしきことも、このめば、後はならひとなりて、天性の如し。すでに、あしきことに久しくそみぬれば、其のひがことをしれども、やめがたし。はじめに選びて、はやく改むべし。古語に、たがふこと、もし強盤なれば、あやまるに千里を以てすといへり。

◎官祿は、我より下なる人を見て、わが身をやすんじ樂しむべし。上なる人をうらやむべからず。官祿の富貴と貧賤とは、天命にて生れつきたる分限あり。もとめがたし。才徳は、我より上なる人を見て、かれをうらやみつとむべし。才徳も生れつきたれども、善にうつり過をあらためて求めて、得

る道理あり。人の性本善なれば、學問し力め行はば、などかよき道にうつらざらん。

◎人を知るは、いたりてかたけれど、己をしるは、人をしるより猶かたしといへり。故に、古人も、知レ人謂ニ之知一、自知謂ニ之明一といへり。明は、知よりまされり。人の心は、かくれて、おもてより見えず。故に、知りがたきこと、うべなり。わが心は、内にありて、みづから知りやすかるべくして、かへりて、しりがたきはなんぞや。わが身には私ありて、おのれをひいきしてゆるす、故にあしきことも、よしと思ふなり。人其の子のあしきをしることなしと、古語にいへるが如し。明鏡も、そのうらなてらさず、われに智ありとおもへど、かたつかたには、くらき所ありて、過悪あるをもしらざることもあるべし。能くかへりみ、又、人のいさめなき、わがあやまちと悪となしりて改むべし。われをしらざるは、愚なりといふべし。外事をさし置きて、まづ、わが悪しきことを、はやくしりて改むし。

◎人の不善ありとも、いかりてつよくみせむべからず。わが不善をしらは、つよくせめ治むべし。つよく人をせめざれば、人のうらみなし。わが不善をつよくせむれば、わが身に益あり。己をゆるして、人をせむるは、大なるひがことなり。人の恨ありて、わが身に益なし。

◎凡そ、人となりて、君のため父のため助とならず、世間の用をなさずして、天地の道に少しの補なく、人をあはれむ徳もなく、人をすくふ功もなくして、天地の物をそなひつひやすは、禽獸草木の、民用を助くるにもしかすと、古人いへり。わがともがらの世にあることかくの如し。みづからはづべし。天道おそるべし。

初學訓卷の五

耳目口鼻の慾をほしいまいにして、一時快しと思へど、其の樂いまだはてざる内に、早くうれへ來る。酒食色欲を過して、樂しむと思へど、其の樂の内に、早くたゞりなすが如きのたぐひなり。すでに、はじめに快きことは、終には、必ず、わざはひとなる。後の禍をおそるれば、前に快きことを求むべからず。又、はじめに苦しみてつとむれば、必ず、後の喜樂となる。味よき酒食をすごせば、たちまち病おこり、にがき藥のみ、あつき灸をすれば、必ず後は病去りて、身の益となるが如し。

◎養生の道も、亦よくつゝしみて、慾をこらふるにあり。養生の要は、飲食色慾をこらへて、過さず、心を和らげ氣を平らかにし、かなしみ、いかり、うれへ、思ひをすごさず。又、風寒暑濕の

外邪を防ぐべし。飲食色慾は、内慾なり。風寒暑濕は、外邪なり。つよき人も、内慾を過し、外邪にやぶらるれば、病に冒されて、長生を得がたし。又、生れつきよわけれど、よく保養すれば、天年をたもちて長壽なり。わかき時より、早く養生をつとむべし。わかき血氣さかんれば、飲食色慾ほしいまいなり。いましむべし。飲食色慾をほしいまいにすれば、元氣つきて短命なり。中年以後は、色慾より、飲食の慾、尤もこらへがたし。内慾にやぶられて、元氣へれば、外邪もおかしやすく、病おこりやすし。人の天年をたもたずして、早く死ぬるは、多くは、飲食色慾の二にやぶらるればなり。凡そ、養生の術、其の細なることは、方書に多くのせたりといへども、其の大意は、かくのごとくなるに過ぎざるのみ。

◎心は、靜かなるべし。さわがしがるべからず。靜かなれば、明らかなり。靜かならざれば、心くるしくして、道理をさとりがたし。流水は、うごきてかけをうつさず、止水は、しづかなるゆゑ明らかなるがごとし。慮は、ふかゝるべし。淺かるべからず。慮は、思慮なり。慮ふかければ、見ることに遠く、聞くことつまびらかにして、見聞にまよはず。慮淺ければ、見ることに聞くことに迷ひやすく、人に欺かれ、身の禍、人の憂をしらす、遠く久しきを考へず、先見の明なし。心をしづかにして、思案

をこのみ、思慮をふかくして、事の是非と、後の禍を考ふべし。

◎萬事を行ふに、待といふ字を用ふべし。待とは、急ならざることはいそがずして、心しづかに思案し、詳に行ふをいふ。かくの如くすれば、過すくなし。事を行ふに、いそがしく急なれば、かならずあやまりあり。程子も、事以テ急而敗者十常七八といへり。待とは、急ならざることは、詳にしていそがず、よく思案するをいふ。おこたりゆるがせにして、急なることをいそがず、時におくるはあしし。

◎古の君子は、朝夕、只、天道の眼前にあることを思ひて、つねに、心も事もおそれつゝしみて、天にそむかず。今の人は、天道は、はるかに遠きことにて、わが身にあづからざることと思ひて、天をあざむきそむきて、おそれず、わが心に悪しとおもひながら、行ひてやめず、是れ、天道をあざむきて、おそれざるなり。凡の人、天の興へ給ふ所の、わが心をたまたずして、不仁を行ひ、天のあはれみ給へる人物を愛せずして、くるしめあなどるは、天にそむくなり。天地の子としてつかへ奉る道にはあらず。是れ、父母の命にそむきてつかへざるが如し。天道に不孝なるなり。天道おそるべし。

◎尙書に、善をすれば、天より百の祥をくだし、不善をすれば、百の禍をくだし給ふといへり。又、

善惡のむくい、影の形にしたがひ、響の音に應ずるが如く、必ず、其のしるし有ることを、聖人説き給ふ。又、天道は善に福し、淫にわざはひすといへり。天より、善人にはさいはひを興へ、悪人にはわざはひし給ふなり。易にも、積善の家には必ず餘慶あり、積不善の家には必ず餘殃ありといへり。久しく善をつめる家には、さいはひ多く、久しく悪をつめる家には、禍多しといふ意なり。是れ、天道の常理なることを脱き給ふ。是れ皆、聖人のをしへなれば、いつはりたがひあるべからず。必ず、其のしるしあり。うたがふべからず。又、古語に、天道は好レ還といへり。天道は、善人にさいはひし、悪人にわざはひし給ふ道理にて、善惡ともに、必ず、其の報をこのみ給ふを、かへすことを好むといへり。善人には福をあたへ、悪人には禍をたまふ。善惡ともに、天道より、其の返報をくだし給ふ。天道は廣大にして、にはかに、其のしるしなけれど、後は、必ずむくいあり。天道はおそるべし。おろかなる人は、此の理をしらずして、天道をおそれず、悪をさりて善を行ふ志はなく、悪を行ひても、只、神佛にへつらひいのりて、さいはひを求め、わざはひのがれんとす。心あらん人は、よく思案すべし、人間の内にても、心明らかに、私すくなき正直なる人は、人のへつらひ求むるをこのまず、理をまげて人に私せず。いはんや、神は、聰明正直にして私なければ、なんぞ人の平生善

を行はずして、只、へつらひ求むる者に私して、さいはひをあたへ、わざはひをゆるし給はんや。此の理明らかにして、しりやすし。又、古語に、神は非禮をうけずといへり。神は正直なれば、人の道理にかなはざる祭と、祈禱とをばうけ給はずとなり。管丞相の歌に「心だに誠の道にかなひなばいのらずとて神やまもらん」、又曰く「あやまりのあらば中々さもあらば心つくしに何いのらん」とよみ給へり。此の二首の道理至極せり。たがふべからず。凡そ、此の理はなほだ明らかにして、いかなる無學なる人も知りやすし。されども、凡夫は、道理にくらく、利欲ふかき故、善を行ひ惡をせざれば、天道にかなひ、さいはひありて、わざはひなき理をしらず。只欲心と非禮のわざを以て、神佛にへつらひいのり、又、權勢ある人にへつらひ求めて、財祿を得んとす。されど、天道神明には私なければ、へつらへりとして、福をあたへ給はずとがあるをゆるし給はず。道にちがへる祈の其のしるしなきこと、今日のまへにあらはなり。又、非禮を以て神にいのり、人にへつらひ求めて、福祿を得る者稀にあり。それは、生れつきたるさいはひの内にて得たるなり。へつらひ求めて得たるにはあらず。もし、百人に一人も、へつらひ求めて、其の生れつきたるさいはひを得る者あれば、愚人は、それにまよひて、へつらへる故に得たりと心得そまひて、へつらひもとむ。愚にして此の理をしら

ざればなり。

◎古人の神にいのりしは、君父のためにいのり、又、わがあやまりを改め善にうつりて、心に誠あり、敬あり、其の上、禮ただしくて、まつるべき正神にいのりし故、其の福をうけたり。理もなく禮もなく、祈るまじき神にへつらひ祈りしにあらず。われにあづからずして、まつるまじき社を淫祠といふ。淫祠は屬なしといへり。家を守る神にあらざれば、祈りても利生なしとなり。わが君につかへずして、他の君につかふるが如し。道にかなひて、いのるべき神にいのらば、其のしるし有りなん。道なくて祈らば、神は非禮をうけ給はざれば、祈るとも、しるしあるべからず。

◎およそ、人と生れては、たかきもひきも、とめるもまどしきも、只れがはくは、心にふかく陰徳をたもち、身にあつく善事を行ひて、人の憂をあはれみめぐみ、人のくるしみをたすけ救ふべし。つねに、是を以て志とすべし。陰徳とは、心の中に善をたもちて、人にしられんことを求めざるをいふ。凡そ、善を行ふの道は、うゑるこゝゆる人、病者、かたわなるもの、乞食、貧人をたすけ、鰥寡孤獨の、たよりなき人をあはれみ恵むべし。老いて妻なきを鰥といひ、老いて夫なきを寡といひ、いとけなくして父なきを孤といひ、老いて子なきを獨といふ。此の四のものは養ふべき人なくして、飢寒

するものなければ、困窮こんきゆうせる民なり。仁を行ひて人をすくふには、先づ、此等の人をさきにすべし。これ亦、いやじといへども、われと同じく天地の手なれば、わが同胞の内、不幸なる人なり。尤もあはれむべし。凡て、人のため利あることをなして、害あることをのぞくべし。人の害になることを、心によく思ひて、かりにもすべからず。わが身を樂しまんとて、人をくるしむべからず。いにしへより、遊あそなき人は、わが一人の心を樂しまんとて、多くの人民じんみんをくるしましむ。是れ、大なる不仁ふじんなり。只、われひとり樂しむべからず。民たみとともに樂しむべし。人のうれへなうれへ、人の樂しみをたのしむべし。

◎人と才能さいのうをあらそふべからず。人と威勢ゐせいをあらそふべからず。人の才あるをそれむべからず。おのれ立たんとして、人をも立つべし。我われのみ立たんとすべからず。心けはしく、人ないひおとすは、人をそこなひ、物をやぶるなり。不仁ふじんといひつべし。

◎富とみては、まづしき者をわすれず、貴たつとくしては、いやしき者をあなどるべからず。又、かりそめにも、人をそしるべからず。人をそしりおとすは、即ち、悪あくを行ふなり。人の才あり善ぜんあらば、少しなりともほめあげそだつべし。あざけりていひおとすべからず。人をそしり、人ないひおとすは、不仁ふじんなり。

なり。人の才行さいかうあるをそれむは、わが身をたてんとするなり。不義ふぎなり。鄙狹ひけふといふべし。いやしむべし。

◎凡そ、心に仁をたもち、身に善を行ふこと眞實しんじつにして、人のじらんことを求めず、善を行ひしむくの、さいはひあらんことをねがはざる、ただ、陰徳いんとくなり。陰徳を行ふことかくのごとくにして久しければ、善ぜんつもることきはまりなし。豈あに、たのしからざらんや。後漢ごかんの明帝、其の弟東平王とうへいおうに問うて、汝、國に居ては、何を樂とするやとのたまひしに、東平王答へて、善ぜんをすること、最も樂しといへり。凡そ、世間せけんの樂に、善ぜんをするほど、おもしろく樂しむべきこと、其の外に、又何かあらんや。匹夫ひつふのともがらも、善ぜんをすれば樂あり。日々に善を行ひてやまずんば、其のつもれる樂、限かぎなかるべし。況いはんや、富貴ふうきの人をや。東平王の答こたへうべなり。善ぜんを行ふことかくのごとくなれば、求めざれども、おのづから、天道てんだう神明しんめいのめぐみありて、わざはひなく、さいはひあり。其のしるしの、必ず、たがはざること、聖人せいじんのなしへ明らかなり。又、今古の天下のふみにのせたる所、及び、かたり傳つたふることかぎりなし。うたがふべからず。小人しょうじんは、一事善いちじを行ひて、其のむくいなければ、しるしなしとて、やめて行おこなはず。およそ、善ぜんを行ふこと久しくつみかさなれば、必ず、其のしるしあり。人しだがひ、

天よるこび給ふ。又、小人は、悪を行ひてわざはひなければ、善なしとてやめず。悪を行ふことつみかさなれば、必ず、其のむくいあり。天道おそるべし。

◎されど、又、善をなしても、さいはひなき人あり。それは、すぐれて命分うすく、さいはひすくなく生れつきたる人なり。又悪をなしても、わざはひなき者あり。それは、すぐれてあつき氣をうけて、さいはひ、身にうまれつきたる者なり。共に定まりたる道理の常とす可らず。されども、其の一代にむくいざれば、必ず、子孫にむくい、悪をなしても何の害かあらんといふことなかれ。天道はおそるべし。愚なる人は、目の前に見えざることは、福も禍もなしと思ひ、後の利害をしらず。善惡に必ず報あるは、自然の天理なり。うたがふべからず。又、生れつきたる禍福あり。是れ、天命なり。此の二すぢの理あることをしるべし。たとへば、生れつきつよき人は、酒色をほしいまいにし、大食し毒物をくらひて、長命なる人あり。それは、すぐれて元氣あつき人なり。常とすべからず。もし、其の人わざはひなきを見て、常の理と思ひ、酒色をほしいまいにし、大食し毒物をくらひて、短命なるべし。悪を行ひて、禍をおそれざるは、此の理に同じかるべし。

◎おや先祖に善人あれども、子孫悪なれば、先祖の善のむくいなし。おや先祖悪人なれども、子孫善人なれば、先祖の惡のむくいをまねかる。子孫たる人、善を行ひて、おや先祖の惡を補ひのぞくべし。

◎天地は、萬物をうみてそだて給ふ父母なるゆゑ、其の生める所の人倫は、天地の子なれば、是をあはれみ給ふこと、人のおやの、子を思ふが如し。こゝを以て、其の生み給ふ所の人倫と萬物を愛すれば、天地の御心よるこんで、必ずさいはひを下し給ふ。これをくるしめそなへば、天地の御心いかりて、必ず、わざはひを下し給ふこと、たとへば、人のおやの、わが子をいとをしむ者をよるこびて、其の恩をむくいんことを思ひ、わが子をそなふ者をいかりにくみて、其の恨を報いんことを思ふが如し。天道はおそるべし。これを知らずして、只神にへつらひいのりて、福を得、禍のがれんとす。されども、人倫を愛せず、生物をそなへば、天地神明のあはれみなくして、天罰のがれがたし。罪を天に獲れば、購る所なしと、聖人も、のたまへり。うたがふべからず。おそるべし。

◎善を行ひ、人民を愛すれば、必ず天のめぐみありて益あり。善を行ひて、必ず、益を得る。愚者は、益なきことを行ひて、わざはひのがれず。人は、只、智者のするわざをなすべし。愚者のわざをなすべからず。

◎天地の御心にしたがひて、人をあはれみ、人の患をすくひ、飢をたすけ、なげきをやめ、善をつれに

行ふ人は、必ず天地のめぐみあり。神明の助あり。是れ人をすくへば、わが身のさいはひとなる。しかれば、是に及べる大なる祈禱なく、功德なし。世の人、此の理を知らず、神佛にあまねくへつらひ、又は功德をなすと思ひて、民に益なきことに、そくばくの身をつひやし用ふれども、不仁にして人倫をあはれまざれば、いかほど財と力とを用ひてのれども、天道神明の助なくして、身にも子孫にもさいはひなし。是れ、古の書に記し、近代の語り傳ふる所、諸人のまのあたり見聞せる所あきらかなり。およそ、福を得、禍をのがれんと思はば、福を求め、わざはひをのがるゝ道をしるべし。其の道をしらずして、みだりに求めても、其のしるしなし。福を求め禍をのがるゝ道は、いかんぞや。人の困窮をめぐみ、人の害をのぞき、うれへをふせぎ、飢寒をたすけ、鯨鯨孤獨の貧人をすくひ、諸の善を行ふに及べる祈禱は、さらになし。此の外には、そくばくのたからをつくして、祈り求むとも、是に及ぶべからず。心あらん人は、是を行ひて、善をつみかさぬるをつとめとすべし。其のめぐみをうくること、多くの人に益あり。わが身にも、亦たのしみあり。つひには、身の福となる。同じく財をつひやし用ひて、功德と思へども、天道にかなはず、人民をすくはず、無益のことに用ふれば、世のたからなつひやして、かへつて、世のつひえとなる。をしむべし。やまともるこしの、古の事をか

んがふるにも、此の道理たがはず。されども、遠きことを引くにも及ばず。わが日の本百年以來、このごろにいたりて、まのあたりに見聞きたる、世間の諸人のなせることを考へ見て、其の益あると益なきとをしるべし。凡そ、俗人は、無學にして、道理にくらきのみならず、利分の損得をしらず。故に、善を行ひて天道にかなへば、必ず、天よるこび、人よるこびで、わざはひなくさいはひあり、惡を行ひて天道にそむけば、必ず、天いかり人うらみて、わざはひあり、さいはひなきことをしらず、つねに天道をおそれずして、かへつて、あなどりそむき、私をほしいまゝにし、ことさら、天の子としてあはれみ給へる人をめぐまずして、あなどりくるしめ、身のわざはひをもとめ、身のほるぶることなして樂とす。つひに、天道神明のせめをかうぶりて、亡びざればやまず。かなしむべきかな。是れ、道理にくらきのみならず、損得をしらざるなり。

◎およそ、人は、わかき時より老にいたるまで、あしき友に近づかず、益ある師友を求めえらびてちかづくべし。人にまじはるに、へりくだりて、わが才智を以て人にほこらず、古の聖人の道を學び、わが心をさめ、愚なる心のまどひをさりて、知を明らかにひらき、仁心をふかくたもち、孝を先として、人倫をあつく愛し、日々に、わが力にしたがひて、善を行ひておこたらず、常に、人に益あるこ

となして、人を妨げず、天道をおそれうやまひ、身を終るまで、天地の道にしたがひつゝ奉るべし。人となれる者、一生の間つとむべき道、此の外に、さらにあるべからず。老いては同じことするならひなれば、かへすがへす申し侍る。天道は必ずおそるべし。あなどるべからず。

學訓 卷の五終

君子訓 上

天地は萬物の父母なり。其徳廣大にして限りなく、萬物を生育してやむ事なし。人は殊に天地の正氣をうけて生れ、仁義の性をそなへたれば、萬物の靈にして、貴き賤しき、みな、天地の御子なり。なかについで、國土を治め給ふ君子は、天より専らこの人を厚くかしづきて、人民のつかさとし、下を治めしめ給ふ。そのゆゑは、天地は、人を生じ出し養ひ恵むを以て、心とし給へども、天もの言ざれば、自から命令を下して、人を治むること能はず、君子を取り立て、官祿をあたへ、其の地の人民を預け給ふなり。然れば、凡そ、國土人民を司り治むる人は、各、其の主君より命を受くれども、其の實は天より立て給へる代官なり。故に、天職といふ。君子と稱するは、國に君として、民を子とすといふ義なり。天職とは、天に代りて民を治むることを司るなり。凡そ、國天下の君、其の宰臣および一郡一郷の司まで、其の任大小異なれども、皆、君子にして、天職を分ち任ずる人なり。夫れ、國郡の君は、天より其の人に私して富貴にし給ふにはあらず、其の人に威權を假して、治めやすくせしめんためなれば、天道に受け従ひて、民を子の如くする事、其の職分なり。

◎古語に、君を立つるは民の爲にすと言へり。凡そ、國君を立つるは、其の民を治めしめんためなり。國民を以て、其の君一人を養ひて、富貴ならしめん爲にはあらず。然れば、國郡の主となる人に、我れ一人の樂を好まずして、民を安くし國を治むること、我が職分なる理を辨へ知りて、日夜朝暮、偏に仁愛の心を先とすべし。この理を知る時は、其の職分を勤めて、民を安くし國を治むるを樂とし、世俗のこのむ淫樂・漁獵・男女の慾等は、自らうすくなるべし。昔、漢の東平王、京都に參觀せられしに、其の時の天子明帝、汝國に在るに何を以て樂とするやと問ひ給ひしに、東平王、善をする、と最も樂しと答へられき。されば、善政を行ひ、國民を安くする程の樂はなかるべし。凡そ、國郡以下小郷邑を治むる人も、其の徳、聖賢に及ばずとも、古の道を學び、人を治むる古法を手本として行はば、なかば民安く國治まらざる事なかるべき。然らば、其の身尊榮して、世の譽れ後の名まで、いみじき面目なるべし、豈眞の樂にあらずや。

◎生を好み死をおそるゝこと、人と我と同じ。身の艱難をきらひ安樂を願ふこと、人と我と同じ。父母妻子一所に在るを悦ぶこと、人と我と同じ。飢寒を苦しみ温飽を樂しむこと、人と我と同じ。然らば、我が悦び苦しむ心を以て、人の心を推しはかりて、人にも悦び樂しましむべし。是を恕といふ。

是れ、仁を行ふ術なり。されば、人に悦び樂しましめてこそ、我が心も樂しむべけれ。人の憂を顧みずして、我れ獨り樂しむことは有るべからず。譬へば、一座にみちみちたる數十人、みな、酒を飲みて樂しむ中に、只一人隅に向ひて泣くものあらば、一座の人みな興さめぬべし。孟子にも古之人與民偕樂、故能樂也といへり。人の司となる人は、此の道理を能くさと給ふべし。

◎智者は、心明らかにして、民の憂へ苦しみをよく知りて施さず。民の樂しみ願ふ事を能く知りて施す。愚者は心味くして、民の憂へ苦しみを知らず、我れ一人の私のみを徇ひて、民をめぐむ事を好まず。是を以て、智者は必ず仁あり、愚者はかならず不仁なり。故に、よく學問し、道理に明らかならば、なかば仁心もおこらざるべき。

◎學問は、身を修め人を治むるを有用の學とす。是れ眞の學問なり。もし、左もなく、文字を知るを以て學問とおもひ、多く聞き多く見るに、博學多識なりとも、何の益もなき無用の學なるべし。故に、只有用の學を務むべし。無用の學をなすべからず。

◎眞西山曰く、人の君たるもの、大學を知らずんばあるべからず。人の臣たるもの、大學を知らずんばあるべからずといへり。君も臣も、身を修め、國家天下を治むる道、大學の書にそなはれり。是を

讀みて、受用せずんばあるべからず。又、中庸の九經に、身を修め人を治むる道備はれり、考ふべし。此の二書を能く讀みて、受用し行はば、外に求めずとも、其の要は、此のうちにあるべし。

◎世を治むるに、大道二あり。文と武となり。文は、徳を専らとし、武は、威を専らとす。威と徳と二ながら備はりて治道なれり。徳なければ人なつかず、威なければ人恐れず。文武の徳なくして、人なつかず、人恐れざれば、怨み背きあなどりおかし、世治まらず。仁にして人を愛するは、文徳なり。義ありて人を正しくするは、武徳なり。もし、古事を覺え詩歌を作るを以て文とし、騎射を習ひ劍戟をふるを以て武とするは、甚だ小にして末なり。

◎人の上たる人の學問は、詩を作り文を書き、大和もろこしの故事來歴を多く覺え知る事にはあらず。ただ、古聖賢の教をうけて、身を修め人を治むる道を知る、是れ則ち、君子の學なり。まづ、大學を以て道に入るの門とす。次に、論語・孟子・尙書及び大學衍義を考へ知り給ふべし。是れ、身を修め人を治むるに益あり。又、通鑑は、漢土歴代の記録にして、古人の行ひし善惡の跡を記し、評論を載せれば、尤も政治の道倫理綱常の教に益あること、四書(大學・中庸・孟子)六經(禮・樂・詩・書・易・春秋)に次げり。古人のなせる善惡の跡を考へて、今日行ふ所の是非を辨ふべし。聖人の經は、萬世の則なり、通鑑は萬世の鏡

なり。聖人の書は、譬へば、醫書の病論のごとし。病の因縁を知り、療治の法を知り、通鑑は、古人の療治せし醫案を考へ、其の藥法を知るが如し。古人のなせる跡を考へ、今の病人に對して療治するは、今日に於て甚だ切要なり。通鑑を考へて今の鏡とするは、端的にして切なる事なり。政事を執行ふ人は是を考へずんばあるべからず。

◎上天道にかなひ、下人心にかなひ、中義理にかなふ道一あり。其の名いかん。公と言ふ。公とは、私なきをいふ。又、上天道に背き、下人心に背き、中義理に背く道一あり。其の名いかん。私といふ。私とは、公ならざるなり。人我を忘れて、身に私せざるを、公と言ふ。人我を立て、人の事をすて、専ら、我が身の爲のみをするを、私といふ。君に事ふる道を以ていはば、我が身を忘れて、ひとへに君に忠するは、公なり。専ら我を利して、君をわするは、私なり。私心深ければ、いかなる非義をもなすものなり。故に、人の善惡は、公私の二を以て分ち知るべし。君に私あれば、民を愛する心眞實ならずして、人民信服せず。臣下に私あれば、君に忠なく、民に愛なし。才能も見るに足らず。其の餘は皆是にならへ。

◎身を修むるには、天理と人欲との勝負を試むべし。身を養ふも亦然り。民を治むるには、君子と小

人の進むと退くとを以て、治亂を知るべし。

◎上より利欲を行ひて下に見せしむれば、臣下も民も、皆、小人となる。上より禮を好みて下に交れば、臣下も民も、君子となる。凡そ、風俗は、皆、上よりおこる。上の好む事は、必ず、下にも好んで風俗となる。風とは、導き行ふなり。俗とは下に習ひて行ふ所なり。

◎古の聖人、國を治め民を安んずるの道、其の要三あり。政・教・刑なり。士には、禄食を興へて、義を守り利欲に遠ざからしむ。農には、公役を省きて、年貢を軽くし、力を耕作に盡さしむ。桑麻をうるゑ、布帛を織らしむ。工人を恵みて、其の利用を賞し、無用の華美の物を作ること禁ず。商賈を通じて、運上を軽くし、市の價を平らかにして、奇巧無益の物を賣り、姦利をなす事をいましむ。此の上に、游惰を警め、奢侈を禁じ、儉約を行はしめて、四民ともに其の分を安んじ、其の業を勤め、衣食足りて困窮に到らしめず。是れ、民を養ふの政なり。上徳行を勤めて、下の手本となり、學校を建て、師をたて、士民に人倫の道を教へて、士は禮義を知り、庶民ともに善に遷り、罪に遠ざからしむ。是れ教なり。斯の如くして、民政に従はず、教に入らず、人の害となる者あれば、其の罪を正して、是を懲す。是れ、刑なり。此の三の考へは、國を治むるの要なり。後世にも、此の事なき

にはあらず、只、其の法古に及ばず、且つ、行ふもの其の人にあらざれば、其の具ありといへども、其の道行はれずして、國治まらず。

◎人の身のはたらきは、一心を主とし、兩手兩足を使ひものとす。身の内少しにても痛む所かゆき所あれば、手行きて是をさすりかく。是れ、我が心、吾が身を愛すること切にして、心と身と一體にして通ずる故なり。君の心に仁愛厚くして、萬民を憐む心深ければ、民の愁ひ苦しみを知りて、恵み施さざる事なかるべし。

◎孟子に、仁心ありといへども、仁政を行はざれば、民其の澤を被らずといへり。國を治むる人、何程慈愛の心ありても、善政を行ふ道知らざれば、只、目前の小惠を行ふまでにて、國民の心を心服する程のことは是なし。昔、齊の桓公、老人の飢ゑたるを見て、食を賜はる。老人辭して云く、願はくは國中の飢ゑたる者に食を給はらば、我も飢ゑまじきとて受けず。又、或る國の宰臣、貧人に物を施すことを好みて、外に出づる毎に、必ず、錢袋を持たせ行きけるに、乞丐、其の惠を得んとていつも街にみてり。或る者諫めて曰く、賢人を擧げ用ひて、貧民を救はしめば、萬人其の所を得て、飢寒に及ぶまじ、何ぞ小惠をなすやといへり。仁心ありといへども、仁政を行はざれば、民を救ふ功

なくして、國の治に益なし。

◎孟子曰、親親而仁民、仁民而愛物と言へり。君子の道は、仁を専として、人を慈しむ物を憐むなり。其の内に、天然の次第あり。まづ、親を親しむとは、父母・兄弟・親類・縁者を厚くするをいへり。次には、民を仁す。民を仁すとは、臣下萬民を廣く慈しみ、各、其の所を得せしむるをいふ。もし、一人も其の所を得ざれば、仁するにあらず。其の餘は、物を愛するにあり。物を愛すとは、禽獸・蟲魚・艸木を亂りに殺さず、亂りに伐らざるをいふ。其の内、親疎・貴賤・有情・無情・大小の次第によりて、仁を施すに厚薄の替りあれば、かく三つの品をわけ、教を立て給へり。すべて言へば、親しむも愛するも、皆仁なり。

◎仁政を行はんとならば、まづ、儉約を守るべし。儉約は、奢縦ならざるなり。衣服居室よろづ内の事につきて、華美を好まず、亂りに費さざる是なり。國大なりといへども、土地より生ずる米穀、其の外の財は、限りあるなれば、上の物ずきにまかせて、無用の費をなせば、財を用ひ盡して、年々に足らず。況んや、歲の豐凶ひとしからざれば、財用の積りも同じからず。上の財乏しければ、禮義を行ひ、變に備へ、貧窮を惠むこともならず、果は下を虐げ取り、債を負ひて、約束を失ひ、國

危亡に至る。何ぞ仁政を行ふに暇あらんや。古より、明君賢主みな儉約ならぬはなし。儉は、誠に君の美德なり。

◎古の法は、三年耕して一年の食あり。農を以て立てば、田を四丁作る者は、年貢の外、其の得分を四つに分ち、三丁の穀を其の一年につかひ用ひて、一丁の稻は、其の儘残しておく。毎年かくの如くすれば、三年には、三丁分の穀を餘す。是を三年耕して、一年の食ありといふ。君と臣は、我が祿を四に割りて、其の三を一年の用とし、其一を餘して貯とす。三年積れば、一年の祿をあます。九年にして、三年の貯あり。三十年にして、十年の貯あり。昔、帝堯の時、九年の洪水あり。殷の湯王の時、七年の旱ありしかども、民の飢餓なかりしは、常に儉約行はれて、上下共に其の備ありければなり。後世は、華美の風俗盛になり、費用歳々に廣くして、常年にも財穀足らず、僅に一年穀熟せざれば、上下共に困窮す。儉約行はれずして其の備なき故なり。

◎君一人の私慾を恣にし、我が身一人を樂しまんために、多くの人民を苦しむること、我が本心に省み求めば、誰とても、こゝろよからざるべし。人の君として民を憐むは、誰もあるべき所の本心なり。君たる人は、此の本心を保ちて、心よからんことを求むべし。人を苦しめしへたげて、我れ獨り

愍み樂しむこと、誰も心よからざる事なれど、私欲に迷ひて、其の快からざる事を却つて心樂とする、是れ、民を憐むの本心を失ひて、斯の如し。譬へば、傷寒を煩ひ、大熱病をうけては、平生食する所の飯も味噌も魚鳥の肉も、味あしく苦くして喰はれず、喉がわきて、平生の好める旨き味をきらひ、冷水を頻に飲めば、却つて、快きが如し。國土あれば、米穀金銀の財は、おのづから生ずるゆゑ、上より儉約を行へば、土貢を軽く取り、運上をもとめざれども、國の財豊かにして缺くる事なし。昔、漢の文帝、天下の民貧しとて、一年或は半年の貢を度々免し給ひ、運上など求めざりしかば、天下の藏入の財少く、國用たらずして、困窮し給ふべき事なれども、在位二十三年の間、國豊に民富みて、天下太平なり。天子の倉には、米多くして腐り、錢繩朽ちてきれぎれになりぬるよし、漢史に記し置けり。是れ、儉約を行ひ、諸の費を省き給ひし故なり。帝の儉徳を史に記し侍べるは、身に皂綿を著給ひ、幸する所の慎夫人、衣裳を地にひかず、殿上の帷帳、文繡の飾なし。嘗て露臺を作らんとて、工人に命じて、其の費を積らせたまひしに、百金を用ふべきよし奏せしかば、百金は中人十家の産なりとて、其の作事を止め給ひしとなり。上一人かくのごとく、少しの費を惜みて、聊の奢なく、下を厚く恵み給ひしかば、群臣以下、其の徳に化して、儉を守り、富み足らす事、

宜なるかな。

◎君子の財を費して、貧を救ひ人をたすけ善を行ふは、其の財を惜まざるにはあらず。其の財を惜むこと甚しくて、善事に財を用ふるなり。故に、人を救ひ患む事を好む人の、常の財の用ひやうは、儉約にして妄りに費さず、患なる人の目には、財を惜めると思へり。又、常に奢り、財を亂りに惜まざる人は、必ず、人に施し救ふ事は、惜みてせざるものなり。凡そ、我が身の爲に財を惜みて、人に施すに惜まざるは、君子の財を用ふる道なり。我が身のため小財を惜まずして、人に施す事を惜むは、小人の財を用ふるなり。

◎匹夫立針の地を持たず、衣薄く、食足らざる者多し。されど、是れ亦、天地の子なり。國郡の主も、亦、天地の子なり。國を保つ人は、其の財祿の多きこと、匹夫と幾萬倍といふことをしらす。同じく天地の子にして、其の財祿の多少天地懸隔なること斯のごとし。然るに、國郡を保つ人は、其の國郡の寶を用ひ、身を養ひて足らず。下にある匹夫の、常にさへ衣服たらずして、飢寒を免れ難き者の財を貪るは、天道の萬民を養ひ恵み給ふ心に叶ふべからず。國郡の主といへど、其の喰ふ所は、匹夫より多きこと能はず。著る所も、匹夫より長きこと能はず。居る所は、一屋に過ぎず。然れば、國郡

の主といへども、財多きことを求むべからず。其の領地に生ずる財を用ひて餘あり。然るに、もし、其の領地の財用にてたらざるは、是れ、侈をなし、費多くして、其の財を失ひ、儉約を行はざればなり。

◎國土に一年生ずる所の五穀の總數をかぞへ、國土の人民一年の開食する所の糧の數をかぞへくらぶるに、一年生ずる所の五穀にては、一年の糧足らず。是れ、貧民は、雜穀菜根を食して、飢を助くる故なり。商人の酒を造り、菓子を拵へ、士の奢侈をなして、朝夕定まれる食の外に、穀食を費すは皆是れ、民の食を奪ひてなせるなり。

◎貧賤なる人、富貴なる人の財を食るにすら、猶いやしむべし。少しく義理を知れる者は、是を恥とす。況んや、富貴にして郡邑を領する程の人、貧民の財を食り取ること、いと不仁にして、其の心尤も惡むべし。人の財を食らざれども、わが財を亂りに費さず奢らず、我が欲を忍びて、人に借らざれば、財のびて不足なし。

◎世俗の、廻り遠しとて行はざる事に、却つて、其の驗近くして、其の益大なる事あり。其の驗するどにして近きと思へる事に、却つて、驗なくして、害になることあり。道を行ひ、儉約を守り、與ふ

べきを興へ、取るまじきを取らず、廉直なれば富む。儉約ならず、與ふべき物をも與へず、財を用ふべきにも用ひざれば、道に背きて財たらず。國郡を治むるに、民の年貢工役を軽くして、民を愛すれば、國郡の財満ちて餘あり、君の國用も不足なく、凶年もまねなり。もし、かくあれば、廻り遠くて、今の世には用ひ難しといひて、法をするどにして、民をきびしく使ひ、年貢を過分に取れば、民貧しく、力盡きて國の財足らず。然れば、廻り遠きが、するどなるより、其の益大なり。

◎士民に、常に奢らず高ぶらず儉約すべしと教ふれども、從はざるは、上を信ぜぬ故なり。上より儉約を行ひ、禮義を重んじて、下に示せば、臣民おのづから謙りて、儉約を守りて奢らず。是れ、身を以てをしふるなり。下は、上の詞に從はずして、行に從ふものなり。桀紂の惡王といへども、其の臣に惡せよとは教へず。只、其の好む所行ふ事惡しき故、天下の惡人、其の朝に集り、善人は、日々に遠ざかりぬ。是を其の言に從はずして、其の行に從ふといふ。

◎古人の曰く、天下の患は、在位の人學なきより甚しきはなし。在位の人學を知らざれば、君大道を聞くことを得ずして、世俗のいやしき論に從ひ易くして、義理の言入り難し。然れば、學は、君臣の要法ならずや。

君子訓中

伊訓に、爲_レ君克明、爲_レ臣克忠といへり。此の意は、君の徳は、明らかなるを主とす、明らか
 なければ、人を能く知りて、善き人を用ひ、悪しき人を退けて用ひず。故に、國能く治まる。臣下の徳
 は、忠を主とす。忠とは、君の爲に心を盡して、誠あるなり。忠なれば、官職を勤め、善人を擧
 げ進め、君の過を諫めて、善にうつらしめ、我が身の利害を顧みず、唯、偏に君の爲に心を盡すゆゑ
 に、忠臣は、國の至寶とすべし。不忠なれば、君の悪しき事を知れども、諫めず、君の爲よき事あれ
 ども、言はず、只、君の寵を願ひ、官祿をのみ心に懸くるゆゑ、其の實は、盜賊に異ならず。
 ◎堯舜の聖といへども、一人にて衆事を治むること能はず。賢者を選びて職を分ち、是に任じて疑
 はず。賢者職にありといへども、一時に功を立てず、久しく其の職を勤め、其の事に熟して後、其の
 功成就す。政を爲すに、小利を見て速ならんことを好むは、聖人の戒なり。
 ◎古の聖主賢君は、必ず、賢者を求めて、職に任じ政を佐けしむ。故に、國よく治まりて、其の功大
 なり。君たる人は、先づ、我が心を正し、知を明らかにして、人を能く知り、宰臣を選び、次に、諸

有司を選ぶべし。宰臣は、家老なり。諸有司は、諸役人なり。今時の取次役・目附役・郡町の奉行・
 勘定の司の如きは、政事に係りて重き有司なり。宰臣有司其の人にあらざれば、政亂れて國治ま
 らず。宰臣は、才徳有りて大量なる人を選び用ふべし。取次は、上の詞を下に通じ、下の言を上に通
 ず。其の人悪しければ、上の惡下にくならず、下の苦上に聞えず、上下の情通ぜずして、君徳
 昏くなる。目附役は、臣民の善惡を糺して、直言する職なれば、君の耳目なり。郡町の司は、殊に、
 仁愛深き人を用ふべし。君と宰臣と賢なれども、此の役人不仁なれば、民を安んずること能はず。勘
 定の司は、廉直にして算數に達したる人を選び用ふべし。其餘は、是を推して、其の職に宜しき
 材を選びて任ずべし。此の如くなれば、官其の人を得て、國治まり民安し。尙書に、政在_レ知_レ人在_レ
 安_レ民といへり。
 ◎君子と小人とは、譬へば、水と火との如く、香と臭のごとし。一時に相並びては用ひがたし。小
 人用ひらるれば、君子の道は行はれずして、君子は、終に小人の爲に讒せられて、退くに至る。人を
 知ること、古人も、是を難しといへり。人の言語容貌を見て、其の心底を知ること、至明の人と
 いへども必としがたし。孔子も、其の言を聞きて其の行を觀ると宣へり。觀とは、心を用ひて察する

なり。古人は、人のすき好むこと、其の人の親しき友の善悪を以て察し、又、其の平生行ふ所の善悪を見て、其の人の賢不肖を知り、事を問ひ業を試みて、其の材能の長短を知る。是れ、古人人を知るの法なり。人を知り、時を以て君に告げて擧げ用ふるは、宰臣の職なり。

◎凡の人は、忠信ありて後、才力を用ふべし。忠信は、貞實にして偽なきなり。不實にして材能あるは、盗人なり。近づくべからず。忠信あらば、才力少し鈍くとも、學問し物馴れたらんには、世用に違すべし。才能ありても、忠信ならぬ者を用ひて、後悔したる君、古今に多し。

◎古は、才徳ある人なれば、家筋にもかゝらず、賤しき者にも、擧げ用ひて、職を授く。材能なき人は、貴族にても、其の父祖の祿ばかりを其の儘あたへて、官職に任ぜず。政に益なきゆゑなり。

◎凡そ、人に能あり不能あり。賢者といへども、亦然り。一人に備はらんことを求むれば、天下に取るべき人なし。人々の得たる所を知りて、其の人の能くすべき職に居らしめば、果して其の職を能く勤めて功ある時は、賞を與へて、久しく其の職に任ずべし。其の職に久しく居れば、其の事に熟して功多し。堯舜の時、賢臣皐陶稷契の如き、皆、一生官を遷し給はずして、功庸多かりしなり。後世の君は、臣下の微勞を賞して、たやすく官を遷すゆゑ、皆、其の職に熟せず、或は、不得手なる事

にかゝりて迷惑し、國政に益なく、害多し。但し、人を用ふる始めに、官に任じ其の能を試みて、後擧げ用ふるは、左もあるべし。其の得たる所を知らずして、官を遷すは、人を用ふる道にあらず。

◎萬の事は、勤むるによりて成り、惰るによりてすたる。各、其の位にありては、其の職分を慎むべし。一念愼まざれば、衆人の患となり、一日愼まざれば、永き患となるなり。

◎位は座席なり、祿は食色なり、官は職事なり。古は、職を勤めて功あれば、位を進め、祿を増し、金帛など賜はる。官を以て賞とせず。官は、能に授くるものなり、褒美の具にあらず。周の世の法は、士の子、其の才徳なければ、父の官を繼がず、是を世々にせずといふ。大臣の子といへども、必ず、其の才智勝れざれば、其の父の祿を與へ繼がしめて、其の父の官職をば繼がしめず。大臣の子なればとて、其の人の、其の職にかなはずば、君のため民のため悪しく、萬事治まらず、是れ、災の本なり。然るに、後代は、事しげくして、官職年々に増し、其の祿を世々にし、後は君の倉入の財盡き虚しくなる。是を以て、唐虞（陶唐）の世に、官に勤むれば、其の官につきたる祿を與へ、其の官に任ぜざれば、其の祿を與へず。是れ、今の役料といふものなり。是れ、萬世に行はれて害なき良法なるべし。官職を授かりし人、其の人老死して、其の子の才なき者に、其の祿を其の儘與ふれば、君の

財祿盡きて國用足らず。

◎賢者といへども、過失なきこと能はず。小過を救さざれば、其の功を成しがたし。

◎凡そ、人の譽め誹り、必ず、みだりに信ずべからず。善人にも、人を知ること味き人ありて、譽め誹りに誤あり。又、小人・婦女・奴婢は、知なく私ありて、人の善惡・邪正を知らず、我が心に合へば、悪人をも譽めあげ、心に合はざれば、善人をも誹りおとす。善行をも惡しといひ、惡行をもよしといふ。小なる事を大に言ひなし、大なるひが事をも告めず、時の勢に徇ひて、ほめそしること定まらず。道理に違ひ、正直ならず。愚なる人は、かゝるひがことを信じて、君子を退け、小人を親しみて、小人にたぶらかされ、名を汚し身を亡ぼすに至る。つゝしむべし。

◎宰臣の職は、君を輔佐して、其の過失を正し救ひ、政の善惡を論じ、賞罰を正し、諸有司をすべて、其の成功を賞め、廣く人才を求めて、他日の用に備ふ。細務を自らせず、有司に打まかせ置きて、年限を以て、其の功過を察し、君に告げて、是を進退すべし。有司の務を一々上より指圖すれば、いかなる良有司にても、其の才能を盡す事を得ず、上の意をうかがひ、上にかゝりて、身がまへし、其の職にはまることなし。斯の如くなれば、事立たずして、功ならず。初に精しく人を選び、是に職を

授けて後は、打任せ置きて、小過をゆるし、年限を以て考察すれば、其の能不能明らかに知るゝなり。◎凡そ、國を亡ぼす君も、其の君一人の仕業にあらず。一人不徳なれば、其の臣下諂ひて、惡を勧め導くゆゑ、國亡ぶるにいたる。上より下をうたがへば、下も亦上を疑ひて、其の心を盡さず。上誠を以て下を使へば、下も亦誠を以て上に應ず、自然のことわりなり。或は、人を信じて欺かるる事あるは、上の心不明にして、佞諛を好み偏愛に溺るゝ故なり。

◎晉の平公、其の臣叔向に、國家の患何れか大なるやと問はれしに、叔向對へて曰く、大臣は祿を失はんことを恐れて、君の過を諫めず、小臣は、罪を恐れて、敢て言はず。此の如くなれば、下情塞りて上に通ぜず。是れ國の大なる患なりと。上下の情通ぜざれば、上の人、身の行も國の仕置も惡しき事を聞かず、其の心、日々に驕りて、過惡増長するゆゑ、國の危き事、是より甚しきはなしといへり。

◎君たる人、我は諫を好めども、人我を諫めずといふは、僻事なり。譬へば、酒食は、人の好むものなり。故に、辭すれども、人必ずしひて進む。然れば、忠言の出でざるは、聽く事を好まざればなり。

◎管仲曰く、明君は、我が智を用ひずして、衆人の智に任す。我が力を用ひずして、諸人の力を用ふ。衆人の智を用ひて思慮すれば、明らかにして知らざる所なし。諸人の力を用ふれば、成就せざる事なし。人の目は、天際の遠き所を見れども、我が背を見る事能はず。心も亦然り。いかに聰明の人も、我が過失を知る事は明らかならず。故に、人の諫と世の謗を聞き、我が過を改むべし。昔、堯の時、進善の旗あり。善事を君に奏せんと思ふ者は、其の下に立つ。又、誹謗の木あり。大なる木を削り、都門の外に建て置き、何者にても、政の誤を思ひ寄りたるまゝに書かして、善言あれば、取りて用ひ給ふ。舜の時、政諫の鼓あり。君を諫めんと思ふ者、其の鼓を打てば、官人出て合ひて、是を聞き、帝に奏聞す。此の事、大戴禮に見えたり。殷の湯王は、聖人なり。然るに、其の賢臣仲虺と言ひし人、湯王の徳を譽めて、過を改めて、吝ならずといへり。仲虺、湯王を戒しめて自ら用ふれば、小しきなりといへり。自ら用ふるとは、我が才を自慢して、人の言を用ひざるをいふ。古の聖王すら、過を改め人の諫を聞き用ひ給ふ事かくの如し。況んや、聖人ならざる人、諫を受けて、過を改めずんばあるべからず。諫を聞くに、たとひ、人我が過を告げたるに、其の言當らずとも、皆、受け入るべし。斯の如くなれば、人諫を言ひ易くして、我が過を聞くこと多し。もし、我が

過なきを言ひ立て、逆らひ争へば、重れて告げ聞かする人なし。

◎臣下として其の職分に當らず、君の過惡を諫めずんばあるべからず。漢土の忠臣は、身を捨て、君を諫め、殺さるゝことを知れども願みず。凡そ、君の爲に身を捨つること、戰陣に限るべからず。身をかばひ命を惜みて、君の惡を知れども諫めざるは、不忠なり。況んや、官祿を惜みて黙すは、言ふもさらなり。我邦の人は、戰場に出でては勇なれども、諫争の一事は、漢土の人に及ばず。是れ、國の習はしなるか、無學にして諫の術を知らざるか。

◎諫の術二あり。直諫と諷諫となり。直諫は、明君に施す。明君は、いかなる強き諫をも用ひて怒らず。諷諫は、貞直に嚴しく諫めず、よそへごとにて、氣に障らぬやうに和らかに諫め、自からさとらしむることなり。張良が四皓(東園公、綺里季、南先生)を呼び出して、太子を易へしめず、穎考叔が莊公をさととして、母と和睦せしめ、魏文公の臣任座が文侯を譽めて、翟璜が直臣なることをさとらしめ、狄仁傑が武后を諫めて、唐を亡ぼさざるの類なり。只、諫を聞く人は、直諫を好むべし。諷諫を好むべからず。孔子の宣く、良藥は口に苦けれども、病に利あり、忠言耳に逆へども、行に利あり。湯武は、諫を用ひて、天下を保ち、桀紂は、諫を拒ぎて、身を失ふ。凡そ、歴代の君の善惡と、國の

治亂興亡は、ひとへに諫を用ふると拒むとの二にあり。

◎東坡が曰く、治亂は、下情の通塞に出づ。凡そ、國家の治亂は譬へば、人身の無病なると病あるが如し。血氣流通すれば、無病の人となり、血氣めぐらざれば、病人となる。下の言ふ所上に通じ、下の諫を上用ふれば治まる。是を言路通ずといふ。言路通ずれば、國家治まること、血氣運りて無病なるが如し。言路塞がれば、國家亂るること、血氣運らずして病起るが如し。古語に、上たる人、下の諫を肯き入れざれば、譬へば、驢の如し。斯の如くなれば、臣下たる者は、上を恐れて、口を閉づ。譬へば、瘡のごとし。君は驢となり、臣は瘡となりては、國家の治まらんことを願ふとも、得べからず。

◎家を治め民を治むるには、嚴なるを善とす。嚴とは、まづ、我が身を正しくし、輕々しからず、法をたつるにゆるがせならず、民の僻事を制して救さざるをいふ。嚴なれば、人恐るゝ故に、法立ちて破れず、民惡をなさず、罪に陷るもの稀なり。嚴ならずしてゆるがせなれば、初は、民も家人も悦んで譽むれども、後には、怠しておそれず、法ゆるまりて立たず、罪を犯す者多し。始め嚴なれば、後に事なし。始め緩なれば、後に事多くなる。嚴は、きびしきなり、不仁なるにあらず。民を惡に入

れぬため、きびしくするなり。譬へば、水は柔らかなるゆゑ、人侮りて溺死する者多し。火は嚴なるゆゑ、人恐れて近づかず、燒死する者少し。法も亦斯の如し。

◎人君の、臣下を治め、萬民を服せしむるには威なり。威とは、怒を起し、氣を烈しくするにはあらず。其の威權を下に假さずして、臣下萬民の者をおさへ、惡を譬むるをいふ。もし權臣に威を奪はるれば、上の威輕くなりて、律制立たず、諸臣萬民法を畏れずして、下知行はれず。故に、威は、只、上にあるべし。下に移すべからず。

◎文王は、臣を視ること傷むが如しとて、臣を治めて既に安けれども、猶も傷み苦しめる事あらんかと憂へ給ふ。是れ、仁者のこころ、國家を治むる第一の用心なり。左傳にも、國の興るは、民を視ること傷むが如し、其の亡ぶるは、民をみる事土芥の如しといへり。是れ、國の治亂興亡の分るゝ所なり。

◎凡そ、民は素直なるものなれども、上より下を欺げば、下も上にならひて詐多くなる。是れ、上より下に僞を教ふるなり。民の性、もと僞多きにあらず。上下の勢異なるゆゑ、上より下を欺きても、民すべきやうなくして、暫しは、上に従ふものなれば、上より下を欺くこと、多し。

◎幼くして父なきを孤といひ、老いて子なきを獨といひ、老いて妻なきを鰥といひ、老いて夫なきを寡といふ。是を四窮民といふ。天下の内にて、いと不幸にして、便なき者なり。此の四の者、世に多けれども、其の親類の財力ありて養ふ者は、飢寒に及ばず。其の餘の飢寒に及ぶものは、大村といふとも、二三人に過ぐべからず。是を養ふに、其の費多からず。其の所の奉行司より、常に扶助をなして、飢寒せしむべからず。是れ、奉行たる人の職分なり。民の飢寒するは、其の所の政苛ければなり。故に、乞人の多きは、司の恥なり。

◎我が朝にても、上代の帝王の政には、老人を憐み給ひ、年八十以上の民には、位一階を授け、緇綿布粟をたまはり、孝子・順孫・義夫・節婦をば、其の門閭に表して、終身事なからしめ、鰥寡・孤獨・疾病ありて、自から存し難き者をば、恵み救ひたまひし事、舊記に見えたり。又、大風に逢ひて、百姓の廬舎破壊したるは、其の年の田租を免されし事あり。

◎農は國の本なり。一年の間、隙なく耕作を務め、米穀を作り出して、上に貢し萬民を養ふものなり。最も憐みて、飢寒の憂なからしむべし。農の時を奪はざるは、農の爲のみならず、國の爲なり。農民は、日夜勤勞すれども、やゝもすれば、水旱風蟲の災ありて、其の利少し。歳凶して土貢を納む

ることを缺けば、妻子をうり身を賣るに至る。年豊なれば、米穀價やすくして、困窮をまぬかれず。利少き故なり。工人は、其の勤、農に及ばざれども、其の利多し。商人の利は、工に倍す。故に、農人漸々に減じ、工商は年々に増す。田を作る者は少くして、器を造り貨物を商ふ者多し。布を織るもの少くして、綾錦を製し、繡・染を事とする者多きは、世間困窮の本なり。是を以て、古の明王は、農を重んじて、工商を抑へ、五穀を貴んで、金玉を賤し給へり。儉約を行ひて華美を禁ずるは、本を重んじ末を抑ふるの道にして、國を治め民を安んずるの政なり。

◎農の田を頼むは、魚の水に住み、木の土に生ずるが如し。魚水なければ死し、木は土なければ枯る。民に田なければ業を失ふ故、農の田をはなるは、憐むべし。

◎聖人、民の力は國の基なる事を知り給へり。故に、公役をば省き、民の隙を惜み給ふ。周禮には、民を使ふこと、豊年には一夫三日、中年には二日、凶年には一日、至りて年悪しく民痛めば、一日も使はずといへり。

◎民豊なれば、奢りて法に背くといふ人あり。是れ、政を爲る道知らざるなり。民貧しければ、盜む心を生ず。民を憐みて、衣食乏しからず、困窮せしめざるは、盜を止むる基なり。法度を明ら

かにして、民に分限ぶんげんを守らしむれば、豊なけれども奢かる事なし。斯かくの如くにして、民其の分を踰こえて奢り怠り、或は、盜する者あらば、罪に行ひて免ゆるすべからず。民は愚なる者なれば、まかせ置きては、治まるべきやうなし。衣食不足ふそくなきやうにして、其の奢おごりおこりを戒しめ、罪に陥おちらしめぬは、政をするの道なり。

君子訓下

君子は、國土の利を取り盡つくさずして、民に與へ、運上うんじやうくわやく課役をかけたて、民を苦しめず。然れども、民の利を恣ほしにする事を禁ず。且つ、仕へて君の祿ろくを得る者は、商をなし利を求むべからず。故に、古訓こくにも、大を受くる者は小を取らずといへり。天道の物を生ずる、二ながら全き事なし。牙きはある獸には角なし、角ある獸には上齒うはばなし、翼つばさあるものには手なし、花よきものは實みあし、實よきものは花あし。士として君の祿を得る者、民と利を争あひ、民の財を奪ふは、天道に背そむけり。

◎世閒に多く人を殺すこと四あり。刑・兵・歳・病なり。一には、刑を誤まりて、科とがなき者と科輕き者とを殺す。二には、わが身亂らんをおこして、科なき敵味方てきみかたを多く殺し、又、我が不仁無禮なるによりて、

人に兵亂ひやうらんを起さしむるなり。三には、水旱風蟲の災にあひ、民多く餓死がしす。四には、民諸の病にかゝり、殊えきに、疫病えきびやうはやりて、人多く死するなり。是の四の物は、皆、よく人を殺ころす。此の内、刑と兵とは人に係かり、歳と病とは、天にかゝる。されど、四のもの俱ともに人民を殺すに至らずして、活いす道あり。まづ、刑を以て云はば、民を惠めぐんで衣食を足らしむれば、民盜ぬすをせず、科人とがにん少し。其の上に訴い能く聞分け、理非直曲りひちよくきよくを明らかたにすれば、罪なき人を殺さず。兵を以て云はば、仁義を行へば、人怨うらみ背く者なくして、兵亂起おこらず。我が身兵亂を起さざるは、言ふに及ばず。歳を以ていばば、民の土貢どくを輕く取り、民を多く使はず、三年耕たがして一年の食あらしめ、飢ううる者を助け救へば、凶年に逢あひても、餓死がしの愁うれなし。病を以ていばば、民に情ありて、死寒うれひの愁うれなからしめ、病の本を防ぎ、醫藥いやくを施して、病ある者を救へば、病死びやうしの災少し。是れ、人に係かるもの、憂うれを去るのみならず、天に係るものといへども、人力じんりよくを以てうれひを防ぐなり。

◎民の飢うを救ふに、早く救へば、費少くして、施ほし。遅ければ、費多くして、施ほ狭せまし。又、飢人を救ふに、朝夕兩食てうせきの内、一食を與ふれば死しなず。其の飢うの甚しきと甚しからざるをえ選えびなくして、妄あやに多く與ふべからず。一日に一食を與ふれば、米多からずして人を救すふ事多し。一處には飢うを疲つかれて

弱き者には、わきて朝夕薄き粥を與ふべし。食に飽かしむれば死す。氣力出來て後は、食を與ふべし。一所には未だ疲れざる者を集めて、一口に一度食をあたふべし。

◎貧賤なる者、或は、獨身なる者、老人小兒など、人にいひかすめられ、或は、飢ゑ凍えて苦しむる上に訟ふれども、奉行人取擧げざれば、其の奉行人を罪に行ふ。是れ、周禮の法なり。

◎五穀と木の實と、未だ實のらざるを取らず。又、市に賣らず。小なる木を伐らず、小さき魚を取らず。萬物の成就せざるをそなはざるは、仁愛の一なり。其の上、物の長大になりて取用ふれば、民用國用のためになるなり。

◎漢の宣帝、諸國に倉を建て、米やすき時は、價を増して高く買ひて入れ置き、米貴き時には、價を減じて賤く賣る。名づけて常平倉といふ。夫れ、米甚だやすければ、士農の爲あしく、甚だ貴ければ、工商くるしむ。貴きと賤きとは、其の害同じ。此のゆゑに、常平倉の法を行へば、此の害なくして、四民ともに困窮に至らず。我が邦にも、古へは、是に效ひて常平倉あり、義倉あり。義倉は、水旱等の災ある時、飢民を救はんために設く。これ、良法なり。但し此の法、上に財乏しくては行はれず。

◎和漢世末になりては、虚文多くして、忠實少なし。誠は日々に衰へ、偽は月々に盛なり。道を行はんとならば、當世の飾りて奢りたる風俗を改め、古人の質素淳朴の風俗に立歸るべし。唐の太宗、天下を治むるに、奢を去り、費を省き、公役を軽くし、年貢を少くし、正直にして無欲なる者を民のつかさとす。數年の後、民衣食餘ありて、路に落ちたるを拾はず、商人野に宿しても、盜の患なし。奢靡の俗をひるがへして、淳朴の風に歸せしは、只、上の政其の道を得たればなり。

◎君子たる人、領内にある大社名山大川などは祭るべし。維令、正しき神にても、祭るまじきを祭るを淫祀といふ。淫祀は福なし。是を祭るは、詔へるなり。惑といふべし。富貴の人、我が身の榮華を祈らんとて、神社佛堂を建て、萬僧を供養し、萬灯をともし事あり。其の費は多けれども、民のためには、露程も補なし。其の財の費を以て、貧苦なるものを救ひ助けなば、いかばかりか功德となりて、天の恵もふかるべきに、我一人の心を慰めんとして、多くの人をなやまし、かゝるはかなきことをするは、愚なりといふべし。昔、梁の武帝、堂塔伽藍を多く立て、大功德なるべしとおもひ、達摩に問ひしに、達摩無功德といへり。武帝仁政を行はずして下を苦しめ、民の貨をへたげ取りて、無用の營作をなし、終には人怨み天怒りて、身も國も亡びたり。達摩無功德と答へたること宜なるか

な。達摩は、佛法中の人なれども、其の言斯のごとし。後世の多欲なる僧と、天地階懸といふべし。

◎風俗の悪しきわざを、世の成行に任せぬれば、諸人のわざはひとなる。其の所を司る人、是を戒しめて行はしむべからず。女子を嫁せしむるに、衣服器物など、分限にすぎ、甚だ奢りて、費多し。是れ、世のならはしとなれり。斯の如くなれば、其の産をうしなひ、人のたからを借りてつくのはず。是れ只、人の目を輝かしたるのみにて、益なくして害多し。男子は、又、學問すれば、氣へり病氣となるなどいひて、人の親をおどしませしめ、我が子にもいましめ防ぎて、學問せしめず、一生其の子を愚にす。是れ皆、愚俗の悪しく心得たるが、風俗となれるなり。又、前の年、妻を娶りし者あれば、睦月の始に、其の友となる者つどひて、其の人をとらへ、水をかけて、くみあひ戯れ、酒を飲み、肴を喰ひ、酔ひくるひて後は、いさかひ罵り、禍を生ずること多し。又、正月十日など、女子の道を行くを、童ども松の枝にて打ち、衣に墨などをぬりつくることあり。凡そ、かやうのいやしくて人を害する戯の習はしは、其所の長となるもの、堅くいましめて、其の風俗を改むべし。其の風俗に任せて禁ぜざれば、長となる職を虚しくして、智なく力なしといふべし。

◎凡そたはむれたる音楽を作り出して、人心を蕩かし、怪しく珍らしき衣服器玩、又は、からくりな

どにて、人を惑はし、鬼神左道を以て、人を誑かし、錢財を貪り取るは、皆、姦民の所爲なり。古の明君、政をするに、此等の事を堅く禁じて、背く者あれば重刑に行ひ給へり。

◎公事訴訟を聞くに、まづ我が心を平らかにし、氣を和らげ、各々其の人の心底を思ふやうに言に盡させ、目安なども思ふやうに書かせて、其の心を察し、證人を立てさせ、證文を出させ、我が私の眞實偏頗なく、親戚朋友の毀譽頼み助けを聞き入れず、扱、兩方いふ所の理のつづまりたる所をくらべて、其の曲直是非を決すべし。もし、片口を聞き、或は、傍より助け譽むる者の言を信じ、夫に惑ひ移りなば、聞き誤ること多かるべし。凡そ、訴を聴くに、先入の言を主とすべからず。先入の言とは、先づ早く言ひ入れたる方の詞なり。夫を信とし善と思へば、後に聞く方の言理あれども、皆、僻事に聞きなすものなり。

◎訴訟する者、正直なるは、我に理あるを頼み、奉行に賂を送らず。故に、奉行の助なし。不直なる者は、我が非を掩はんとて、奉行に賂ひ、手立を廻らすにより、是を助くる者多し。斯の如くなれば、理は僻事になり、僻事は理となりて、刑罰あたらず。

◎訟を聞くに、其の言の無禮なるを怒り惡むべからず。其の言のうやまへるに悦ぶべからず。訟を

聞くに、喜怒起れば、それによりて私出來るものなり。又、人の頼むによりて、其の方に喜を移すべからず。我が事しげく聞はしとて、夫によりて訟の事をあらく決断して、過ぐべからず。

◎賞罰は、君子其の臣民を御する大權なり。賞罰妄なれば、臣下の心服せずして、上の威輕くなる。功ある者を賞し、罪ある者を罰せんと、下知を立つるは、法令なり。もし、功あれども賞せず、罪あれども罰せざる時は、是れ、賞罰信なきなり。斯の如くなれば、法立たずして、民信せず。善をするに情りつとめず、惡をする事を恐れずして、罪を犯す者多し。尙書に、令出づれば惟を行はしめ反かざれといへり。此の意は、法令を出さば、初よく思案し僉議して、後まで破れざるやうに法を立つべし。一度下知を出しては、後まで其の法を用ひ、昔くものあらば、罪に行ふべし。斯の如くなれば、法立ちて破れず、民信じて能く守る。後まで立ちがたき法ならば、始に能く評議して、是を止むべし。是れ、始を慎しむなり。もし、朝に令して夕に改むる時は、民惑ひて、上を輕んず。

◎人を殺し、家に火をつけ、公の財を盗む大罪なれば、かならず、刑に行はるゝこと、いかなる愚民もしれり。父母尊長をないがしろにし、人を打擲し、いつはりを行ひ、人の財を盗み、人の妻を犯すたぐひも、亦、國の大禁なり。されど、右の三ヶ條の如くには、民恐れず、國郡を治むる人は、

兼れてかやうの禁制を嚴しく立て、月々に讀みきかせ、民をして深く法令を恐れしむべし。法令ゆるがせなれば、情りて罪を犯す者多し。民の父母として、我が國郡に死罪多きは、豈心に快からんや。是れ、不仁にして、民を愛するに心を用ひざればなり。

◎年八十以上七歳以下、死罪あれども刑せず。是れ、古法なり。八十に至れば、老いて智昏くなる。七歳以下は、智未だ開けず。故に、是を刑せず。

◎一人禁獄せられては、其の家の父母・兄弟・妻子・一族憂ひ苦しみ、家業を止めて勤めず。且つ獄中一日の苦、いはんやうなし。政をする人は、其の人の苦、其の家の患をも思ふべし。

◎凡そ、罪を犯して、未だ顯はれざる内に白狀する者は、赦す。これ、古法なり。又、知らずして科を犯す者は、赦すべし。再びに至るとも、大惡にあらずば、懲さしめて赦すべし。三度に至らば、赦すべからず。是れ、齊の桓公の言なり。

◎官ある人、公の法度を假りて、私の恩に報ゆべからず。

◎漢土唐の世に、律令格式の四法を立てたり。我國にも、古、朝廷に律令格式の書を作りて、其の法備はれり。是を官人に教へ學ばしむるを、明法の學といふ。其の師を、明法博士といふ。亂世

に及んで、兵火にかゝり、律と格とは亡び失せて、今少し残り。令と式とは、今も全本あり。律とは、罪を正す定法なり。いかやうの科は、いかやうに行ふといふ定法を記せり。此の定に従ひて、行へば、刑罰に誤なし。後代は此の定法なくして、其の所々の奉行職の人、我が心にまかせて行ふことになりぬ。もろこしには、唐の代に限らず、昔より律の書あり。近代も、明律あり、清律あり。本朝にも、古律亡びて後、法曹至要抄と云ふ書あり。貞永の式目も、律の類なり。令は、下知なす法なり。本朝には、淡海公の作り給へる令あり。清原夏野是を注せり。義解といふ。又、令の集解といふ書あり。格は、古來行はれし政を書きつけたり。今の留書といふものなり。某の年いかなる事ありしを、いかやうに行ひしといふ記録なり。式は、式法なり。延喜式、今もあり。此の律令格式の四書は、古、朝廷政務の軌範なり。昔の明法の學者は、此の四書を習ひしとかや。今も、古の道に本づきて、時宜に従ひ、律令の書を作りて、明法の學を講すべきことなり。

◎後漢の崔寔が言に、刑罰治亂之藥石也、徳教者興平之梁肉也といへり。言ふこと、是は、政をするに刑罰を用ふるは、病起りて後、藥を用ふるが如し。五常五倫の教は、平生無病の時、米肉を食して身を養ふが如し。故に、上たる人、徳を修め教を立て、民を導くべし。其の上に罰を犯す者は、

已むことを得ずして、刑を思ふ。教へずして人を刑にいは、仁にあらず。古の聖王は、一人を刑して、千萬人恐れ慍しむ。故に、刑は刑なきを期すといへり。

◎儀禮曰、父者子之天也、夫者妻之天也。是を以て推すに、君は臣の天なり。凡そ、君父と夫に背くは即ち天に背くなり。其の咎大なり。此の三は、天下の大倫にて、五倫の内にて尤も重し。故に、君父と夫とは、我に對して無道なる事ありとも、恐れて背くべからず。もし背く者あらば、罪に行ひて許すべからず。然らざれば、天地の間、人倫の道立たず、法度紀綱敗る。

◎或る處に頑民あり、しほしば其の父を打つ。奉行聞きて、其の罪を糺し、君に告げて、是を刑戮す。頑民殺さるゝ時まで、尙其の罪に服せずしていふ、我もし他人の父を打ち候はばこそ罪せらるべけれ、我が父をこそ打ち候へ、左程罪とは覺え候はず。かゝる無理なる刑にあふ事、不幸の至りなりとて、上を怨みけるとなん。或る士、是を聞きて、彼の民の言ひしも一理ありといへり。此の士不學にして、孝の道の重きを知らず、五刑(五刑)の屬三千にして、罪不孝より大なるはなしといふことを聞かずして、かくは言ひけるならし。然れば、四民(士農工商)ともに、人倫の教へなくんばあるべからず。村里に佛堂を建て、僧法師の輩、朝暮佛法を勧むる程にこそなるまじけれ。せめて、其所の司、時々

來りて耕作を勤め、父母を養ひ、君長をうやまい、法令を守り、廉潔をはげまし、正直にして、偽なく、人と争ふことなきやうに、教へ戒しめば、風俗正しく、萬民和順にして、使ひ易かるべし。殊に、農人は、世事になれず、悪習に染まず、其の心朴なり。道理を以て教へ導かば、善に遷り易くして、古の淳朴なる風にも立ち歸るべし。士の節義あるを、上より賞美すれば、士の風俗強くして、忠臣勇士多く出づ。もし、柔情にして、従ひやすき者を悦び、剛直なる士をきらへば、士の風俗弱くなりて、恥を知らず、佞諛の人多く出づ。故に、忠信を重んじ節義を貴ぶは、士を教ふるの道なり。

◎天に怪異あらはれ、地に妖祥起るは、皆是れ、天の人に變を示し、告げ戒しめ給ふなり。譬へば、親の子を憐みて、其の惡を止め善をなさしめんとて、せつかんするが如し。國家の主は、天の警を恐れ慎んで我が身を顧み、其の政を正しくして、國家を保つべし。若し是れ、自然に出來たることと思へるは、大なる不敬なり。天變恐るゝに足らずといへる事は、國家を亡ぼす基なり。人の君となり奉り職となる人は、いやしき人恐れて、上下の間遠く隔りて、下の心上に通ぜずして、下の憂ひ苦しみを知らず。故に、顔色を和らげて、下の情を盡さしめ、物の言ひよきやうにすべし。唐の太宗と、延喜の帝の、我が威の強くして、下の物言ひ離きを恐れて、顔色を和らげて、其の臣下に對し給

ふは、此の故なり。凡そ、政をするには、下情に通ずるをよしとす。王公大人といへども、自ら聞かず、自ら見ざれば、萬事味くして明らかならず、人民の愁ひ悦び苦しみ樂しみ姦惡私曲をしる事なり難し。善惡利害をしらず、國の豐饒凶荒家の費移りを知らず、祿位の高く多きに誇りて、下情に通ぜず、斯の如くにしては、臣民いかやうの惡を行ひても知らず。自ら聞かず見ざれば、下情に通じ知るべきやうなし。味しといふべし。

◎人を譏言する人は、人の小さき過をかざりて、大に言ひなすものなり。或は、過なき人をもあまりありと云ひ、君たる人、能く察せずして、其の言を信ずるは、迷ひの甚しきなり。譏を聞きて、善人を退くるは、其の善人の災のみにあらず、萬民の災なり。

◎鄒の穆公といふ君、下に命じて鳧と雁とを飼ふに、米を飼はず、只、糞を以て餌とす。或る時、食に糞なし。民に買へば、折節糞少くして、米の直より高く。依つて、其の司米をはましめんといふ。君川ひずして曰く、汝小利を知りて、大損をしらず。百姓朝夕寒暑を厭はずして、稻を作り出すは、鳥獸の爲に非ず。且つ、米は人の上食なり。何ぞ是を以て鳥を養はんや。藏の米を出して、價高くとも、臣の糞を買ひて、鳥に飼ふべし、藏の米を臣に與ふるは、則ち我が倉に在ると同じと言

益 軒 十 訓

へり。

◎大公望曰、以不仁得之、以不仁守之、必及其亡也。言ふことゝるは、不仁にして國を得たる人、不仁を以て其の國を守れば、かならず、其の一代にて亡ぶ。大和唐土其のためし多し。國の長久するは、其の君仁なればなり。亡ぶるは、不仁なればなり。桀紂以下歴代不仁の君、亡びざるはなし。魏舜湯武は、いふも更なり、漢の高祖・文帝、後漢の光武、唐の太宗、其の餘歴代の賢君は、皆、仁心ありし故、國長久せり。凡そ、國家の興亡、身の安危、皆、仁と不仁とによれり。禹湯は、己が身をせむ、故に、榮え給ふ。桀紂は、人をせむ、故に亡びたり。己を責むるは仁なり、人を責むるは不仁なり。仁の道、豈勤めざるべけんや。

◎唐の李昉といひし人、宰相となれり。客來れば、必ず三事を問ふ。一には、民間に何の憂苦ある。二には、今の世、政を行はんに、いかなる善道あるべき。三には、今の政にいかなる惡しき過やある。此の三の事聞きたしと言はれしなり。是れ、世間諸人の公論を聞きたく思ひ、又、下情の上

に達せざらんことを歎きてなり。宰相の法とすべし。

◎秦始皇の子二世皇帝の曰く、凡そ、天下を有つた貴しとするは、只、意を恣にし、慾を極めて

君 子 訓 下

樂しむ故なり。下を治むるには、只、法度を嚴しくして、下を制すれば、民上を犯さずして、亂起らずと言へり。是れ秦の天下を失へるゆゑなり。秦より以下、天下を治むること能はずして、天下を失ひ、身を亡ぼせる人多きは、皆此のゆゑなり。天下を有ちては、只、善を行ひて、廣く民を憐み慈みて、萬民各、其の所を得るを以て、樂とすべし。

◎臣下に祿を興へ過して、富貴になるれば、奢りて使ひ難く、用に立たず。臣下貧窮に迫れば、必ず、恥を知らず、僞り邪になりて忠なし。

◎凡そ、高官の前にありては、いかなる小人も、懼しき隠す故に、姦惡ありといへどもしれず。民に既みて懼しまざる故に、其の行ふ所、善惡まぎれなし。故に、吏の善惡は、下より告ぐる所を聞きて、其の上にて、其の善惡を糺すべし。訟ふる者を咎めず、民の口を塞ぐべからず。

◎或る明君の言にいふ、神の罰君の罰、誠に恐るべし。然れども、我が臣下の罰百姓の罰、尤も恐るべし。如何となれば、神の罰は、いのりて免るべし。君の罰は、わびことを以て遁るべし。只、民と臣との心を失ひて背かれぬれば、其の禍遁るべきやうなし。

◎漢土も大和も、王公の國土を得給ふことは、其の始は、極めて難き事なり。中にも、戰國の時に生

れて、家を興し國を得たまふ人は、安樂なる暇なし。風に櫛り雨に沐ひ、朝夕戰闘を事とし、自ら敵に臨みて、鋒鏑を冒し、萬死を出で、一生を得、常に心を勞し身を苦しめ、大艱難大辛勞を経て、終に大國を得、大祿を受け給へり。只、時の幸にて、故もなくたやすく國を得給ふにはあらず。又、既に國を得ては、城郭を築き、法制を定め給ふ辛勞も、亦はかりなし。其の勳勞をなし給ふことは、固より忠義の心に出で、只、我が一代の榮華を受けん爲にはあらず、代々賢子孫おはしまして、能く其の志を繼ぎ、其の法を守りて、人民を保ち國土を失はず、長久にして榮え樂しまんことを願ひ給ふ、是れ始めて國を得給ふ先公の心にて、君子創業垂統、爲可繼の意なり。其の子孫たる人は、其の先祖の大なる勳勞を以て、國を得給ふことの難きを思ひ、其の先祖を尊び、其の志を繼ぎ、其の法を守りて、永く國土を保ち、人民を始め給はば、是れ、其の先祖の志にかなひて、諸侯の孝行、是より大なるはなし。もし、先祖の國を得給ふことの難きことを思はず、我が身、何の辛勞もなく、居ながら國を領して、其の富貴安樂を受け、恣に驕り酒宴遊樂を事とし、剩へ我が才智に誇り、先祖を侮り、其の定め置き給ひし家法を破り、又、國民を苦しめ、政法を猥にして、終に其の臣民に背かれ、國土を失ふに至るは、諸侯の不孝、是より大なるはなし。此の思ふと思はざるとの二は、國家

の治亂存亡の機なり。諸侯の子孫たる人、此の二の機を察して、常に慎しみて、徳を修め孝を行ひ給はば、其の後榮永く傳はりて、令名限りなかるべし。

大和俗訓卷の一

爲學上

天地は、萬物の父母、人は萬物の靈なりと、尙書に聖人とき給へり。言ふこゝろは、天地は萬物を
うみ給ふ根本にして、大父母なり。人は天地の正氣をうけて生るゝ故に、萬物にすぐれて、其の心明
らかにして五常(仁義禮智信)の性をうけ、天地の心を以て心として、萬物の内にて其の品いとたふとけれ
ば、萬物の靈とはのたまへるなるべし。靈とは、心に明らかなるたましひあるを云ふ。天地は萬物をう
み養ひ給ふ中にも、人をあつくあはれみ給ふこと、鳥獸草木にことなり。こゝを以て、萬物のうち
にて、もはら、人を以て、天地の子とせり。されば、人は天を父とし、地を母として、かぎりなき天
地の大恩を受けたり。故に、常に天地につかへ奉るを以て、人の道とす。天地につかへ奉る道は、い
かんぞや。およそ、人は、天地の萬物をうみそだて給ふ御めぐみの心を以て心とす。此の心を名づけ
て、仁と云ふ。仁は、人の心に天より生れつきたる本性なり。仁の理は、人をめぐみ物をあはれむを

徳とす。此の仁の徳をたもち失はずして、天地のうみ給へる人倫をあつく愛し、次に、鳥獸草木をあ
はれみて、天地の、人と萬物を愛し給ふ御心にしたがひ、天地の御めぐみのちからを助くるを以て、
天地につかへ奉る道とす。これすなはち、人の道とする所にして、仁なり。仁の理をわかつては仁義と
なり、仁義をわかつては禮智信となる。五の性をすべて五常といふ。たとへば一年をわかつては陰陽とな
り、又わかつては、春夏秋冬四時となるが如し。仁は五常をすべて其の總名なり。五常は。人に生れ
つきたる理なれば、五性といふ。性とは、人の心に生れつきたる理をいふ。此の五性は、いにしへ今、
天下の人高きいやしきも、さかしおるかなるも、おしなべて、天地より生れつきて、萬世迄も相かはる
ことなき故に、五常といふ。常とは、かはらざるなり。中につきて、仁はあはれみの心なり。是を以
て、四徳をかねたり。義は、宜しきなり。行ふ所、各、其の物に相應するを云ふ。禮はうやまふ心、
つゝしみてあなどらざるを云ふ。智はあきらかにさとる心、道理に通ずるなり。仁義禮も、智なけれ
ば行ふすべをしらず。義禮智は、みな、仁より出で、仁をたすくる理なり。信は、まことなり。仁義
禮智の心、信にしていつはりなきを云ふ。まことなれば、仁義智にあらず。凡そ、此の五常の性に
したがひて、人倫に對してなさけふかく、あつく行ふを人の道とす。人倫とは、君臣・父子・夫婦・長幼・

朋友の五なり。是を五倫といふ。又、五品とも云ふ。天下に人多しといへど、その品をわかつては、此の外にいでず。五倫にまじはる道は、君は臣をあはれみ、臣は君に忠をつくすべし。父は子をいつくしみ、子は、親に孝をつくすべし。夫は婦に禮義あり、婦は夫をうやまひて、和順なるべし。長者は幼をめぐみ、幼きは長者をうやまふべし。兄弟も、長幼の内にあり。朋友はたがひにまことありて、たのもしく表裏なかるべし。此の五倫の道は、仁義禮智の五常の性にしたがひて、人倫にまじはる時に、行ひ出せるなり。わが本性の外に求むる道にあらず。

◎人となるものは、天地を以て大父母とする故、父母の恩をうくるがごとく、きはまりなき天地の恩を受けたり。天地のめぐみにて生れたる恩のみならず、身を終るまで、天地のやしなひをうくること、たとへば、人の身の、父母より生れて後も、父母のやしなひによりて、ひととなるが如し。こゝを以て、此の世に生れては、つねに、天地につかへ奉り、いかにもして天地の恩を報いんことを思ふべし。是れ、天地につかふる孝なり。人たる者は、つねに、是を心にかけて、忘る可からず。天地につかへ奉る道は、別にあらず。天地の御心にしたがふを以て道とす。天地の御心にしたがふとは、我に天地より生れつきたる仁愛の徳をうしなはずして、天地の生める所の人倫を、あつくあはれみうやまふを

いふ。是れ即ち、人の行ふべき所にして、人の道とする所、さらに此の外にある可らず。夫れ、人は天地のめぐみによりて生れ、天地の心をうけて心とし、天地の内にすみ、天地のやしなひをうけたり。かくのごとく極りなき大恩をうけたれども凡人はしらず。所謂、百姓は日々に用ひて知らざるなり。然るに、天地につかへ奉らずして、人欲にしたがひ、天理にしたがはざるは、天地の大恩をかうぶり、天地にそむく故、天地の子として、大不孝なり。人の子として、其の親を愛せずして、他人を愛し、父母にそむきて、不孝を行ふがごとし。不孝の子は、其の身を天地の内に立てがたし。いはんや、天地の子として、天地にそむき不孝なるをや。幸にしてわざはひなしといへども、天地にそむけるとがおそるべし。天地をたふとびつかへ奉るべきこと、前にもすでにいへど、返す返すよく人につげんために、同じことを、いくたびも、くりかへしていふなり。猶此の後にもいふべし。

◎およそ、天は人の始なり。父母は人の本なり。人は、天地を以て大父母とし、父母を以て小天地とす。天地・父母・其の恩ひとし。故に、天地につかへて仁を行ふこと、父母につかへて孝を行ふが如くすべし。こゝを以て、禮經にも、仁人の天につかふるは、親につかふるが如くし、疎なるべからず。親につかふること天につかふる如くすべし。畏れ慎しむべしといへり。おろそかなるは、愛なきなり。

おそれざるは敬なきなり。天地につかへ奉るも、父母につかへまつるも、同じく愛敬をいたして、おろそかならず、あなどるべからず。天地によくつかふるは仁人なり。仁心をたもつ人なり。父母によくつかふるは孝子なり。孝養をよくつとむる子なり。天地につかへ父母につかふるの道同じ。しかれば、天地につかへ奉るは、人間の大事にして、しばしも忘るべからず。常人は、ちかき父母につかふる道をだにしらずして、心を用ひず。況んや、天地は、きはまりなき大恩あることをわきまへずして天地につかへ奉るは、身にあづからざることと思へり。夫れ、天地の恩は、父母の恩にひとし。ことに以て、身をなはるまで、常に、つゝしんでつかへ奉り、力をつくすべきこと、是れ人の職分にて、至りておもき大事なり。人たる者、この理をしらずんばあるべからず。

◎天地の中に萬物あり。萬物の内、人ばかりたふとき物なし。かるがゆゑに、萬物の靈といふ。其の靈たる故に、心に五性あり、身に五倫あり、目に五色(青黄赤)をわかち、口に五味(酸甘苦)をおぼえ、耳に五音(宮商角)をわきまへ、鼻に五臭(麝檀香)をしる。鳥けだものには此のあまたのこと、一もなし。人となりて。かゝるたふとき身を得たること、まことに、天地の間の大なる幸を得たるなり。しかるに、人となる道をしらず、禽獸にちかくして、空しく此の世を過し、人とうまれたる身をいたづら

になすこと、くやしからずや。

◎顔子推は、人身得がたし、空しく過ぐるることなかれといへり。萬物にすぐれて、人とかく生れたるは、誠に幸の至りなれば、人身得がたしといへり。人たる者、もし、ふたたび此の世に生れば、たとひ、此のたび忘りて、人の道をしらすとも、かされて又、人とうまれん時をたのむべきこともありなん。此の身再び人となることを得ざれば、道を學び、此の身をよくをさめ、人となりてをはるべし。むなしく此の世を過すべからず。もし、人の道をしらす、空しく此の世を過しなば、人と生れたるかひなかるべし。をしむべきかな。

◎萬物の内、人と生るゝこと甚だかたし。いかんとなれば、鳥獸蟲魚は、年々に多く生るゝこと、其の数がぎりなし。人の数は、鳥獸蟲魚の萬が一もなくして、きはめてすくなし。其の上、人は萬物にすぐれて、天地のめぐめをうくることあつし。かく貴き人身なれば、萬物の内、人と生るゝこと、きはめてかたきことなるを、幸に人と生れたる我が身を持ちながら、學ばずして、天地の道にそむき、人の道を知らずして行はず、人とかく生れぬるたのしみをわすれ、いたづらに、一生をむなしく過して、鳥獸と同じくいき、身死して後は、よき名をのこすことなく、草木と同じくくちなんこと。あ

にうらみ多きことならずや。

◎人と生るゝは、きはめてかたきことなれば、わくらはに、得がたき人の身を得たることをたのしみて、わするべからず。又、人と生れて、人の道をしらで、むなく此の世を過ぎなんこと、うれふべし。此の樂たのしみと憂うれひとの二を、身を終るまでわするべからず。

◎およそ、人となる者は、人の道を知らずんばあるべからず。人の道をしらんとならば、聖人の教をたふとびて、其の道みちを學ぶべし。いかんとなれば、聖人は、人の至極しごくなり。天地の道にしたがひて、人の道みちををしへ給へる萬世ばんせいの師しなり。後代にのこしおき給ふ四書大學・中庸五經詩・書・禮・易の教をしへは、萬世ばんせいの鑑かたみなり。其の道理だうり明らかなること、日月の天にかゝれる如く、天下ひろしといへども、てらざる所なし。よくよまん人は、天下の道理を知らんこと、白日こくびやくに黑白こくびやくをわかつかく如くなるべし。あに是を學ばざるべけんや。しかるに、人となる者、人倫の道は、天性てんせいに生れつきたれども、其の道に志なくして、食しょくにあき、衣いをあたゝかに居所きよしょをやすくしたるまでにて、聖人の教を學ばざれば、人の道なくして、鳥けだものにちかし。かくの如くなれば、人と生れたるかひなし。萬物の靈れいとすべからず。此のゆゑに、聖人はをうれひ、賢臣けんしんを以て、萬民の師として、人倫の道じんりんを教へさせ給ふ。是れ、人とな

る者は、必ず、道を學ばずんば有るべからざればなり。某おもへらく、人と生れて學ばざれば、生れざると同じ。まなんでも、道をしらざれば、學ばざると同じ。道をしりても、行こなはざれば、しらざるに同じ。其の故いかんとなれば、人と生れてまなばざれば、人の道をしらずして、人と生れたるかひなし。是れ、人とうまれて學ばざれば、生れざると同じきなり。學ぶは、道をしらんがためなり。もし、學びやうあしくて道をしらずんば、學ばざると同じきなり。又、道みちをしるは行はんがためなり。まなびて道をしりても、行はざれば、知らざるに同じ。故に人と生れては、必ず學ばずんばあるべからず。學ぶ者は、必ず、道みちを知らずんばあるべからず。道みちをすれば、必ず、行はずんばあるべからず。道みちをすれば、必ずよく行ふ。行はざるは、いまだ道みちをしらざるなり。道みちをしらんと思はば、聖人の教をしへをあふぎ、賢人の脱かいていを階梯かいていとして、其の法しだうに隨したがふべし。是れ、道みちをしるべき學問がくもんのすぢなり。道みちに志なく、師傳しでんあしく、學術がくじゆつのすぢちがへば、一生精力せいのりよくを用ひ、つとめ學んでも、しるしなし。故に道を學ばんと思はば、初學しよがくより道みちにふかく志をたて、明師めいしにしたがひ、良友りやうゆうにまじはり、學術がくじゆつをえらぶをむれとすべし。學術がくじゆつとは、まなびやうのすぢを云ふ。學まなのすぢあしければ、一生つとめても、道みちをしらず。一たび迷ひぬれば、よき道みちに立ちかへりがたし。故に、まづ、學術がくじゆつをえらぶべし。

◎學問の道は、極めて廣大高妙にして、深奥なり。しかれども、其の近き所は、孝弟忠信の日用常行にあり。故に、いかなる愚なる者も、此の道をまなびやすく、しりやすく、行ひやすし。高遠にして、あやしく異なる道にはあらず。

◎古の聖人すら、猶師にしたがひて學が給ふ。況んや、今時の凡人、學ばずしては道をしりがたし。小藝だにも、師なく習ひなくしてはなしがたし。況んや、人の道は即ち天地の道にて、極めて大なるをや。學んでも、まなびやうあしければ、道をしらす。學ばずして道を得んことは、萬々此の理なし。

◎學問は、まづ志を立つるを以て本とす。志とは、心のゆく所なり。道を知り行ひて、君子に至らんと思ふ心づねにおこたりなく、念々やまさるを志を立つると云ふ。志たゞざれば學ぶこと成就せず。故に、古人も、志ある者は、其の事つひに成るといひ、又、志たつは學の半なりといへり。たとへば、弓いる者の、的に志し、道ゆく者の、宿りに志すがごとし。よろづのこと、まづ本をつとむべし。志を立つるは、學問の本なり。志を立つるには、勇猛なるべし。柔弱にしておこたるべからず。おこたれば、しるしなくしてはかゆかず。道を求むるにせちなる志は、たとへば、飢ゑて食を求め、渴きて湯水を求むるが如くなるべし。わづかに悠々としておこたれば、志すたる。只、此の道に心を一す

ぢにすべし。外物に心をうばはるべからず。物を翫べば志をうしなふと、尙書にもいへり。言ふ心は、耳目口體にこのむ所の外欲に耽り、外物をこのみ、或は無益の雜藝を一向にすきこのみて、心をたぶくるの類は、皆是れ、物をもてあそぶなり。かくのごとく外物に心をうつせば、道を學び君子となる志をうしなふ。萬の外物の翫び、このみ、皆、志をそこなふものなり。程子曰く、專一ならざれば、直に迷ぐることをあたはず。言ふこゝろは、一すぢになさざれば、行ひとぐることを成りがたし。專一とは、たとへば、猫の鼠をねらふがごとく、雞の卵をあたいむるがごとく、他念なかるべし。心あなただこなたにわかるれば、學問道義の志はおとろへすたる。文藝武藝は、誠に、士たる者の習ふべきことなれば、つとめ學ぶべし。されども、藝は末なり。道義の學は本なり。藝をひたすらこのめば、必ず、學の志をうばはれて失ふものなり。いはんや、私欲のなぐさみこのみにまかするをや。いまじむべし。志を立つれば、たとへば、西國の人あづまへゆかんと思ひ立ちて、日々にゆくに、其の間、晝夜あづまへ行かんと思ふ心は、念々つねにやまず。是れ、あづまへゆく志たつなり。かくの如くなれば、つひにこゝろさす所に行きとどかずといふことなし。道に志すも、亦、かくの如くなるべし。

◎凡そ、學をするには、教をうくる基を立て、又、禁戒を守るべし。基とは、家をつくる土藪なり。

學問する人は、謙を以て基とす。謙とは、へりくだるなり。我が身にほこらず、人に高ぶらずして、心をむなしくし、人に問ふことをこのみ、我が才をたのみず、師友をうやまひ、我が身に才力有りても、なきが如くし、なしへをよきき、人のいさめを悦び、すでにしれることも、しらざるが如くにして、我が知を先だてず、すてによく行ふことも、いまだ行はざるが如く思ひ、人をせめずして、我が身をせむるを、へりくだると云ふ。是れ、學問をつとめ、教をうくる基なり。たとへば、家を作るに、先づ、基を立つるが如し。此の基あらば、日々に善言をきき、我が過をしりて、知明らかになり、善日々に長ず。學の進むときはまりなし。又禁戒を守るべし。禁戒とは、いましめて行はざるを云ふ。學問する人は、まづ、矜の字を禁戒とす。矜は、ほこるとよむ。ほこるとは、我が身に自慢して、人にへりくだらざるを云ふ。いまだ知らざるを、すてに知れりとし、よめらざるを、よしとす。もはら、我が知を用ひて、人にとはず、人のいさめを用ひず、身をせめずして、人をせむ。かくのごとくなれば、悪日々に長ず。初學の人は、先づ此の禁戒を守り、又、此の基を立つべし。然らざれば、學んで、益なきのみにあらず、かへつて害あり。是れ書をよみ學問する人が、第一心得べき事なり。

◎人の性は、本善なれども、凡人は氣質と人欲に妨げられて、善を失ふ。氣質とは、生れつきを云ふ。

人欲とは、人の身の耳目口體に好むことの、よき程に過ぐるを云ふ。生れつきあしければ、人欲行はれ易し。されば、すべて人たる者は古のひじりのなしへを學んで、人となれる道をしり、氣質のあしきくせを改め、人欲の妨を去りて、本性の善にかへるべし。是れ、學問の道なり。故に、いにしへの聖人、なしへを立て、天下の人に學ばしめ給ふは、人の性、皆善なる故、學んで善にかへる道あればなり。

◎人皆良知あり。なしへざれども、幼よりおやを愛し、少し長じては、兄をうやまふ。人皆仁心あり。孺子の井におち入るを見ては、あはれむ。人皆義理あり。節にあたつては、おろかなる下部も、命をなします。乞食にも食をけちらしてあたふればくはず。是れ、人の性の善なる證なり。聖人の教は、天下の人の生れつかざることを、知らしめ行はしめんとにはあらず。生れつかざることは、教へてもなしがたし。其の人にもとより生れつきたる善心あるを本として、みちびきひらきて、是をおしひるめさせんとなり、天下の人、其の性みな善なり。其の善なるに本づきて、その生れつきたる善を行へと、みちびき給へるなり。故に、其の教行はれやすし。たとへば、山人が、斧の柄をきるに、我が手に持ちたる斧の柄を以て、新しく作らんとする斧の柄になるべき木の枝に、おしならべくらぶれば、

大小長短ちやうたん少しもたがはず、まぢかき手本てほんになること、是に過ぎたる事なし。しかれども、我が手にもてる斧きと、新しく斧きに作らんとする木の枝とは別の物なれば、猶なほ以て遠とほしとす。聖人のをしへは、しいらず。即ち其の人に生れつきたる善心ぜんしんを本として、是をそだて養やしなふ道なれば、教をつくりだし、別の道みちをもち來りて、其の人にをしふるにはあらず。然れば、天下の人おしなべて、此の道を以ていざなひみちびひば、およそ血氣けつぎある人類は、唐もやまとも、西域せいじやうなんばん南蠻なんばんも、此の道を尊信そんしんして、したがはずといふことなかるべし。

◎學問にすぎ多し。訓詁くんこの學あり。記誦きしやうの學あり。訓章しやうの學あり。儒者じゆしやの學あり。訓詁くんこの學とは、聖人の得えの文義ぶんぎを、くはしく知ることなつとむるを云ふ。記誦きしやうの學とは、廣く古今の書をよみ、故事こじ事迹じせきを覺ゆるを云ふ。訓章しやうの學とは、詩文しぶんを作ることを學ぶを云ふ。儒者じゆしやの學は、天地人の道に通じて身みなをさめ人をさむる道を知るを云ふ。學問をせば、儒者じゆしやの學をすべし、訓詁くんこの學は、四書六經しよしゆりくけい等らうの文義ぶんぎに通じても、義理ぎりをしらざれば、用もちひがたし。いはんや、記誦きしやう訓章しやうの學は、いよいよ道みちに遠とほし。儒者じゆしやの學とすべからず。儒者じゆしやの學をに專せん一いつならば、訓詁くんこ記誦きしやうの習しゆも、略りやく其の内うちにかれてよし。此の外ほかに、又、小説せうせつの學あり。是は、經史けいし文章ぶんしやうの學をこのまず、ただもろもろの雜細ざつさいの事、又、あ

やしき事ことなどをしるせる書をめて、多く見おぼえ、樂たのしみとする學なり。又、小説せうせつの學は、訓詁くんこ・訓章しやう・記誦きしやうなどらにならべて、學術がくじゆつの條理じやうりを立つるにはたらず。しかれども、末世まつせには、又、此の學あり。學術がくじゆつの最下品さいかひんなり。

◎或る人の曰く、儒者の學は、只、人道じんたうをしらば可べならん。天地の道みちをしるに及およぶべからずと。予答こたへて曰く、天地の道は、人道じんたうの本もとなり。天地の道みちをしらざれば、道理だうりのよつて出づる所ところの根本こんぽんを知らず。根本こんぽんを知らざれば、天理てんりの人にそなはり、人の天地てんちにうけたる、天人てんじん合一ごいつのすぢめを知らずして、人道じんたう明あらかならず。故に、まづ日用人倫にちやうじんりんの道みちを學んで後、天地の道みちを學ぶべし。聖人の易えきを學まなび給たまふも、此の故ゆゑならずや。されども、天地の道は、猶なほ容易じゆんぎ知しりがたし。

◎志こころを立つることは、大にして高くすべし。小にしてひきければ、小成せうせいに安やすんじて、成就じやうじゆしがたし。天下第一等てんかだいいちとうの人とならんと、平生へいせい志こころすべし。世俗せぞくと同じく、鄙せむしくひきくすべからず。かく志こころをたて、日々ひひ月々に、つとめ行いはば、久しくして其の功こうつもりて、必ず、人にまさるべし。上かみをまなば中ちゆうにいたり、中ちゆうを學まなべば下したにいたる、下したを學まなべば功こうをなさず、又、心こころは小ちひにしてひきくすべし。人にへりくだり。日用常行にちやうじやうぎやうのひき、あしもとより行いふべし。心こころ大おほなれば、おごりてつゝしみなく、綱行きやうぎやう

なつとめず。高ければ、人にたかぶりて、謙徳を失ふ。

◎學問の法は、知行の二を要とす。此の二を一つとむるを、致知力行とす。致知とは、しることをきはむるなり。力行とは、行ふことをつとむるなり。道を知ること明らかならざれば行はれず。たとへば、目なきもの、足すくやかなれど、ゆくべき道をしらで、ゆきがたきごとし。行ふことするどならざれば、知りても川なし。たとへば、目明らかなりといへども、足たざれば、ゆくことかなはざるが如し。知と行とは、目に見て足にてゆくがごとし。目くらければ、行くべき道見え。足立たざれば、行くことかなはず、目足ともにそなはらざれば、道をゆきがたきごとし。知を先とし、行ひを後とす。萬のこと、先づしらざれば用なし。故に輕重をいへば、行ふをおもしとす。知ると行ふとの二は、一をかくべからざるごとく、鳥の兩翼のごとく。車の兩輪のごとく。學問は、知と行と井進むをよしとす。井進むとは、知れることは即ち必ず行ふを云ふ。少しの前後はあれど、さきたちおくれず、一度につれだちてゆくを、ならび進むといふ。知れるばかりにて行はざるは、ならびず、むにあらざる。◎知行の二の工夫を、こまかにわかつてば、五あり。中庸に曰く、博く學び、審に問ひ、慎しんで思ひ、明らかに辨へ、篤く行ふ。是れ、道をしりて行ふの工夫にして、學問の法なり。

◎博く學ぶの道は、見ると聞くとの二を一つとむ。聖賢の書をよみ、人に道をきいて、古今を考へて、道理を求むるなり。人倫の道は、載せて聖賢の書に在り。よくよまん人は、白日に黑白をわかつがごとくなるべし。天下の道理は、きはまりなし。其の道理をしらざれば、行ふべきすべをしらで、あまり多し。道理は、わが一心にそなはり、其の用は、萬物の上にあるなれば、まづ、わが一心の道理なきはめ、次には、萬事につきて、ひろき道理をもとめて、わが心中に自得すべし。是れひろく學ぶなり。博く學ぶの道多けれど、書をよむほど益あるはなし。古人も、人の知恵をますは、書にしくはなしといへり。されど、文字をのみ好みて、義理を求めざるは、博く學ぶにはあらず。

◎審に問ふとは、すでに學べることの、わが心にうたがはしきことを、明師良友にちかづきて、つまびらかに問うて。其の理を明らかにし、うたがひをとくべし。

◎慎しんで思ふとは、すでに學び問ひたることの、うたがはしきことは、心をしづかにし、つしんで思ひて、よくがてんすべし。まなび問ひても、よくがてんせざれば、わが物にならず。故に、わが心に道理をもとめて、其の理を會得すべし。是れ、よく思案して道理に通ずるなり。慎しんで思ふにあらざれば、道理に通じがたし。學問は、自得をたふとぶ。自得とは慎しんでよく思ひて、心中に道理

ながてんして、わが物にし得たるなり。

◎明らかわきまに辨わきまふとは、すでに慎しんんで思案しあんして、猶ぜん、善惡ぜんあくのまぎらはしきことあらば、あきらかに其そのの是非せひなきはめて、善惡ぜんあくをわかつかふ云ふ。以上の四は、皆ち、知ちの工夫くふうにして、道みちをあきらかにするなり。

◎篤あつく行ふとは、すでにまなびとひ、思おもひわきまへて、其そのの道理だうりをしらば、即すなはち、吾われが身に、其そののしれる道理だうりをあつく行ふべし。行ふことあつかからざれば、道みちたちがたし。篤あつく行ふの道みちは、言ことばを忠信ちゆうしんにして、いつはりなく、行なひをつゝしみて、あやまちをすくなくす。人の身のわざおほけれど、言ことばと行なとの二にはいず。故ゆゑに言ことばをまことにし、行なをつゝしめば、身みをさまる。又また、心こゝろのおこる處ところの用もち七しちあり。七情しちじやうと云ふ。喜き・怒ど・哀あひ・樂らく・愛あい・惡あく・慾よく・怨うらみなり。人の身のわざは、此このの七しちよりおこる。是このをつゝしみて、過あやまち不及ふせふなくして、道理だうりにかなふべし。中なかにつきて、七情しちじやうの内うち、いかりと慾よくとの二、尤とも、我われが心こゝろを害がいし、身みをそこなひ、人をそこなふものなる故ゆゑに、いかりをこらしやめ、慾よくをふさぎ去いりて、其そののはじめておこる處ところのきざしにかつべし。又また、善よきにうつりて、我われが善よきより猶なほよき事ことあらば、己おのれが善よきをすて、まされる方かたにしたがふべし。身みに過あやまちあらば、早はやくあらたむべし。我われが身みに執しやく著やくして、改かむるにははかる

べからず。又また、人ひとに對たいして行ふに、人ひとわれにしたがはざる事ことあらば、人ひとをせめずして、我われが身みをかへりみとがむべし。是このれ皆みな、あつく行ふ道みちなり。學まなび問とふにあらざれば、道みち明らかならず。思おもひ辨わきまふるにあらざれば、道みちをわが心に得とれたし。篤あつく行ふにあらざれば、知ちりても、實じつなし。右みぎ、五ごのものは、中庸ちゆうようにしるせる所ところ、學まなびの工夫くふうなり。程てい子しも、此このの五ごのもの、一ひとをかけば學まなびにあらざるといへり。

◎常に、我われが身みをかへりみ、又また人のいさめをきいて、我われが不善ふぜんなると、我われがあやまちをしりて、善よきにうつり、あやまちをあらたむべし。知ちありて忠直ちゆうちやくにして、我われが過たを正ただす良友りやうゆうを求めて、交まじりしたしみて、いさめをきい、なしへなもとむべし。學問がくもんは、我われが身みのあしきをあらためて、よきにうつる道みちなれば、我われを知しりとし、我われをよしと思おもはば、學まなぶとも益えきなくして、かへりて、邪氣じやくきを長ながずべし。人聖せいじん人ひとにあらず、なんぞ事ことごとごとに善よきをつくさんや。自ら是このとし、自ら足たりれりとすべからず。聖人せいじんすら學問がくもんをこのみて、自ら是このとし給たまはず。今いまの凡夫ぼんぷ、いかでかあやまちなかるべき。

◎凡たゞそ、致知ちちの法はは、五常ごじやう五倫ごりんの道みちをしるを以もつて先まとし、家いへをとりのへて、民たみをなさむる理ことわりにいたるべし。次に萬事ばんじ萬物ばんぶつの道理だうりをもしりきはむべし。天地てんちの内うちにあらゆる萬事ばんじ萬物ばんぶつは、皆みな、我われが心こゝろの分ぶん内うちのことなれば、其そのの理ことわりを知らずんばあるべからず。天下てんかの理ことわりなきはめしるの道みちは、本もととちかきとな

先とし、末と遠きとを後にして、前後緩急の次第を失ふべからず。

◎學ぶ人は、只、我が知のくらく、我が徳のすゝまざることをうれふべし。われに學問才智技藝ありとも、我を知ありとし、我が才にほこる心あるべからず。人各、知あり、又、長ずる所あり。人をおろかにしあなどるべからず。いさめをふせぎ、我を是とすべからず、己が不善をすて、人の善にしたがひ、人の善を用ひて、我が身に行ふべし。我を知ありとするものは、惡徳なり。いましむべし。其の愚をしるものは、大愚にあらず。其の過をしるものは、大なる過なし。故に、高慢にして、己をゆるすものは、必ず、愚人なり。いかんとなれば、自知の明なく、知をひらき善にすゝむの基なくして、終に愚にてをばる。人をあなどる者は、必ず、天のとがめあり。人のせめあり。人をそしる者は、必ず、人にそしらる。古の君子は、聰明睿知なれども。守之^{ルニ}以^テ愚^ク。いはんや、末世の凡夫、はづかなる智惡才能にほこるは、甚だおろかななりといふべし。尙書にも、其の善にほこれば、其の善をうしなひ、其の能にほこれば、其の能を失ふといへり。我が身にほこれば、みづから是として、吾に過惡あることをしらざる故に、過を改め善にうつることあたはず、惡日々に長じ、善日々に消えぬ。しかれば、たとひ聖人と同じく居て、朝夕をしへなうくとも、益なかるべし。つとめて書をよみ、學問す

とも、其の身に益なきのみにあらず、却つて邪智をまし、才能にほこりて害あり。こゝを以て、矜は天下の惡徳の中、古人のいましめ明らかなり。學問する者、まづ第一これをいましむべし。文盲なる人のことばに、學問すれば人品あしくなる、益なくして害ありといふは、世上にかやうの人あるを見て、其のくひぜを守り、其の上、其の人もとより學問をきらふ故に、妄にかくいふなるべし。もし己が身をなをさめんために、實にまなばば、なんぞ益なからんや。害なからんことはいふに及ばず。

◎理なきはむるも、事をしるも、一重に物を思ふべからず。うらのはまゆふの百重なることを思ひて、幾重にも理なきはむべし。心あさき人は、一重をしりて、はやことわり至極して、此の上なしと思ふは、はかなきことなり。今日一重をさりて、明日また一重をさり、日々かくの如くすべし。皮をつくして肉を見、肉をつくして骨を見、骨をつくして髓を見るべし。凡そ理なきはむる學問は、心あらくかるき人は、なしうべからず。心くはしく靜にすべし。

◎孔子曰、古之學者爲己、今之學者爲人。爲己とは、我が身を修めん爲にする實學なり。爲人は、人に知られんがためにする名利の學なり。學問の本意は、己が身をなをさめんためなれば、人の知と不知にかゝはらず。たとへば、食する者の、我が飢をやめ身を養はんためにするがごとし。只、

我が腹にみちなんことをのみ思ひて、さらに、我が食したるを、人にしらせんと願ふ心なし。學問は、ただ我が身をなまめんとすべし。聊か、人にしられん爲にすべからず。又、聖人の子夏に女爲君子儒、無爲小人儒との給へり。此の意は、君子儒は、只、己が身をなまめんとすべし。實學なり。小人の儒は、只、人に知られんためにまなべり。是れ、名利をねがふ心のみにて、我が身をなまむるに志なし。爲學なり。こゝを以て、君子の心は、日々に善にすゝみて上達し、小人の心は、日々に惡におちいりて下達す。同じく力を用ひて學問せば、君子の儒となるべし。小人の儒となるべからず。つとめまなんで、小人儒となるは口をし。學者、まづ初より己が爲にする志を立つべし。是れ、學問する人の、第一に心得べきことなり。しからざれば、博く書をよみ學問しても、益なくして、かへつて害あり。

◎書をよまば、我が身に受用することを、專一に志すべし。受用とは、書にしるせる聖人の教を、我が身にうけ用ひて、まもり行ひ、用になつるを云ふ。若し、書をよみ義理をきいても、身にうけ用ひずして行はざれば、何の益もなきいたづらごととなり。大學をよんで如惡惡臭、如好好色とあるを見ては、我が心に、これをうけ用ひて、實に惡をきらふこと、惡臭の如く、善を好むこと、好色のこ

とくすべし。論語をよんで、父母につかへてよく其の力をつくし、君につかへて、能く其の身をゆだねとあるを見ては、其のごとく親につかへて、我が身の方も、財の力もなしまずして、孝をつくすべし。臣としては、我が身を我がものにせずして、わたくしをわすれ、専ら、君に忠をつくすべし。餘も、皆、かくのごとくすべし。是を書をよんで受用すると云ふ。もし、書を多くよんでも、受用せざるは、口耳の學といひて、耳にきいて、頷て口に言ひたるまでにて、心にまもり身に行はざるは、無用の學なり。

◎初學の人、書をよむには、まづ、四書(大學中庸)を熟讀し、又、五經(詩書易春秋禮記)をよくよむべし。五經は、上代の聖人の教なり。文字の祖義理の宗と云ひて、文字のはじめ、義理のなしへの本なり。四書は、孔門のなしへなり。是をよむは、まのあたり聖賢の教をきくが知し。尊ぶべし。文義やうやく通ぜば、四書の註、大學・中庸の或間を見て、後、五經の註を見るべし。次に、周(傳)程(頤)張(載)朱(熹)四家の書を見るべし。中につきて、程朱の書尤もよくよむべし。殊に小學の書は、身をなまむる大法をしるせり。人倫の道ほほ備れり。はやくよんで、其の義を習ひしるべし。又、歴代の史、左傳・史記・朱子通鑑綱目を見るべし。是れ、道をしり、古今に通ずる學問の法なり。經傳及び歴代の史に通ぜ

ば、天下古今の事理、明らかならずといふことなかるべし。聖人の書を經と云ふ。經とは常なり。聖人の言は、萬世の常道なり。賢人の書を傳といふ。聖人の道を述べ、後代に傳ふるなり。四書・五經は經なり。其の註并に周・程・張・朱の書は傳なり。歴代の事をしるせる書を史と云ふ。記録のことなり。子は、荀子・揚子・淮南子・說苑・文中子等の諸子の書を云ふ。是は、程朱の書のごとく、道理精明にはあらざれども、經書の義理を助くる益あり。見るべし。集は、諸家の文章等の書なり。是れ又、義理を發明せり。此の經史子集の四の書は、本末輕重あれども、皆、學問のため用ある書なり。道を知らんとならば、經學を專として、一生つとむべし。次に、史學、是も、其の益大なり。次に、諸子、諸集を見るべし。朱子綱目、尤も好書なり。古代の治亂盛衰の事迹をしるのみにあらず、義理の學にも、亦、大に助あり、殊に、國土をなさむる人の明らかなる鏡なり。又軍の勝敗の道を記して、兵術を學ぶ人にも、甚だ益あり。古來要用の故事も、亦、此の内に多し。彼是尤も多し。つとめて數遍見るべし。誠に、經世の大典とすべし。其の外、和漢の記録、ちからにまかせて見るべし。又、いとまあらば、諸子百家の書を見て、經說を發明し、義理の趣をひろむべし。しかれども、もはら、博覽をつとめて、雜學にうつり、志をうしなふべからず。學問は、博くして、又約にすべし。博ければ、義

理詳にして、備らずといふことなし。約なれば、義理精しくして、明かならずといふことなし。博く學ぶにいとまなく、又、中年以後はじめて學ぶ人は、約にすべし。古人も、博くして雜なるは、約やかにしてくはしきにしかずといへり。凡そ、書をよみ、學問するは、道をしらんがためなり。道を知らざれば、廣く古今の書をよみ、詩文章をよく作りても、要用なし。學問の本意にあらず。又、四書・五經等の文義に通じて、古今の書をひろく見ても、一生義理を知らざる人多し。道に志なければなり。又、志ありても、まなびやうあしければ、一生道をしらす。或は、聰明の足らざる故にもよれり。知をひらくことを勤むべし。

◎心學に志す人は、日新の工夫を用ふべし。日に新にすとは、昨日のふるき惡をあらためて、今日あたらしく善にうつり、けふはきのふにまさりて新しくなるを、日に新にすといふ。此の如くなれば、今日は是にして、きのふは非なることを覺るべし。かやうにつとめてやまざれば、日々に工夫進み月々に異にして、年々に同じからず、一日は一日の功あり、一月には三十日の功あり、一年には三百六十日の功あり、三年には千日の功ありて、徳はすゝみ善にうつりゆかば、其の樂極りなくして、手の舞ひ足の踏むことを知らざるべし。かくのごとく、すゝみゆかば、君子となること、必ず、期すべし。

若し、けふはきのふにかはらず、今月は前月にことならず、ことしはこそぞに同じくば、日に新にする
ちからなくして、いつまでも、愚者にて世を終らんこと口なし。

◎文學をつとむるも、亦同じ。日々につとめてやまざれば、文學日々にする。數年の後は、經傳の
義理に通じて、樂となる。十年の功は、甚だ大なり。文學半ば成就す。

◎萬の事、はじめに苦勞せずしておきたれば、後に功ならずして、樂なし。たとへば、あつき灸をこ
らへ、苦き藥をのめば、後に無病の人となるが如し。學問において、尤も、此のしるしあり。わかき
時辛勞する人は、老いて後樂多し。

◎書をよむには、まづ、四書・五經などを熟讀し、文字を多くおぼえて、訓詁に通ずべし。訓詁とは、
字義をいふ。文字訓詁をしらざれば、書を見わけがたく、ちからなくして、書をよむにはかゆかず。
文學のすゝまざるは、字をしらざればなり。されども、文字訓詁にかゝりはり止まりて、義理を自得せ
ざるは、君子の學にあらず。

◎學問は、智慧をひらく道なれば、廣く聞き、多く見て、義理に通じ、我が心に、智慧のおのづから
ひらくるを待つべし。聰明をたのみ、我が才智を先だて用ふべからず。人の才智をおさへずして、人

の普言を取りもちふべし。位たかく年だけたる人、或は、才學の名ある人も、其の位と年と才とにほ
ころべからず。只、人にへりくだりて、尋ね問ふは、知者の、ますます智をます道なり。

◎凡そ、幼よりつとめまなぶに、ひまをなむべし。いにしへの禹王は、聖人なりしに、猶、寸
陰をなしみ給ふ。いはんや、今の凡人をや。いたづらに悠悠として、むなしく時日をつひやすべから
ず。光陰、箭のごとく、時節は流るゝがごとくなれば、年わかきをたのんで、時をうしなふべからず。
人の世にあるは、老幼の時と、やまひする時は、學びがたし。又、四民(士農)ともに、其の家のこと
わざしげくして、もの學ぶ隙はすくなし。其のすくなき隙をなします。怠りて、むなしく過ぎ、或は、
無益の事をなして、時を費し、一生をはかなくをばらんこと、いとおろかなりといふべし。今年の今
日、ふたたび得がたきことを思ひて、かりにも、いたづらに時をわたるべからず。是れ、一生の閒心
を用ふべきことなり。古人も、常にしておかず、つねに行ひてやまざる者には、及びがたしといへり。
又、いたづらに、なすことなく、常に隙多き人は、人にすぐるゝことはなきものなりといへり。たと
へば農人商人の、つとめていとまなるしみ、朝夕、田を作り、あきなふ者は、必ず、人にすぐれて、
其の家とみて、衣食ともしからず。古人も、人生はつとめにあり。つとむれば則ちまどしからずとい

へり。國家の政をくはしくつとむれば、其の國家必ず治まる。學問をくはしくつとむれば、必ず、諸人にすぐれて、其の才すいむ。萬の事、皆しかり。隙をなしてみて、久しくつとむれば、成就せざることなし。それ、人の寶は、いとまに過ぎたるはなし。いかんとなれば、君子の、學問をつとめ、國家の政を行ひ、父母主君に仕へ、諸藝をまなび、農の田を作り、商人のひさぎ、百工の器物を作り、婦女の布帛をおりぬふも、皆、いとまを用ひて、なし出すわざなれば、人の尤もおもんじなしむべきこと、いとまに過ぎたるはなし。故に、其のなしむべきこと、金玉にも過ぎたり。古語にも、聖人は尺璧を貴ばずして、寸陰を貴ぶといへり。隙をなしまざる人は、まなぶこともつとむることなれば、必ず、才智も徳行も藝能もなきものなり。いとまをなしまざれば、君子は、身をなさめ、家としてのふる事あたはず。農工商は、其の家事を失ひて、貧窮飢寒をまわかれず。學者は、必ず、粗學にして不才なり。くすしは、必ず、賤工なり。よろづの道々のたくみも、いとまをなしまざれば、必ず、つたなし。是れ、いとまは人生の寶にして、なしむべき故なり。就中、年少の時は、事すくなく、いとま多し。精力つよく、記憶つよく、一たび見聞きて覚えしこと、身を終るまでわすれず。此の時つとめまなば、其の功多し。故に、書をよむことは、少年の氣力つよくいとまある時、よくつとむれば、大にすいみて益あり。三十歳以後は、よろづつとめ多くなりて、いとますくなく、精力やうやうよわくなるにしたがひて、其の寶えおとろへねれば、力を多く用ひてもわすれやすく、勞すれども、功すくなし。年少なる人は、これをよく心得て、わかき時、隙をなしみ、學問をつとむべし。誠に一生の寶となるべし。淵明が詩に曰く、盛年不重來、一日難再晨、及時當勉勵、歲月不待人。又、古詩に、少壯不努力、老大徒傷悲といへり。わかき時、是をよく考へ、後悔なからんことを思ひて、時日なをなしてみつとむべし。又、よくつとむれども、學問の術をえらばざれば、一生益なきことまよひ、心を用ひくるしみて、よき道をしらず。是れ亦、おろかなりといふべし。

◎凡そ、君子の學問は、知仁勇の三徳を本とし、五倫(君臣父子夫婦長幼朋友)をあつくするを道とす。知仁勇は、五倫の道を行ふ心の徳なり。知は、五倫の道をしり、仁は、五倫の道にたもちおこなひ、勇はつとめてしり、つとめて行ふ。しるも行ふも、勇を以てつとむ。君子の學問をするに、其の心法とするは、三徳なり。行ふべき道とするは、五倫なり。三徳と五常(仁義禮智信)とは、理同じ。五常は、うまれつきたる性なり。三徳は、學問をする心法なり。五常をつづめていへり。

◎孔子曰、學而不止、闈棺而止。人と生れては、人の道をしり、此の身をよくなさめて、君子となる

ことをつとめどすべし。是れ、人と生れたるかひあらんとなり。しかれば、人となるべき道を學ぶこと、おこたるべからず。一息、猶のこれる内は、學ぶことやむべからず。死して後やむべし。

大和俗訓卷之二

爲學下

小學の教は、小子せうしのまなぶ所、少なる學問かくもんなり。いにしへ、八歳になれば、たかきいやしき、凡そ、天下の、人の子となり弟となれる者、師しのをしへなうけてまなべり。これ、小學なり。其のをしへば、父母に孝し、兄長をうやまい、君上くんじやうにつかへ、賓客ひんかくに對する道、或は、座敷ざしきをはたき、飲食をそなへ、尊者せんじやの前にすゝみしりぞき、いらへたへをする禮をなしへ、又、日用の禮・樂・射・御・書・數の六藝のわざをなしへ、是を以て、いとけなき時より、其の心をやしなひ、年長じて、大學の道をまなぶもとぬとせり。凡そ、小學は、わざをなしふるなり。

◎大學とは、十五歳以上成人せいじんのまなぶ所、身を治め人をささむる大なる道理の學問なり。天下ひろし

といへども、己おのれと人より外なる物なし。己をなさめ人をささむる道をまなぶは、大なる學問なれば、大學といふ。明德めいとくを明らかにするは、おのれを治むるなり。民をあらたにするは、人をささむるなり。

至善しぜんにとどまるは、明德をあきらかにし、民をあらたにするに、皆、至極しごくの善にいたりてとどまるべしとなり。故に明德新民の外に、至善にとどまる道にはあらず。右の三綱領さんかうりやうは、大學の大要なり。

此の三にいたる工夫の條目八あり。八條目は、三綱領の内にこまかなる工夫なり。格物致知かくぶつちちは、事物の理なきはめしりて、知を開く道なり。誠意せいぎより以下は、皆、力行の道なり。就中、誠意・正心・修身は、ともに身をなさむる道なり。齊家・治國・平天下は、人をささむるの道なり。凡そ、大學は、理を教ふるなり。

◎大學に、格物致知かくぶつちちを以て、道理を明らかに知るを、身をなさめ、人をささむるつとめのはじめとす。格物とは、萬事萬物ばんじばんぶつの道理にきはめいたるを云ひ、致知とは、わが心の知なきはめて、明らかにするなり。格物の次第は、まづ、五常・五倫の道、身を治め家をととのふるまぢかきことよりして、次第を以て、やうやく國天下をなさむる理にきはめ至る。是れ、格物なり。かくのごとき、萬事萬物につき

て、理なきはむれば、わが心の知おのづから明らかになる。是れ、致知なり。故に、格物の外に、致

知の工夫なし。是れ大學のつとめのはじめなり。其の次は、誠意せいぎにあり。意とは、心のはじめておこる所の苗なへなり。心の體はしづかにして、善惡ぜんあくいまだあらはれず。其の初めてうごく時、善も惡もあらはる。意のおこる時に、このむと惡むとの二あり。惡むとは、きらふなり。此の時、善をこのみ惡をきらふこと、眞實しんじつにしていつはりなきを、誠意せいぎといふ。たとへば、善を好むことは、好色かうしよくを好むが如くにし、惡をにくむことは、惡臭あくしうをきらふがごとくに、眞實しんじつなるべし。是れ、つとめ行ふ初はじめなり。善をこのみ、惡をきらふこと、眞實しんじつならざれば、本たらずして、萬の道行はれず。故に、此の後、正せい心しん修しゆ身しん齊せい家か治ち國こく平へい天てん下かの工夫も、皆、是を以て初とす。されば、大學の八條目は、格物と誠意を以て要とす。格物かくぶつは、知のはじめなり。誠意せいぎは、行のはじめなり。格物なくして萬の理ことわりをきはめざれば、智明ちめいらかならずして、善惡をわかちがたければ。まよひてさとりず、夢ゆめのいまださめざるがごとし、誠意なくして、善をこのみ惡をきらふ意、誠まことならざれば、道を行ふべき基もとなくして、いまだ善人ぜんじんとはいひがたし。故に、此の二を以て、致知力行のはじめとすること、うべならずや。

◎凡そ、人には、必ず、生れつきたる良智りやうちありて、いかなる愚者ぐしやも、善惡をすこしはわかまへ知れり。其の上、學問がくもんして理ことわりをきはめ、其の智ちやうやくひらけねれば、善を善とし、惡を惡とする心、いよいよ、明らかなりぬ。されども、善をこのみ惡をきらふに、誠まことなければ、善行ぜんぎやうはれず、惡去らずして、生れつきたる良智りやうちのたからも、學問してしれる所も、皆、無用むようとなりぬ。此の故に、學者道みちを行はんと思はば、まづ、善を好み惡をきらふに、誠まことあるべし。故に、誠意の工夫くふう、尤も切なり。

◎學問の要、二あり。いまだ知らざる時は、知らんことを求め、既にしれらば、行ふべし。知らざれば、行ひがたし。行はざればしらざるに同じく、無用の事むようなりぬ。こゝを以て、學問の道は、只、知と行との二にあり。又、萬卷まんぐわんの書をよんでも、道をしらず行はざれば、よまざるに同じ。是れ、道に志こころざしなければなり、こゝを以て、大學の道、まづ、格物致知かくぶつちちして、事物の理ことわりをきはめ、わが知をひらき、さて、知れる所の善をこのみ惡をきらふ心實しんじつにして、知れる所を行ふ。是れ、誠意せいぎなり。知ることいたらざれば、萬事の善惡ぜんあくわかまへがたし。怠誠たいせいならざれば、善をなし惡をさること、實ならずして、道行はれず。此の二は、大學の道の要にして、知行の工夫なり。

◎博學はくがくにして、經書に通じ、義理をとく人も、其の心術しんじゆつ行迹ぎやうせきあしくして、俗人におとれるもあり。是れ、道に志なくして、道を我が心に得ざればなり。口によみならひ、目に見おぼえても、其の理ことわりを心に得ざれば益なし。たとへば、美食びしよく芳樽ほうそん前に多くつらなれども、これをのみくらはざれば、食

よ、明らかなりぬ。されども、善をこのみ惡をきらふに、誠まことなければ、善行ぜんぎやうはれず、惡去らずして、生れつきたる良智りやうちのたからも、學問してしれる所も、皆、無用むようとなりぬ。此の故に、學者道みちを行はんと思はば、まづ、善を好み惡をきらふに、誠まことあるべし。故に、誠意の工夫くふう、尤も切なり。

◎學問の要、二あり。いまだ知らざる時は、知らんことを求め、既にしれらば、行ふべし。知らざれば、行ひがたし。行はざればしらざるに同じく、無用の事むようなりぬ。こゝを以て、學問の道は、只、知と行との二にあり。又、萬卷まんぐわんの書をよんでも、道をしらず行はざれば、よまざるに同じ。是れ、道に志こころざしなければなり、こゝを以て、大學の道、まづ、格物致知かくぶつちちして、事物の理ことわりをきはめ、わが知をひらき、さて、知れる所の善をこのみ惡をきらふ心實しんじつにして、知れる所を行ふ。是れ、誠意せいぎなり。知ることいたらざれば、萬事の善惡ぜんあくわかまへがたし。怠誠たいせいならざれば、善をなし惡をさること、實ならずして、道行はれず。此の二は、大學の道の要にして、知行の工夫なり。

◎博學はくがくにして、經書に通じ、義理をとく人も、其の心術しんじゆつ行迹ぎやうせきあしくして、俗人におとれるもあり。是れ、道に志なくして、道を我が心に得ざればなり。口によみならひ、目に見おぼえても、其の理ことわりを心に得ざれば益なし。たとへば、美食びしよく芳樽ほうそん前に多くつらなれども、これをのみくらはざれば、食

にあくこともなく、酒さけにふるふこともなきが如し。書をよんで、行あしき人あるをうたがふ人あり。これを以て、うたがひをばらすべし。書をよみて、道に志ちなくば、文字もんじをしれるのみにて、心において益えきなし。是れ、無用の學なり。こゝを以て、學がくをするには、まづ、志を本とすべし。

◎朝あしたは師にまなび、晝ひるは、朝まなびたることをつとめならひ、夕ゆふは、これにいよいよかされ、夜は、一日の間のあやまりをかながへて、あやまちなければ、夜をやすくいぬべし。もし、過あやまちあらば、悔くいはぢて、來日らいじつのいましめとすべし。是れ、國語こくごにいへる所、學問の法とすべし。

◎いまだ書をよまざる人のためにいはば、此の道を行はんと、志を立つることは、まことに第一なるべし。されど、經書けいしょをはじめとして、ひろく古の書をよまざれば、聖人せいじんの教をしらで、道にくらく、言ふこと行ふこと、ひが事のみぞあるべき。又、古來歴代れきだいの事をしらでは、今日のかがみとすべきやうなし。こゝを以て、つとめて、朝夕書あさゆふをよみ、いにしへをかながふべし。いかに生れつきたる才ありとも、積古けいこなくては、おのれと道をしり、古今天下ここんの變へんをしるべからず。もし又、すでに書をよめる人のためにいはば、學問がくもんは、ただ、わが身のあやまりをあらため、善にうつりて、身をささむる工夫くふうを專一せんいつにすべし。書をひろくよみ、古今天下ここんのことに通つうずとも、もし我が身のあやまちならため

ず、善を行はずば、いたづらごととなり。しかれば、學問は、まづ、志こゝろざしを立て、身に行ふを第一だいいちとすべし。書をよむは、これ、第二義なり。

◎學問の道は、師しをたつとぶにあり。師尊たつとくして、道尊みちぶべし。道尊みちくして、民道たみをうやまふ。故に、君として位高くらかほしといへども、師しをば臣しんとしていやしめず。いにしへ、大學にしては、天子になしふるにも、北面ほくめんせず。師をたつとべばなり。

◎此の道理の天下にある處は、まづ、吾が心を本もととす。人にまじはれば、君臣・父子・兄弟・夫婦・朋友の間まひだ、行ふべき道あり。又、我が身の、萬のわざに、皆、一定の道理ありて、暫時ざんじも、此の道をはなれがたし。凡夫ぼんぷといへど、此の行ふべき道理のそなはること、聖賢せいけんとかはらず。又、いかなる愚人ぐじんも、善をこのみ、悪をにくむ心あり、生れつきたる良智りやうちありて、此の道のかたはしを、少しはしりて、日々川もちひ行ふ。しからざれば、一日も、世にたつことかたし。君父にそむき、亂逆らんぎやくをなし、人とあらそひ、人をおかしかすめ、非法ひはふをおこなひては、しばらくも世に立つべからず。されども、凡夫ぼんぷは、此の道みちを能くしり、能く行ふことかたし。故に、いにしへの聖人せいじん、世に出て給ひて、教をしへをたて、道理を明にして、これを書にあらはし給ふ。天下の事、大小精粗せいそ萬事の道理、一として聖賢の書に明ら

かに備らざることなし。たとへば、日月の天に沖して、萬物のかたち分明なるは、凡そ、目あるもの、是を見ざることなきが如し。其の書をよむものは、必ず、其の道をあきらめ、其の理を我が心にたもち、身に行ひて、人倫にまじはり、萬事をつとめ、人民をなさむ。かくの如くにして、人の職分をつくして、天地の間にたつべし。若し、此の如くならざれば、人たるの道をうしなひ、人の職分かけ、天地の理にそむけり。凡そ、物皆職分あり。天地は、物を生じやしなふを心とし給ひ、天はおほひ、地はのする、これ、天地の職分なり。萬物の微細なるも、皆各、職分なり。雞の晨をつくり、犬の夜を守るの類、みな、其の物に生れ得たるわざをつとむるを以て、其の物の職分を行ふとす。人は、萬物の靈なり。其の心本明らかに、萬理備れり。若し、人として、身に備りたる理を行はずば、人の職分をむなしうするといふべし。人を以て、鳥獸にだもしかざるべけんや。

◎書をよむ人は、まづ、其の學問のすぢを正しくし、又、心術を正しくすべし。學問も心法も、一すぢに、天地聖人の道にしたがひて、一點も邪をまじへずして、純一なるべし。聖人の道はこのむとも、其の間に、又、少しにても、聖人の道に似ざる所あらば、純一なりといひがたし。學純一なれば、其の心法も、邪なくして正し。心法正しければ、行事にあらはし發するも、皆正し。たとへ

ば、道をゆく人の、まづ、道のすぢを尋ねしるが如し。道のすぢを知らずして、ただに行くことをのみつとめば、たとへば、都にある人、奥州にゆかんとて、まづ、淀山崎へむかひ行くが如し。いよいよつとめ行くほど、いよいよ奥州には遠さかるべし。是れ只、道にいそぐことを知りて、道をあやまらざること知らざるなり。

◎孔子曰、少成如天性、習慣如自然とは、幼少より習ひて成就したることは、天性にうまれつきたるがごとくなり、又た、ひさしくならひてなれぬることは、よきもあしきも、つとめずして、自然によくするが如しとなり。善惡ともに、性に出でたるよりも、習より出づること多し。然れば、習ひなること、善惡をえらびつゝしむべし。ならひてなれぬることは、生れつきたる自然の如し。學問をするも、善にならひなるゝわざなり。人の惡をするも、必ず、生れつきてするのみにあらず、惡人にならひてすること多し。故に、孔子も、性は相近し、習へば相遠しとのたまへり。

◎およそ、人の不孝不忠、もろもろの惡を行ひ、怨をほしいまにし、身をほろぼし、家をほろぼすにいたるは、何にかよれるや。知なければなり。又、善を行ひて、家をおこし、身をたもち、ほまれを知るは、何の故ぞや。知あればなり。知あれば、よく善惡をしる。善のなすべきことを知りて行ひ、

惡のなすまじきことを知りて行はず。此の故に、知は身の内の大なる寶なり。學者道に志さば、知を求むるを第一とすべし。知をひらくことは、學問の功にあらずば、成りがたし。

◎程子の曰く、人の不善をするは、只、知らずとす。言ふこゝろは、世人の惡をするは、惡のすまじき理をしらざればなり。よく知れらば、などか、人のためわがため、あしきひがことをば行ふべき。たとへば、赤子の、はらばひて井に入らんとするは、赤子のとがにあらず、いまだ知あらずして、井に入れば死ぬることをしらざればなり。世の人の惡をすること、亦、かくのごとし。あはれむべし。故に、學問して知をひらき、道をしることをつとむるは、人間の一大事なり。

◎學問は、其のはじめをつしんで、其の術をえらぶべし。もし、其のはじめ、學術正しからず、一たびあやまりて、あしき方にふみまよへば、其あやまりにならひて、改めてよき道に立ちかへりがたし、身を終るまで、ひがことにまよへることをしらず、かへりて、正しき道をきらひそしる。天地の道にそむき、人の道を失ひ、一生の間、まよひてさとらず、かなしむべし。學問せんと思はば、必ずまづ明師良友にしたがひて、學術をえらぶべし。是れ、はじめをつしむなり。易緯に、君子慎始、もしたがふこと、毫釐なれば、あやまるに千里を以てすといへり。はじめのたがひは少なれど、後のあ

やまりは、千里の遠きにいたる。其のはじめ、學術をえらぶこと、あにつししまざらんや。

◎千里の道も、一步よりはじまる。たとへば、遠き所に行くに、出でたつ足もとよりはじまりて、つとめゆきてやまざれば、とどろきざることなし。學んで道にいたるも、亦、かくのごとくなるべし。志を立て、道をまなび、つとめ行ひてやまず、久しく年をつまば、などか、其の功を成して、遠大にいたらざらん。たとへば、商人の一錢をなしみ、つみかさされて、久しく年ふれば、大なる富人となるがごとし。

◎聞見の智あり、眞智あり。聞見の智は、書をよみ人に聞きてしるを云ふ。是れ、知ることあさし。眞智とは、聞見の智によりて、わが心に、道理を眞に知るをいふ。是れ、しることふかし。學問はまづ、聞見の智より入るべし。書をよみ道をきかざれば、眞にしるべきやうなし。聞き見たるまでにとどまりて、眞にしらざるは、道をしるにあらず。眞にしれば、よく行ふ。しりても行はざるは、いまだ眞にしらざるなり。故に、學者は、聞見の知を初として、後には、眞智を求むべし、聞見の學にとどまるべからず。

◎書をよみ學問すれば、聞見の智は、日々にすいむ。されども、知れることをおこなはざれば、德行

は、日々におくれてすゝまず。行はざれば、其のしれる所、眞智しんちにあらず。故に、今の學者は、其のまなぶ所まなぶと行ふ所まなぶと、大にそむけり。是れ、己おのがためにまなばざればなり。學者、まづ、誠まことの志を本とし、聞見ぶんけんの智ちより入りて、知れることを行ひ、眞智しんちにいたるべし。

◎學問の道は、心をむなしくし、へりくだり、よく知れることなも知らざるが如くにし、能く行ふことを行はざるが如くにし、我が才さいと行おこなひとはほこらず、わが智を先さきだてずして、人に問ひ、人のいさめを聞き用ひ、我が過あやまちを改めて、善よきにうつるべし。かくのごとくすれば、學問の益えきあり、善よきにすむときはまりなし。もし、自らはこり、我を是ぜとし、人を非ひとし、人の諫いさめをふせぎ、我が過あやまちをきくことをきらへば、才學さいがくの長ずるにしたがひて、その心あしくなりて、學問の益えきなきのみにあらず、かへりて、害がいとなるべし。是れ、己おのが爲ためにせずして、人のためにする故、君子くんし儒じゆとならずして、小人せうじんの儒じゆとなるなり。かくのごとくならんば、學まなばざるにおとれり。

◎學問に、有用いうようの學あり、無用むようの學あり。我が儒じゆの學は、有用いうようの學なり。有用いうようの學とは、學問をすれば、わがため人のため、益えきとなるを云ふ。此の故に、學問の道は、有用いうようの學をすべし、無用むようの學をすべからず。有用いうようの學は、身をなさめて、人倫じんりんの道をあつく行ひ、ことに忠孝ちゆうかうをつとめ、善よきをなしく

人を助けたすくふにあり。貧賤ひんせんなる者も、善を行ふ志だにあれば、人を救すくふこと多し。いはんや、富貴ふうきの人は、その力によりて、其のほどこしひるし。故に、富貴の人の學は、我が身を修をさむるのみならず、仁愛じんあいの心を本とし、人を助けたすくふことを、専もはらつとめ行ふべし。是れ皆、有用いうようの學なり。もし、口に高きことをとき、心にいさぎよきことをこのみ、身に艱苦かんくなることを行ふとも、仁義の心を求めず、人倫の道を行はず、善をなして、人に益あることなくば、無用の學なるべし。又、詩文しぶんを作り、心をくるしめ、多く隙ひまをつひやし、たくみにかざりて、人にほめられんことを求めて、日用人倫にちようじんりんの道に志なきは、益えきもなきいたづらことなり。皆是れ、無用むようの學なり。

◎揚子曰、學者所以求もとむ爲ため君子くんし也。言ふこゝろは、學問をするは、何の爲ためぞや。君子くんしとならんが爲ためなり。君子とは、有あ徳人を云ふ。君子の字義は、易えきの正義に、人の君となりて、萬民ばんみんを子のごとくする徳ある人をいへり。いやしくして下にありても、其の徳あれば、君子と稱しょうす。君子となるとは、人となるなり。學まなばざる人は云ふにたらず。學んでも君子とならずんば、學まなばざるに同じくして、人と生れたるかひなし。君子くんしとなること、容易たやすからず。しかれども、志を立ておこたらずんば、必ず、其の功こうあるべし。古語こごにも、志あるものは、其の事つひに成るといへり。學まなば、終身しゆうしんのことなり。一息ひといき

もいまだのこれる内は、此の志おこたるべからず。是れ、人の一生の間のつとめなり。

◎およそ、人聖人せいじんにあらざれば、必ず、あしき生れつきのくせあり。是れ、氣質きしつの偏へんなり。故に、身をなまむる道は他なし。ただ、我が氣質きしつのあしき所をみづから察さつし、人にいはせて聞き、其の偏へんなるあしき所にかちて、改あらため去るべし。かくのごとくせずして、生れつきて偏へんなる所にまかせぬれば、心正ただしからずして、身をなまらさず。書をよみ學問がくもんし、道を好み行ふと思ふも、皆、我が氣質きしつの偏へんなることを行ふ。故に、いたづらごとくなる。氣質きしつの偏へんの、害がいとなること、たとへば、田を作るに莠はぐさあるがごとし。苗を植うゑて、水をそそぎ肥こしても、莠はぐさを去らざれば、苗長なげず。水と肥ことの養やしひも、皆、莠はぐさのためになりて、いたづらごとくなり。故に、わが氣質きしつのあしき所を知りて改あらたむること、これ、學問がくもんする人の、専もらつとむべきことなり。學者がくしや、必ず、こゝに常に心を用ふべし。およそ、人のあやまりあしきことは、皆、その生れつきの偏へんなるくせよりおこる。こゝを以て、學者がくしやは、必ず、氣質きしつを變化へんくわして、過あやまちを改あらたむべし。是れ、學問がくもんの要もとなり。我が氣質きしつの偏へん悪あくと、我が過あやまちをみづから知る人まれなり。かへりみて察さつし知るべし。正直しやうぢきにして、過あやまちをつぐる益友えきゆうを求め、忠臣ちゆうぢんを近づけて、諫いさめを聞き用ふべし。恭ごうなうつ人は、手見えず。傍たがひより見る人は、眼めよく見ゆるがごとし。

◎君子は、氣質きしつの偏へん悪あくなし。無病むびやうの人なり。衆人しゆうじんは、皆、氣質きしつの偏へんなる病びやうある故、過あやまちのみ多し。皆病人びやうじんなり。其の病びやうを去りて、君子くんしにいたるべし。病びやうを其のまゝおきて、其の悪あくを長ながすべからず。病びやうを去らんと思おもはば、明師めいし良友りやうゆうにあひて、その教をしをうけ、其の氣質きしつの悪あくしきを改あらたむべし。たとへば病人びやうじんの良醫りやういにあひて其の病びやうをいやすが如し。病人びやうじんは、醫いを招まねきて、藥やくを服くせざれば、無病むびやうの人となりがたし。衆人しゆうじんに氣質きしつの病びやうあるも亦またしかり。良友りやうゆうにあひ、又みづからせめて、其の氣質きしつの病びやうを改あらため去らざれば、君子くんしとはなりがたかるべし。朋友ほうゆうの、我が過あやまちを正ただすをきらひ、臣下しんかのいさめをふせぐは、病人びやうじんの、醫いをきらひて、藥やくを川がはひず、病死びやうしすれどもさとらざるがごとし。かなしむべし。

◎古語ここ曰いく、人生にんじやう至樂しやく、無如むに讀よ書しよ、至要しやく無如むに教くわう子し。又、古人こじんの詩しに曰いく、至哉しやく天下てんか樂らく、終日しゆうじつ在ある兒案に。書しよをよむの樂らく、いたれるかな。富貴ふうきならずして、其の樂らく大なり。酒色しゆしやくならずして、其の樂らくふかし。山林さんりんならずして、其の樂らくしづかなり。古語ここに、書をよむこと一卷いつくわんなれば、一卷いつくわんの益えきあり。書をよむこと一日いちじつなれば、一日いちじつの益えきありといへり。又、人の神智しんちをますこと、書をよむにしくはなしといへり。富貴ふうきにして書を好このむ人は、其の樂らくひるし。貧賤ひんせんにして書をこのむ人は、其の樂らくふかし。次に、子をなして、我が志こころざしをつがしむべし。是れ、肝要かんえうのことなり。子を教をしへずして、道をしらしめざるは、

父のあやまりなり。不仁と云ふべし。

◎うたがひを人に問ふは、智を求むる道なり。みづから心に道理を思ふは、智をひらく本なり。問ふは、智を人に求むるなり。思ふは、智をわれに求むるなり。人に問はざれば、知ることせばくして、心に迷ひとげず。みづから思はざれば、見きくことひろしといへども、道理をわが心にふかく自得せず。此の故に、問ふと思ふとの二は、理をきはめ智を明らかにする道にして、學の要なり。

◎道に志なき人は、いふにたらず。たとひ、道に志ありて、ひろく學ぶとも、學びやうあしければ、一生道を知らず。或は、道學をこのめども、文句にかゝはりて、義理に通ぜず。是を訓詁の學と云ふ。其の人は、みづから道學をすと思ひ、自らはとし人にはこれども、訓詁の學なることを知らず。又、道學の名をむさぼりこのみて、其の實なき人あり。只、道學の實をこのむべし。道學の名を好むは、不實にして、益なし。又、古訓を學ばず、聖人の法にしたがはずして、ひとへに、我が心に求むる學あり。是れ、無學にまされりといへども、聖學にあらず。師傳ありといふとも、私の學なり。眞の學問をせんと思はば、道に志し、徳をたつとびて、孔孟の教を本とし、程朱の說を階梯とすべし。是れ、すぢめよき眞の學なり。末世にいたりてあしき學術多し。えらぶべし、迷ふべからず。

◎學者、文學言句に求むるつとめは、常に多く、日用德行に心を用ふるつとめは、常にすくなし。是れ、學問の本意を失へり。もし、德行なつとめずして、文學を好むは、たとへば、酒をすて、糟をくらふが如し。よき所をば取りて用ひずして、よからざる所をこのむなり。

◎道をしること、至りてかたし。よのつれの俗學の習にては、身を終るまで、つとめ學びても、道を知りがたし。まづ、學を好むに、誠の志ありて、明師良友にしたがひ、いにしへの學のすぢをたづねるとめ、心を用ふること久しくば、其の功あるべし。利口にして、我が才にほこり、このんで我が智をたのみ用ふる人は、道に遠き生れつきなり。身をなはるまで、此の道を知ることかたかるべし。只、生れつき實實にして、かざりなく、其の心しづかに、義理にさとく、へりくだりて、自らはとせざる人あらば、これ、道にちかき生質なり。かゝる人、志專一にして、よく學ばば、此の道を、やうやく晩年にしてしるべし。

◎世の人、多くは、藝をこのみて、學問をこのまず。藝は、たとへば、木の枝葉なり。學問はたとへば、木の根本なり。根本なつとめずして、枝葉なつとめ、本をすて、末に專なるは、ひがごとなり。道學なければ、藝多くしても、根本たらず、君子とすべからず。又、藝なければ、事に通ぜずして、

其の徳の助なし。野人といふべし。

◎わかき時は、經學を本として、ひろく群書に通じ、且つ又、有用の諸藝を習ふべし。中年以後は、博覽をやめて、經傳の要文を、つづまやかにあぢはひ、道理をくはしくし、心に自得せんことを求むべし。

◎いまだ道をしらざれば、ゆめ見てさめざるが如し。故に、大學の致知を、夢覺の關と云ふ。ゆめみると、さむるとのさかひなり。善をこのむこと誠ならざれば、悪人の境界をまぬかれず。故に、大學の誠意を、善惡の關と云ふ。善人と悪人とのさかひなり。關とは、内外のさかひなり。

◎聖人は、人倫の至りなり。吾がともがらの口にかげまくは、いとまかしこと。されど、弓いる者は、はじめよりの的に志し、道ゆく者は、初より家に志すがごとし。聖人をめあてとして、其の志を立つることは、高くすべし。然るに、千里の道も、出でたつ足もとの一步よりはじむる理なれば、道を行ふことは、まづ、日用のちかくひき、所より行ひて、やうやくへのぼりて、高きにいなるべし。はじめよりしななをこえて、高きいたらんとするは、つばさなくして、天に上らんとするに同じ。必ず、此の理なきことを知るべし。たとへば、高山にのぼるにも、先づ、ふちとの一足よりはじむるがごとし。

一とびに山上には上りがたし。萬事は、次第にしたがはざれば、成就しがたし。ちか道なることは、口にいふところは、快しといへども、道理のなきことは、ならざるものなれば、虚妄の說、無用の辨はいたづらことなり。

◎ふたゝび生れ来るべきたのみなき此の世の間なるに、天地人のいたれる道をまなんで樂まんこそ、いけるかひありて、身終る時も、うらみなかるべけれ。我が身の私慾にくるしめられ、世俗のいやしきならはしにまよひて、人の道を知らずして、一世を終らんこと、かへすがへす口をしと思ひ、かれて心を用ふべし。

◎聖人の書をよみ、道をこのみて、日を送る人は、誠に諸人にすぐれ、一生の間、常に樂しみて、思ひで多き世なるべし。かくのごとくならば、人とうまれたるかひありて、朝にすでに道をきいば、夕に死ねども、さらにうらみあるべからず。貧賤にして、時にあはざるは、憂ふるにたらざるべし。もし、聖人の道をまなばずして、道を知らずんば、此の世にいける時は禽獸と同じくして、人とうまれたるかひなく、死して後は、草木とおなじくくちはて、人のほむべき佳名を残すことなく、後世にいたりて、知る人なかるべし。われも人も、皆、かくのごとくなれど、人と斯く生れし身を、とり

けたもの草木に同じくせんこと、ほいなきことならずや。これを口をしと思はば、あに、此のうれひをまぬかるべき道なかるべきや。人の身は、ふたゝび得がたし。むなしく、此の世を過すべからず。

◎書をよみ學問をせんとする人あれば、彼のきらふ人、色々いひさまただけて、學問することをして、まことぞと心得て、學問をやむる人多し。又、我が子に書をよませんとするに、かのきらふもの、書をよめば、病者になり、氣へり、いのちみじかくなるなどいひて、おどせば、おやは、子をいつくしむ心ふかくして、もし、左もあるべきかと思ひて、書をよませざるゆゑ、其の子は、一生文盲におろかにて、身をはる。あはれむべし。

◎書をよまざる人は、書をよむ人をきらひにくみて、書をよめば、氣へり、病者になり、心うつけてぬるくなり、出家長そでのごとく、武道もよわくなるといひてそしる。書をよむ人、これをきいて、いかりあらそひ、口論となり、たゝかひに及ぶこと、其のためしあり。凡人は、ひとの我に同じきをよるこび、我にことなるをにくみ、わが知らざるを以て、人の知るをそしる。是れ、凡人のつねの心なり。かゝるひがごとを聞きて、いかりあらそふは、われも亦、彼のおるかなる人と同じくなるは口をし。書をよみ學問するは、かゝるおるかなる人になるまじきがためなり。愚人の學問をそしり、

我をおかすなば、不智なる故なりと思ひて、あはれみゆるすべし。いかるべき理にはあらず。又、愚人のあだごとを云ふとて、我が心にかけてあづかるべからず。聖人は、かゝる頑なる人をあはれみて、いかりにくみ給はず。是を以て則とすべし。

◎俗人の學問をそしるは、學者、書をよんでも、道を行はずして、かへりて高慢にして、みづからほこり、人をあなどりて、心さまあしくなりゆき、學びたる益なきが故なり。學者、つゝしみて身をかへりみるべし。書をよむによつて、かへつて、かくのごとくなる小人となるは、くちなし。

◎我が才にほこり、自ら是として、人をあなどり、人の才智あるを取用ひず、只、我が才智のみを用ふ、古語にも、自ら用ふれば即ち小なりといへり。諸人の智を用ふるは大なり。われ一人の智を用ふるは小なり。我が學才にほこり、人をあなどるは、是れ、才學のために、わが徳をそこなはるゝなり。かゝる惡徳あらんよりは、才學なきが、はるかにまされり。聖賢の書を多く讀んでも、道に志なくして、不徳なるは、無學なる者の、心あしく道にそむくよりも、其のつみ猶ふかし。學者、此の如くなれば、學をきらふ俗人の言に、學問は益なし、かへりて善ありと云ふ、其の證據になりて、學問の道の害となる。つゝしみて、學をそしる俗人の證據にならんことをうれふべし。

◎學者は、まづ、孝弟忠信を先として、常に善を好み、人を愛するを以て志として、日々に、つとめて善を行ふべし。書をよむをば、第二義とすべし。第一、善を好まざれば、書をよんでも、道を行ふべき基なし。萬巻の書をよむとも、無用のことなるべし。大學誠意の章を、よく味ひて、善を好み悪を嫌ふに誠あるべし。

◎學者志を立つること、眞實なるを以て本とす。只、道學の實をつとめて、道學の名を好むべからず。名間のため、わづらはさるるはいやし。天地の間に、我が身ほどしたとき物なし。學問せば、只、身のためにすべし。名の爲にすべからず。しかれども、からやまと、いにしへ今、道學の名をむさぼる人多し。名を好む學者は、形は善人に似たれども、善を好むの誠すくなし。位も徳もなくして、我が身を自ら置くこと甚だ高く、賢人君子の模様をなし、其の身に應ぜぬ言を出し、ふるまひをなせり。みづから其の分量を知らずして、古今をそしり、人の小過をとがめ、不能をせめ、刻薄なること。無學の人より甚しく、人をあはれむ心うすし。不仁と云ふべし。人情時變をしらすして、古禮を、當世に直に行はんとす。不智といふべし。もし、かくのごとくならば、時俗の耳目をおどろかして、道學の名を得ても、益なかるべし。無學なる人、かゝる學者を見ては、儒者は一向に偏にして、國俗と

人情にそむき、時宜をしらざる無用の者と思へり。是れ、道學のますますたれる所なり。明の陳繼儒が、儒は眞ならんことを要む、高からんことを要めずといへり。儒者も亦しかり。儒者は、只、道を信じて、直實なるを貴しとす。人に高ぶりて、誠すくなきは、いやしむべし。

◎本朝の儒術、古來二千歳、寥寥たりといへども、太平も久しければ、世の人文も、いよいよ、やりやく開けぬべし。しからは、今より百年の後は、文字の習も拙からず、義理の學も、大に明らかになるべし。文明の國となりて、誠に君子國の名にかなふべし。只今より後、學術の正しくして、いやしからず、學者の志眞實にして、聖人の道をあつたふとび信ぜんことをこひれがふのみ。

大和俗訓 卷の三

心術 上

心は、身の主にて、萬事の根本なり。此の故に、心正しからざれば身をさまらせずして、家をとりのへ、人をなさまめがたし。たとへば、草木の根堅からざれば、枝葉をかえず、家の主不徳なれば、家を

さまらざるが如し。心を正しくする道は、まづ、善をこのみ、悪を嫌ふこと、眞實なるを本とすべし。心の内に、善をこのむ誠なく、悪をきらふことまめやかならずんば、猶悪人の境界をまぬかれがたきゆゑ、心を正しくすべきやうなかるべし。是れ、大學の道、心を正しくせんとほつしては、先づ其の意を誠にするにあり。既に、善をこのみ悪をきらふこと誠あらば、心を正しくすることやすかるべし。心を正しくするとは、心よりおこる所の喜・怒・哀・樂・愛・惡・怨の七情、よきほどに過不及なくして、かたおちざるを云ふ。喜ぶべくしてよろこび、其の喜すべからず。いかるべくしていかり、其の怒過すべからず。自餘も亦かくのごとくなるべし。七情過不及なくして、かたおちざれば、心の内とどこほりなくして、常に和平なり。是れ、心正しきなり。

◎尙書曰、人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中。是れ、いにしへの大聖虞舜の帝の、天下を禹王と申せし聖人にゆづらせ給ふ時、天下を治め給ふ心法を傳へ給ふ御教なり。人心とは、人の耳目口體の形氣の好む所によつておこるを云ふ。形氣の好む所とは、目に色をこのみ、耳に聲を好み、口に味を好み、形には安らかなることを好むを云ふ。又、よろこび、いかり、かなしみ、たのしみ、このみ、にくみ、れがふの七情も、是れ、形氣よりおこる人心なり。うゑて食をこのみ、寒くして衣をもと

め、つかれて形をやすむるの類。又、七情も、皆是れ、人情の、なくて叶はざることなれば、聖人といへども、人心なきことあたはず。然れども、衆人は、耳目口體の好むにまかせ、七情のおこるにまかせぬれば、ほどよきことをわすれ、たちまちに、私慾にながれ、悪におちいる。故に、人心はこれ危しとのたまふ。あやふしとは、たとへば、小兒を火のはたに置きたる如く、酔へる人の、がけのほとりおち入らんとするが如し。道心とは、仁義禮智の本性よりおこる善心なり。道心惟微とは、微は、すこしきにして、かくるなり。人心は、形氣よりおこる故、外にあらはれうごきて、其の勢さかんになりやすし。道心は、心底にかくれ、かすかにしてあらはれがたし。故に、道心は惟微とのたまふ。人心は、さかんになりやすく、道心はかくれやすし。二の者、胸中に相まじりて、其のをさめやうをしらざれば、人心は、いよいよ危くして、人欲にながれ、道心は、彌かすかにして、つひに、人心におほはれてほろぶ。こゝにおいて、人心をおさへ、道心をたもつ道なくんばあるべからず。惟精とは、人心道心二の閒をわかつて、明らかにくはしくしるなり。惟一とは、すでに、人心道心をわかち知れば、專一に、道心を主として、人心のあやふき方にまかせざるを云ふ。かくの如くなれば、一心のしわざ、皆、道心より出で、人心は、道心の下知にしたがふ。允執厥中とは、人心のなす

ところ、耳目口體七情のわざ、皆、過不及のあやまりなきを云ふ。是れ、道理の至極にて、目あてにする所なり。惟精惟一なれば、よろづの身のわざ、皆、過不及のあやまりなくして、よきほどの中になふなり。飲食ふわざを以ていはば、酒食をこのむは、人心なり。酒食を過すべからずと思ふは、道心なり。酒食をこのむ心にまかせねれば、たちまち、威儀を失ひ、脾胃をそこなふにいたらんす。是れ、人心は危きなり。酒食を過せば、身の害にならんことをおそろ、道心はありといへども、人心さかんれば、おそろ、心は、おのづからかすかにして、あらはれがたし。是れ、道心惟微なるなり。かくの如くに、酒食を好む心にまかせ、おそろ、心かすかなれば、たちまち、酒食をほしいまいにすごし、おそろ、心はなくなりて、つひに、人欲にかたず。然るに、人心のわがまゝなると、道心のつゝしみあるとの二を明らかに知りてまよはざるは、惟精なり。すでに、酒食の、過ぎて損あり、節にして益あることをくはしくしらは、專一につゝしみて、道心を主とし、人心のむさぼりこのむ欲をいましめおさへて、おのづから過不及のあやまりなからしむべし。すべて論ずるに、人心惟危、道義惟微は、人心道心二の者の有さまなり。惟精惟一は、心をあきらめ、道心を主とする工夫なり。誓執ニ厥中一は、中は、過不及なき至極の道理なり。必ず、惟精惟一の工夫ありて、過不及の過

なき道理を失はざるべしとの意なり。是れ、大聖人の、天下をゆづり給ふ時、傳へ給へる大事の心法なれば、眞理至極せるなるべし。此の十六字は、萬世心學の教の根源なり。王公より以下庶人にいたるまで、皆、たつとんで、よく心得、受用あるべきことなるべし。

◎天地の、人をあはれみめぐみ給ふこと、かぎりなし。食物・衣服・居所・器物、もろもろの、人の身を養ふ物を生じてあたへ給ふ。もろもろの人、是をとりて用ひ、我が身をやしなふ。天下の人、たかきもひき、一人も、其のめぐみを受げざる人なし。其の恩のふかく高きこと、海山にもくらべがたく、言語にも述べがたし。又、藥物を生じて、生を救ふ。凡そ、世にあらゆる物の物、人の身を養ひ助くる品々、多きこと、あげてかぞふべからず。是れ皆、天地の、人をあつくめぐみ給ふ所なり。天地の禽獸をやしふことは、人を養ひたまふ百分が一にもあらず。其の上、禽獸は人にころされて、食と成り、草木はきられて、用となる。然れば、人の、萬物より貴くして、天地のあつきめぐみを受くること、思ひしるべし。かくのごとく、天地の恩をあつくかうぶりても、思なる人はしらす平生、一の善事をもなさずして、天地につかへ奉り、恩を報ずる道を行はず。いはんや、不仁にして天地のめぐみやしなひ給ふ人物をそこなひやまして、天地の生理を妨げ、天地の物をつひやし、天地の

御心みこころにそむくをや。是れ、天地の恩を知らず、天地に不孝ふかうにして、人道じんたうを失へりと云ふべし。天道てんたうおそるべし。我輩わがら愚おろにして、天地の大恩たいおんの萬一ばんいつを報ずるほどのちからこそなくとも、せめて、天地の道みちにそむかず、天地の生じ給ふ物をそなはざるべし。古人こじんは、天道の、眼前がんぜんにあることをしりて、朝夕あさゆふおそれなしてそむかず。今の世の人よも、亦、かくのごとくなるべし。詩に曰く、天の威おをおぢて、こゝにこれをたもつといへり。學者がくしやは、つねに天道をおそるゝを以て、心とすべし。人道は、かならず、かくの如くなるべし。

◎つねに、心の内をかへりみて、一點の私欲しよく邪念じゃねんあらば、はやく去るべし。私欲しよくとは、名利色貨みやうりしきくわの欲よくとて、名聞みやうもんを好み、利分りぶんを好み、貨かを好むの類、井に、耳目口體の好む所の、身に私わたくしする慾よくをいふ。邪念じゃねんとは、人をしへたげ、人といかりあらそひ、我が身にほこり、人をあなどり、人をそれみそしり、人にへつらひ、人をあざむきいつはるのたぐひをいふ。皆是れ、邪惡じゃあくの心なり。もし、是等のことつゆばかりもあらば、すみやかに去るべし。心を害がいすること、甚しければなり。又、氣質きしつの偏へんあらば、勝つべし。氣質の偏へんとは、生れつきにかたおちたる所あるをいふ。氣きのあらしと騒さわがしきと、又、やはらかすぎてもよきと、或は、はやすぎると、にぶくゆるすぎたるのたぐひ、或は、生れつき

で、いかりおほく、怒おこおほきのたぐひをいふ。是れ皆、氣質の偏へんなり。心を害す。凡そ、氣質のあしき所へんくわを變化へんくわすること、きはめてかたし。平生へいせい、心を用ひて、是に勝かたずんばあるべからず。又、あやまちあらば、すみやかに改むべし。過あやまちとは、たくみて悪あくをするにはあらず、是非せいひをしらずして、不意ふいに道理だうりにそむくをいふ。氣質の偏へんにより、私慾しよくの妨さまたげによりて、過あやまちをなすこと多し。人聖せいじん人にあらず、誰たれも過多かたし。過あやまちとしらば、速すみやかに改めて、善ぜんにうつるべし。やぶさかなるべからず。音ねがなりとは、過あやまちをなしてみ、改めかゆるを云ふ。凡そ、私慾しよく邪念じゃねんと、氣質の偏へんと、過あやまちと、此の三者ありては、心術しんじゆつを害す。心を正しくし、道を行はんとすれども、是等の過あやまちありて去らざれば、徳とくにすゝむべきやうなし。たとへば、田を作るに、莠はぐさを去らざれば、水をそそぎ、こやししても、莠はぐさのみしげりて、苗なへに益えきなし。まづ、莠はぐさをさりて、水と肥こやしを用ふるがごとし。又、身の病やまひを去りて後、補養ほやうするが如し。

◎人にまじはるに、愛敬あいけいの二を心法とす。是れ、簡要かんえうのことなり。誰たれもしらずんばあるべからず。愛あいとは、人をあはれむを云ふ。にくまざるなり、敬けいとは、人をうやまふを云ふ。あなどらざるなり。人ひとをあはれむは、仁じんなり。人を敬けいふは、禮れいなり。仁禮じんれいを心の内にたもちて、人をあはれみ、人をうやまふこと、忘るべからず。是れ、人に對たいして行ふべき善ぜんなり。父母ふぼをあはれみ、主君しゅくんをうやまふは、い

ふに及ばず、うとき人、いやしき人に對すとも、其の位にしたがひて、よきほどに愛敬すべし。あな
どりおるそのにすべからず。是れ、人にまじはる道なり。

◎およそ、人の心、必ず、仁義禮智の性あるゆゑに、良心時におこる。其の良心をむなしくせずし
て、横め充つべし。おしひろめ充つとは、善心のわづかにおこるをそなはずして、そだてやしなひ
さかんならしめ、其の分量を十分にみて、いづくにも行きわたらしむるを云ふ。たとへば、水のは
じめて、流れ出づるを、せきとめずしてながし、火のはじめてもえ出づるを打消さずして、さかんに
おこらしむるが如くすべし。此の良心をおしひろめば、遠き四海をなさめて餘あり。おしひろめざ
れば、ちかき父母につかふるにだにたらず。是れ、孟子の説、殊に、親切なる教なり。學者、必ず、
服膺して、つとめ行ふべし。

◎仁は、人をあはれみ、物をそだつる善心なり。是れ、天地のめぐみの心をうけて、人の心とする所
なり。故に、孟子に、仁は人の心なりといへり。人ごとに、生れつきたる本心なり。君子は、此の本
心を失はず、おのれを愛する心を以て、人を愛し、人我がのへだてなし。小人は、ひとへに、我が身を
愛して、人を愛せず、人我がのへだてふかし。是れ私慾あればなり。是を不仁と云ふ。人たるものは、

仁を以て心とすべし。不仁の人は、本心を失ひ、人道をほろぼし、天道にそむく。此の故に、人の尤
もいましむべきこと、不仁より先なるはなし。不仁は、天地人のそむく所なり。故に、つひに天罰を
かうぶりて、わざはひあり。其上、子孫までもむくふものなり。天道おそるべし。此の道理、古今
からやまと、ためし多し。たがふことなし。うたがふべからず。

◎易に、天地の大徳を生と云ふ。此の理、よくよくあぢはひてしるべし。生とは、いきで死なず、い
かしてころさず、生々してやまず。此の故に、天地は、萬物をうみてそだて給ふ。萬物の父母なり。
物をあはれみて、いかすことをこのみ、ころすことをきらひ給ふ。是れ、天地の大徳なり。生の理な
り。人は、天地の子なれば、其の心に、天地の大徳、生の理そなはりて、天地のめぐみの心を生れつ
きたり。是を仁と云ふ。仁は、人物をあはれみ、愛するの心にして、是れ即ち、天地の生物の心なり。
萬物は、皆、天地のうめる所なり。其の中に、取分、人倫は、尤も天地のめぐみあつし。萬物の内に
て、いと貴くして、天地の子とする所なり。此のゆゑに、天地の御心にしたがひ、仁心を以て、物を
愛するには、人倫において、ことさらあつくすべし。人倫をあつくするは、是れ、天地の御心に順
ふなり。人倫を愛するにも、次第あり。まづ、父母兄弟を愛するは、仁を行ふ本なり。主君は、父母

にひとし。次に、親類・臣下・朋友、次に、萬民を愛すべし。又、其の次に、鳥けだもの蟲魚を愛して、みだりに殺さず。次に、草木を愛して、みだりにきらず。是れ、人をあはれみ、物を愛する次第なり。されど、又、悪人をころすも、是れ、義にして仁にかなへり。又、樹木も、時を以てきり、鳥獸も、道理を以てころすは義なり。鳥獸草木なりとて、みだりにころしきるは、不仁なり。仁者は萬物を一體とす。故に、人倫はいふに及ばず、物として、愛せざるることなし。孔子も、一樹をきり、一獸をころすに、其の時を以てせざるは、孝にあらずとのまへり。されば、禽獸も、草木も、皆、天地の生ずるものなれば、みだりに是をそこなふは、天地に對し、不孝なりとするべし。人物を愛するに、したしきよりうるときに及び、重きよりかるきにいたるべし。輕重親疎の差別なく、平等に愛するは、義にあらず。墨子が兼愛とて、天下の人を一様に愛するは、父母をも路人と同じくするなり。是れ仁の道を知らずして、義にかなはざるなり。

◎人は、天地の子なり。天地を法として、行ふべし。天地は、別に心なし。萬物をあはれむを以て心とせり。別にしわざなし。萬物をうみ出しやしなふを以て、わざとせり。人も亦、この心をうけて、常に、人にめぐみあはれむを以て、心とすべし。別の念あるべからず。人をたすけつくふを以て、わ

ざとすべし。別のわざあるべからず。故に、天下の人、王公より以下、庶人にいたるまで、日々行ふべき善事あり。善を行ふべき位にあり、時にあたれば、むなしくすぐべからず。是れ、天につかへ奉りて天職をたつとむるなり。

◎仁者は、人を愛す。人我のへだてなし。人を愛せずして、ひとへに、我を愛するは、人我のへだてなり。是れ、私なり。仁者は、私なし。我を愛する心を以て、人を愛し、わがきらふ事は、人にほどこさず、我が身を立てんとして、又、人を立つ。かくの如く、人我をわすれてわかつたざるを、公と云ふ。公とは、私なきなり。仁者の心、つとめずして、おのづからかくの如し。學者は、いまだ仁にいたらず、つとめて、仁を行ふべし。我が心をはかり、人の心をおしはかるに、人の心も、亦、わが心にかはらず。わがこのむことは、人も好み、わが嫌ふことは、人もきらふ。こゝを以て、仁を人にほどこし行はんとせば、まづ、我が心をはかり、人の心をおしはかり、我が好むことは、人に施したたへわがきらふことは、人にほどこさず。かくの如くすれば、人の心にかはざることもなくして、人々、各、其の所を得てやすんず。是れ、仁の行はるゝなり。是を推己及人と云ふ。恕なり。恕は、仁にいたらんとする人の行ふべき工夫なり。仁者はつとめずして、おのづから人を愛す。恕は、つとめて

仁を行ふ。是れ、仁恕のわがちなり。恕の一字は、人の身終るまで、つとめて行ふべき道なりと、聖人のたまへり。

◎人となる者は、天地の心に随ひ、仁愛を以て、心とし行ふべし。己に愛する心を以て、人を愛す、是れ、仁なり、人の心なり。禽獸はおのが身を愛することのみしりて、物を愛せず。人もし不仁にして、只、わが身を愛して、人を愛せずんば、人の心にあらず。禽獸と何ぞことならんや。不仁なれば、人心を失ふ故、其餘の才能のよきことは、見るにたらず。

◎我が身をへりくだり、人にたかぶらざるを謙と云ふ。謙なれば、我が身にほこらず、人にくだりて、問ふことをこのみ、人のいさめを聞きて、我があやまちを改むる故、智をひらき善にうつること、きはまりなし。この故に、古人、謙を以て天下の美德とす。謙のうらはは矜なり。矜は、ほこるとよむ。ほこるとは、我が身に自満するを云ふ。ほこれば、自ら是として、人に求めず。かくのごとくなれば、惡にうつること、きはまりなし。此の故に、古人、矜を以て天下の惡事とす。謙と矜との善惡のこと、前に既にとけりといへども、繰返して、初學の人に知らしめんが爲なり。

◎敬は、つゝしむと訓ず。つゝしむとは、心にいましめおそるゝを云ふ。和語の意は、つゝむなり。

しは、やすの字なり。内につゝんで、みだりに外に出さざるなり。敬しめば、本心をたもちて失はず、行ひなすこと、理にかなひて、あやまりなし。こゝを以て、敬は、一心のまもり、萬善の根本なり。故に、敬しめば身修り、敬しまざれば亂る。萬のこと、敬しまざることなけれ。萬善、皆、つゝしみによつて行はれ、萬惡、皆、不敬よりおこる。故に五常の徳、是によつて立ち、五倫の道、是によつて行はる。こゝを以て、聖學は、敬を以て要とす。故に、聖學の始終、皆、敬を以て宗とす。古來、聖賢の心法、皆、敬の一字を要とす。學者の、尤もつとむべき所なり。又、よくつゝしめば福あり。つゝしまざれば禍あり。白樂天も、禍與福在慎與不慎といへり。身のわざはひは、皆、つゝしまざるによれり。故に、つゝしみは、禍にかつといへり。

◎古語に、人聖人にあらず、誰か過なからん。過つてよく改む、善、これより大なるはなしといへり。程子も、學問の道他なし。其の不善をすれば、速に改めて、善にしたがふのみといへり。不善とは、即ち過なり。過をしりて改むるは、學問の要なり。されども、我が過をせる人すくなし。すべて、凡人は、我が身に私して、其の過と惡とを知らず。よろづ外のこととは、事ごとにしらすとも、さほどのうれひにあらず。我が身の惡と過を知らざるは、はなはだ愚なるかな。是れ、何よりも憂ふ

べきことならずや。身をかへりみ、人の諫をきいて、我が過を知るべし。
 ◎何事も、すぎこのむことをつゝしむべし。このみてやまざれば、道の志をうばはれ、財をつひやし、ひまをつひやす。此の故に、すぐれてすぎこのむことは、禍の基なり。其の大なるをあけていへば、酒食と、色慾と、財利とをこのみてやまざれば、徳を損ひて、後は身をうしなふ。其の餘の事をこのむも、亦しかり。凡そ、このむことは、多きをいむ。すくなけれども、すぎてふかく好めば、又、わざはひとなる。古人の言に、このむ事を見て、其の人の善悪を知るといへり。好むこと、つゝしむべし。

◎方孝孺が、樂未既、而憂繼之者、人之欲也といへること、あにしからずや。酒食好色などむまほりたのしみて、其の樂いまだつきざるに、はや、其のわざはひうれひ忽ち出来て、酒食にやぶられ、色慾にそなはる。皆是れ、人欲よりおこる。欲をすくなくするの工夫は、欲をこらへて、好む所、十分にいたるべからず。只、六七分、或は、七八分に至らば、はやくやむべし。十分にいたれば、必ず、わざはひ出来て、後悔すれども益なし。古語に、酒は微酔に飲み、花は半開に見るといへるがごとくなるべし。善誘文にも、一時我が心に快きこと過ぐれば、必ず、身のわざはひとな

るといへり。

◎民を司る人は、民の父母なれば、民をあはれむ心を本とすべし。民の心を以て心として、民の好むことをこのみて施し、民のきらふことをきらひてほとごさず、父母の子を思ふが如くする故、これを民の父母と云ふ。民の上に立つ人は、民をやしなふ職分を、天よりさづけ給ふことをしりて、天道にしたがひ、民をくるしましむべからず。我れ一人の樂なきはめんとて、おほくの人をくるしむるは、天道の御心にそむけり。天道おそるべし。すべて、人は高きもひくきも、同じ人なれば、民の樂苦も、我と同じ。我が心を以て、民の心をおしはかるに、ちがはず。民のうれひ苦しみを思ひはかりて憐むべし。不仁なる人は、民をあはれまらずして、民を愛すれば、おこりて、上をあなどるとて、民をあはれまらず。是れ、不仁の人のいふ詞なり。すべて、民はすなほなる天性あり。上なる人、誠を以て民を愛すれば、民も、亦必ず、感悦して、わだかまらず、誠を以て上につかふ。上より、不仁にして、いつはりを行へば、民も、亦必ず、いつはる。此の感應の理、からもやまとも、古も今も、かはらず。うたがふべからず。民をいつくしみ、其の上に、法を嚴にして、民のひがことを禁ずれば、上を侮らず、おこるべきやうなし。

◎民の司となる人、我れ一人のたのしみを好むべからず。民と共に、樂むべし。是れ、まことの樂なり。天下の人は、たかきもひくきも、皆、我が兄弟の理ありて、本は一體なることを知り、我が心をおしはかり、聊か、人のうれひくるしむことをなすべからず。貧窮にして、うきこゆるもの、病者かたわなる者、世をわたりかたて、うれひくるしめる鰥寡孤獨の類をば、我がちからを以てすくふべし。鰥寡孤獨とは、老いて妻なきを、鰥と云ひ、老いて夫なきを、寡と云ひ、いとけなうして父なきを、孤と云ひ、老いて子なきを、獨と云ふ。此の四の者は、世の中の困窮せる臣にて、人のめぐみをうくべきたよりなく、うきこえする人なり。いとあはれむべし。いにしへの聖人の政は、まづ、かやうのふびんなる民を、はやくめぐみ給ふ。かへすがへす、我が身ひとつを愛して、人を愛せず、おほくの人をくるしむべからず。かりにも、人に妨なく害なからんことを思ふべし。人のうれひくるしみを救ひ、人のためにはかりて忠あるべし。疎略にすべからず。位ひきり人も、我に財ありて、ほどこす力あらば、貧窮をすくひ、鰥寡孤獨のたよりなく苦しめる人を、分限にしたがひて、あはれみたすくべし。財をなすべからず。次には、禽獸蟲魚草木に至るまで、ひろくあはれむべし。是等は天地の内にて、我が兄弟の列にはあらざれども、同じく天地の内に生ずる物にして、

もとは一氣なれば、同類の思をなして、みだりにそこなふべからず。但し、人に妨ある禽獸をば除くべし。是れ皆、仁を行ふ工夫なり。下にあるいやしき匹夫のともがら、諸人の補ひにならんことは、もとより力に及ばざる所なり。されども、いやしくして、下にある者も、仁愛の心だにあらば、其の分に應じ、其の力にしたがひて、之を用ひて、人を救ふこと、日々に多かるべし。然れば、仁愛は、いやしき人も、心にかけて、つとめ行ふべきことなり。是れ即ち、天地の御心にうけしたがひて天地につかへ奉る道なり。

◎陰徳とは、善を行ひて、人にしられんことを求めず、只、心の内に、ひそかに仁愛をたもち行ふといふ。古人の曰く、陰徳は、耳のなるがごとし、我ひとり知りて、人知らず。およそ、人の患をうれひ、人のよろこびをよるこび、人をあはれみめぐむに鰥寡孤獨の、たよりなき人を先にし、人の飢ゑたるをすくひ、こごえたる人に、衣をあたへ、つかれたるをたすけ、病者をすくひ、道橋を修理し、人に害あるをのぞき、人に利益あることをなし、人の中を和げ、人の善あるを譽め、人の過を隠し、人の小過をゆるし、人の才藝を用ひすいめ、みだりに人にいからず、人をうらみず、人のいかり争をやめ、かりにも、人をそしらず、人をあなどらず、人をうばはず、人を妨げず、人の善をす

すめ、人の惡をいさめ、禽獸蟲魚をくるしめず、妄みだりにころさず、草木をみだりに切らざる、皆是れ、陰徳いんとくなり。凡そ、陰徳は、人知らざれども、天道てんだうにかなふ。故に、後は必ず、わが身のさいはひとなり、子孫の繁榮はんえいを得る道理だうりなり。かるがゆゑに、さいはひを求むるに、是にまされる祈禱きたうなし。天道の、善にさいはひし、惡にわざはひし給ふ理は、古今和漢、明白ここんわかんなりといへども、凡人ぼんにんは、是を知らずして、善をこのまず、惡を行ひ、ひがことをなして、さいはひを求め、我が身の祭るまじき淫祠いんしにへつらひいのる。いにしへを考ふるにちからなくば、せめて、近き古と、今の世の中を廣く考へ見て、善を行ひて益えきあると、みだりに神と人とにへつらひて、益なきをしるべし。されども、君子くんしの心は、福さいはひをもとめんために、陰徳いんとくを行ふにはあらず。陰徳を行へば、求めずして、福は其の中うちにあり。◎よく、後來こうらいのことをかかれてしるを、先見せんけんの明と云ふ。是れ、知者ちしやのしる所、たつとぶべし。我輩われらの愚者ぐしやは、先見の明なくして、やゝもすれば、あやまち多く、後悔こうかい多し。愚なりとも、心しづかに、よく思案しあんせば、此のうれひすくなかるべし。後悔こうかいすくならんことを思はば、常に、思案しあんをこのみて、みだりに事を好まざるべし。事を好めば、事多くなり、あやまち多く、悔多し。◎我が身の慾よくをほしいまゝにするより、大なる禍わざはひなし。人の非をそしるより、大なる惡なしと、

古人いへり。此の二は、義理ぎりに乖そむくのみならず、身を亡ほろす道なり。常に、心にかけて、いましむべし。

◎凡そ、平生の心法は、眞實しんじつにして、偽いつはりなかるべし。中庸ちゆうちゆうに、誠天之道也、誠ニスル之者、人之道也といへり。誠天之道也とは、陰陽のしわざ、日月のめぐり、春夏秋冬の次第、いにしへ今かはらず、草木の、春生じ、夏長じ、秋みのり、冬をさまりて、年々としとしにかはりなきも、皆是れ、天道の誠まことなり。誠ニスル之とは、人のちからにて、つとめて誠まことにするを云ふ。人は、天地の子なれば、天地の誠を法まとしたがひて行ふべし。是れ、誠ニスル之は人之道なり。孔子も主トス忠信しんとのたまへり。此の意は、誠を以て、人の心の主あるじとすべしとなり。忠信ちゆうしんは、即ち、人の誠なり。誠といはずして、忠信とのたまへるは、心にいつはりなくするは、忠ちゆうなり。言と事とにいつはりなくするは、信しんなり。誠は、天理てんりの自然ぜんを云ふ。忠信は、人のつとめ行へる誠を云ふ。理は一にして、おのづからなると、つとむるとのわかちあり。程子ていしも、人道は、只忠信ちゆうしんにあり、誠ならざれば、物なしといへり。君父くんぷにつかふるにも、誠なければ、忠孝ちゆうかうにあらず。萬の事、誠なければ、さばかりの善事ぜんじをなすといへど、偽いつはりとなれば、實事じつじにあらず。つとめ行ふも、あだごとなり。是れ、無物むぶつなり。善事をつとめ行はば、名利みやうりの

ためにせずして、誠を以て行ふべし。是れ誠の善なり。

◎言と行と、心と言と、表裏なかるべし。よるすのこといみじくとも、誠なくんば、玉の盃のそこなきが如くなるべし。吉田の兼好が、偽りても賢をまなばんを、賢と云ふべしと云ふ。此のことは、甚だ、教に害あり。およそ、人道は、只、忠信にあり。すでにいつはりあらば、其の餘は見るにたらず。偽りて賢をまなぶ、是を小人と云ふ。なんぞ、賢といはんや。漢の王莽、宋の王荆公など、いつはりて賢を學びし故、はじめは君子の名を得るといへども、つひに天下をうばひ、天下を亂れり。是を賢といはんや。君子の道は、純一にして偽なかるべし。かりそめにも、いつはれる念を心にさしはさむべからず。たとひ、外に善を行ふとも、内に誠なくば、君子の道にあらず。故に、身をさむるには、只、一すぢに誠の道を行ふべし。もし、凡夫のためにいばば、偽りてするも、まことにするも、力を川ふる其の勢は同じければ、とてもものことに、只、まことを行ふべし。偽りて善を行ふは、あらはれて悪をするにまされども、誠あらざれば、天道人道にそむきて、其のつみふかし。誠いたれば、天地をうごかし、鬼神を感ぜしめ、人心を和ぐ。

◎およそ、人の一念の不善も、かならず、天に通ずる理あり。天は高きに居て、ひくきにきくとい

へり。上天をあざむくべからず。おそるべし。人をあざむけば、つひに、其の偽あらはる。内に誠あれば、必ず、外にあらはるといへり。下人をあざむくべからず。恥づべし。天を欺き、人をあざむくは、共に、わが心をあざむくによれり。我が心に不善としりながら、これを行ふ、是れ自ら欺くなり。我が心をあざむくべからず。凡そ、天と人と、我が心と、皆、あざむくべからず。只、一すぢに誠あるべし。こゝを以て、君子の心は、つねに、青天白日の如くなり。小人の心は、常に、陰暗にして、はかりがたし。

◎易に、懲忿望怒といへり。忿をこらすとは、いかりをおさふるなり。怒は、陽に屬して、火の物をやくが如し。おこりやすくして、人を害し、我が心の徳をそなふこと甚し。いかる時、先づいかりを忘れ、心を和平にして、後、理の是非を見るべし。又、いかる時、言をいだすべからず。いかる時、言を出す詞は、必ず、ひがごとありて、後悔多し。つゝしみこらへて、言ふべからず。人のいふこと行ふことあしきことあらば、いからずして、彌、氣を平らかにし、心を和らかにして、其の是非を詳にのぶべし。人隨はずとも、いかりて心を動かし、氣をあらくすべからず。心氣和平ならざれば、たとひ、其のいふこと、理に當るとも、其の心は、まづ非なり。いはんや、いかりて心をうごか

せば、其のいふこと、理にあたらざるをや。怒とは、只、財寶をむさぼるのみにあらず、名利・酒食・好色、或は、淫樂・器物・酒宴・佚遊を好みおぼれて、我が私をなすは、皆、怒なり。怒をふさぐとは、怒心おこらば、はやく、其の怒をおさふるを云ふ。すでに、怒さかんになりぬれば、心まよひて、怒にかちがたし。怒のはじめておこる時、はやくふさげば、ちからを用ふることすこしにて、其のしるし多し。怒は陰に屬す。たとへば、水の人をおぼらすが如く、おぼれやすし。およそ、萬の悪は、多くは、いかりと怒よりおこる。七情（喜・怒・哀・樂・愛・憎・懼）の内の二者、尤も害多し。我が身をそなひ、人をそなふ。おそるべし。又、怒と怒との二は、養生の道に甚だ害あり。

◎七情は、皆是れ、人情なれば、なくてかなはず。過不及なく、よき程なるは中なり。過ぎたるは、尤も害多し。不及も、亦、理に合はず。人をあはれむは、誠に善なり。されど、我が心にあへりて、妻子・從妾などを、ひたすらに愛し過し、あくまで恩をほどこすは、道より出でたる愛にあらず。是れ、私の心の甚しきなり。愛におぼれては、其の人の悪しきをしらす、愛すぐれば、其の人必ずおごりて、道にそむく故、かへつて、其の人のわざはひとなり、又、わが禍となる。いかるべきを怒るは、人の不善をいましむるの道なり。怒るまじきに怒り、或はいかるべきことにも、いかり過ぎて

は、人をそなひ、我が心をそなふ。にくむこと過ぎぬれば、其の人の善あるを知らずして用ひず、小のあやまりを、大に言ひなして、せめはたれば、其の人うらみそむく。是れ皆、情の過ぎたるなり。又、あはれむべきをあはれまざるは、不仁なり。是れ尤も、不善なり。哀むべきをかなしませず、樂むべきをたのしまざるは、ひたすら、情なしといふべし。是等は、皆、情の不及なり。七情おこれども、過不及なくして、禮義にとどまるべし。是れ、古人の、發乎情、止乎禮義と云へるなり。およそ、天下の道理は、過不及なき中にいたるが、至善にして、是れ、道のある所なり。食する一事を以ていはば、過不及なく、よき程に食へば、身をやしなふ。是れ、中なり。是れ、道のある所なり。過ぐれば、脾胃をやぶり、不及なれば、身の養たらず。是れ皆、中にあらず。人の血氣めぐらざれば病とす。人の心めぐらざれば愚なり。これ、古語なり。心めぐるとは、事に當りて、心を用ひ、思案するを云ふ。運動するなり。孟子に、心の官は則ち思ふといへるが如し。思案せざれば、心めぐらずして是非をわかたし、愚なり。事に當りて、心をめぐらし、よく思案すれば、是非をわかたし、愚ならず。人の、善惡をわきまへずして、愚なるは、思案せざればなり。

◎欲を忍ぶこと、つとむべし。忍ぶとは、こらふるなり。學者、もし、欲をこらふるに、力を用ひず

んば、學べる甲斐なし。力なしといふべし。平生の學力、こゝにおいて用ふべし。

◎子弟及び奴僕に對して、其の過をたださば、教を本とすべし。いかりを先だつべからず、斯の如くなれば、子弟奴僕の心を得て、恨なく、したがいやすし。是れ、子弟奴僕をいましむるの要法なり。

◎智は、さとるとよむ。心の明らかなるなり。心あきらかにして、くもりなければ、萬の道理によく通じ、是非善惡をわきまへて、まよはず。たとへば、燈明らかにして、よく物を照すが如し。智なければ、善をこのめどもくらく、まよひて、行ふべき道をしらず、あやまりて、ひがごと多し。又、智なければ、人を知らず。君子をすて、小人を用ふれば、禍多し。智あれば、よく道理の是非をわきまへ、非義を行はずして、身をたもつ。よく人の善惡をしりて、君子をちかづけ、小人をしりぞく。是れ、身をなさめ、人をなさむるに、益ありて害なし。此の故に、智は、人身の大寶なり。心明らかなるは、智なり。心明らかければ、よく人の善惡を知る。樊遲問知、子曰、知人。これ人を知るは、知の明らかなる所なり。

◎平生の氣象は、從容としづかに、和樂なるべし。輕卒急迫なるべからず。和樂は、人心に生れつきたる天機なり。つねに、和樂を失ふべからず。又、益なきことを思ひて、心をくるしめ、樂しみを

失ふべからず。是れ、不智といふべし。心のかろく速きをおさへ、又、おこたりをいましめ、つねに、心を定め、早からず遅からず、よきほどなるが、心をなさむる法なり。心は身の主にて、萬事の本なれば、つねに、しづかにやすらかにして、妄に動くべからず。心みだりに動けば、亂れて明らかならず、萬事に應じて、あやまち多し。事いそがはしき時は、手足のうごき、口の物いふことは、はやからされば、事に及ばず。心はいそがしかるべからず。手足と、目口耳鼻は、たとへば、下人のことし。心は身の主にて、目口耳鼻手足の事の上あしをただすやくなり。故に、心はしづかならば、思案はなしがたし。およそ、事をなすに、ゆだんにならざることは、緩の字を用ひて、みだりにいそがず、よく思案して、詳に、事の是非をわかちて行ふべし。古人、これを待と云ふ。待とは、事をいそがずして、時をまち、詳に思案して、道理を求め行ふことなり。ゆだんするにはあらず。みだりに、はやく決定すれば、必ず、其の事をしそんじ、後悔あるものなり。

◎凡そ、つとめにたいくつし、久しくつとめがたきは、おほかたは、精力のよわきにはあらず。氣ずぬにして、事をつとむるをきらひ、心いそがはしくて、みじかき故、むづかしく思ひて、はやく退屈するものなり。心しづかにして、事をきらはず、次第に隨ひて、一つづつ、漸につとむれば、久しく

勤めてもつかれず。おこたりなく、たゆみなければ、しづかにしても、はかゆくものなり。

◎色慾名利の念、皆是れ、人情なれば、時として、おこりやすし。其のまゝおきては、徳を害ふ。其のおこる時に、いましむるには、克己の工夫を用ふべし、己に克つこと、尤もかたし。十分のちからを用ふべし。おろそかにすべからず。但し、はじめて慾のおこるきざしにかつこと、甚だやすし。是れ、克己の要法なり。平生、學問し、道義を好む志ふかくば、おのづから、名利色慾の念は、うすくなるべし。天理すゝめば、人欲しりぞく。人欲すゝめば、天理しりぞく。凡そ、物は二ながら、一時に立たざる理なり。

◎心の中は、灑落にして、青天白日のごとく、明白なるべし。心の中に物をたくはへ、おほひくらすべからず。思慮は、ふかくくはしくすべし。あさくあらくすべからず。事をなすには、ふかく思案をこのみて、かるがるしく、はやく決定すべからず。思案は、しづかにしていそがざるをよしとす。はやく決定すれば、必ず、あやまりあり。

◎人の、我に不義無禮なるをば、いかり恨むべからず。それは、人のあやまりなれば、我が心にあつからず。是れ、小人の常情なれば、せむるにたらず。なんぞ、いかりうらみて、かれと其の是非

をあらそふべけんや。只、我が身をかへりみて、我が不義無禮なるを、みづからせむべし。人をとがむ可らず。我が身をかへりみたまむれば、人のうへなとがむるにいとまなし。

◎尙書曰、必有忍、其乃有濟、有容、德乃大。忍ぶとは、堪忍するなり。堪忍すれば、怒をおさへ、事をやぶらずして、禍なし。人我の閒和平にして、萬事とのふ。故に、有濟と云ふ。古語に、忍過きて、事堪喜といへり。堪忍すませば、必ずよろこびありとなり。人のあしきを堪忍せざれば、怒起り、人にあらそひて、人我の閒和順ならず、世に立ちがたし。堪忍すれば、あらそひ出來ず、口論にも及ばずして、恥辱なし。心中平らかにして、樂多し。有容とは、心廣くして、人の善をば取りて用ひ、人の過あるをゆるすを云ふ。容るゝことあれば、其の徳の器大なり。たとへば、大なる器の、其の量ひろければ、物を入るゝこと多きが如し。古人の詩に、海闊從魚躍、天空任鳥飛といへるがごとし。忍は、力を川ひて堪ふるなり。容は、其の徳ひろくして大なれば、忍ぶはいふに及ばず。まづ、務めて忍びて、其の工夫熟して後、有容にいたるべし。忍は、生しきなり。有容は、熟するなり。されど、はじめより、容の工夫もあるべし。人の善を取り、人の過をゆるすこと、はじめよりなくんばあるべからず。